日本文化名著選

創元社版



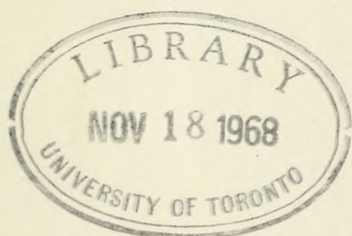
日本文化名著選

近世文學史論

文學博士

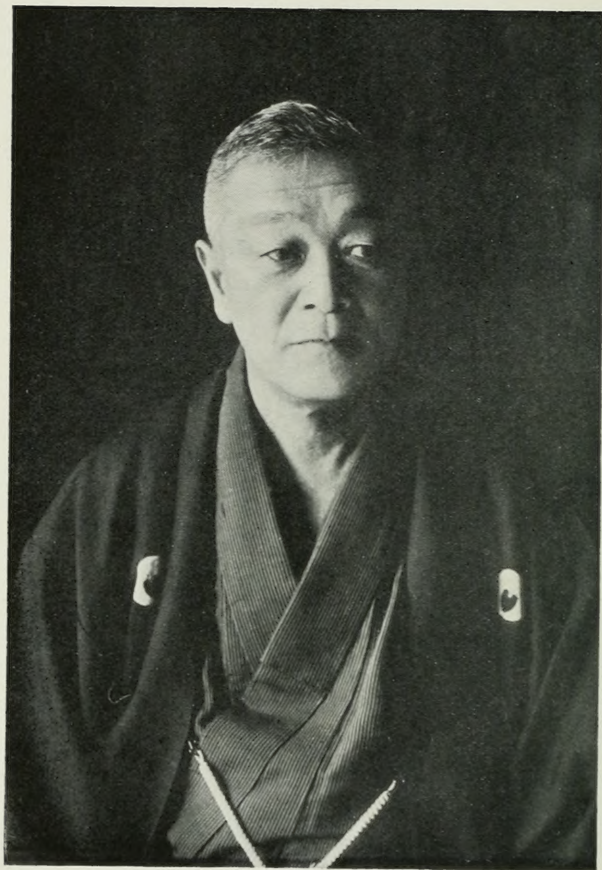
内藤湖南

創元社版



內藤湖南博士略傳

慶應二年七月十八日秋田縣鹿角郡毛馬內町に生る。名は虎次郎、舊南部藩儒內藤調一氏の次男である。秋田縣師範學校高等師範科を卒業後暫く同縣訓導となつたが後上京して大內青巒居士の許に投じ「明教新誌」の編輯に任ず。その後雜誌「日本人」及び「亞細亞」の編輯に從事し、或は大阪朝日新聞、臺灣日報、萬朝報の記者となる。又滿洲支那の各地を視察し、支那問題に關して論壇一流の聲譽を獲たり。明治四十年京都帝國大學文科大學の講師、同四十二年文科大學教授に任ぜられ東洋史講座を擔任す。大正十五年退職以後は京都府相樂郡瓶原村に屏居し讀書生活に入つたが、昭和九年一月より胃潰瘍を患ひ同年六月廿六日永眠す。享年六十九、法名は文明院靜處湖南居士、洛東東山法然院に葬る。文學博士、帝國學士院會員。



內藤湖南博士

例言

一、本書は内藤湖南博士が明治三十年に出版されたる「近世文學史論」を上梓したものである。

一、「近世文學史論」は後世支那學者として大成された博士が日本近世儒學の系流を主として述べられたもの、その文や誦すべく、その學亦永く稱さるべきものである。加ふるに博士晩年の學殖を傳ふるに足る「山崎闇齋學派に就いて」の一篇を附載した。これは故博士の嗣子乾吉氏の御配慮によるものであり、光彩を更に加ふるを得たるは編者の至福とする所である。尚これは故博士の講演筆記によつたものであり、出雲路通次郎・石濱純太郎二氏の校覽を經た。

一、解題は特に故博士に親炙された石濱純太郎氏を煩はした。同氏には其の外本文校字等種々御盡力を辱うした。本書成るに當つて同氏初め關係諸氏の御好意を深く感謝する次第である。

昭和十四年五月一日

日本文化名著選刊行同人

近世文學史論序

本書は幕府三百年間の儒學國學の變遷を評論せる者、題して近世文學史論といふは當れりや否、これ少しく惑を免れず。著者云ふ、三百年の文學、上行する者あり、儒學國學の若き是なり、下行する者あり、戯作の若き是なり、上下に通ずる者あり、美術工藝の若き是なり、今は特に其の上行する者を取り、他の下行する者と上下に通ずる者とは、異日更に大綱を提擧する有らんと、乃ち本書は目して以て近世文學史論の初卷と爲すも可、或は又此れ即ち正編にして別に續編の出づべき者と爲すも可、題名に就ては種々の解釋を許さゞる能はざるべきも、近世文學史に關する重要の叙事文、將た議論文たるに疑なく、其語簡にして意長きを以て、一讀或は晦昧を感ぜんも、愈々讀みて愈々明白を覺ゆ

べく、且つ參考書として座右に置くの便もあり　儒學國學の一般文學に於ける位置、之を譬ふれば猶ほ玄關より座敷に進むが如きのみ、興味は勝手口より臺所に入り、書生の下婢と爭ふを視、井戸端會合の擾々を聽くに在るべきも、玄關より順序を履まざれば、家の結構遂に料り得ざるべし　西洋の文學史多く詩歌小說に偏し、文運の本素幷に大勢を知り難きの嫌なしとせず、是れ之を編述する者の眼界狹きが故にして、眞の文學史は必ず先づ廣く大處を觀察するの要あり、文學の範圍は層一層廣濶ならずんば有るべからず　意ふに彼の三百年は三百年を以て終始し、封建の下に發現せし文學は、封建の沒影と共に沒影し、昔日の文學再び目擊す可らざる者の如く然り、然るも峩々山嶽を欺く氷塊の消融して川と爲る、大變化は則ち大變化なるも、成分に於て曾て差違あらざると等しく、封建壞れて郡縣と成れるも、現下百般の事一々系を尋ぬるを得、文學の大變化といふも、寧ろ形の更まれるに過ぎざるを見る。前代到る處に儒者あ

りて、今幾と之れ無きは、これ消えて跡なきに非ずして、教育家といふ新職名の生ぜるなり、前代儒學國學の士流の學問として重ぜられ、今徒だ固陋の輩の職業として輕んぜらるゝは、これ全然事の變革せるに非ずして、法政學といひ文學といふ新學名の起れるなり。儒學は由來多樣に見べき者にして、幕府の初政より夙に治道の要具と爲り、羅山の將軍に仕へしも、法政の顧問として然りしものにて、其の僧に歴せられしは人物の卑かりしが爲めのみ、白石、栗山、皆法政に力あり、東湖の類亦然り、若し夫れ西山の若き、樂翁の若き、直に是れ儒として國政に臨めるなり。兼山、蕃山は經濟に通ぜり、闇齋、藤樹、仁齋、徂徠、後素は教育に長じて哲學に得る所あり、各々一家の見ありき。但だ書の少きや能く網羅して別に自ら見識を立て得たれど、新書の續々到來するに及で、此を讀むに之れ追はれ、相率ゐて讀書家と爲りしが、是に於て漢學あり、精里、二洲、一齋より以降、專ら書を講ずるを旨とし、北山、鵬齋、洪園、錦城等の

才を以てして亦讀書に忙殺され、終生文字に苦めり、拙堂は稍々群を離れりとすべきか、山陽の讀書よりも力を史に灑げるは、亦聊か途を異にせるもの、考證足らずと雖も、縱横に國勢を推斷せるは、國史の用を發揮せりとすべきか。國文學は眞淵、宣長等素より其人に富み、全齋の漢呉音圖は博言學の先驅とすべし。斯の如く儒學國學は今の法政學と文學との前身なるが、法政學としては殊に甚しく形を變じたるの觀あれど、政治家がホメルスの詩、フルタルクの傳に得るあるべくは、漢書に得べき所少しとすべからず、所謂英雄なる者東洋と西洋と頗る相近似し、西洋的の直に東洋的なるもの多きを考ふれば、古風の漢書も實際の法政に裨益なしとせず、大丈夫の精魄、時に庬大國興喪の間に養ふ亦妙とせんか、國學は古來の規制を稽ふるに必要にして、朝廷の事、毎に意を此に致さゞるを得ず。文科大學に哲學、漢學、國史、史學、國文學、博言學あり、高等師範に漢文學、國文學あるが、法政以外の儒學國學は、面目を此間に

保つ者とす。面目は則ち此間に保たるゝと雖も、其の活機活用は盡く新面目を以て現はれ、新舊の間洵に著大の相異あり、畢竟形の變せる者にして、力の存するありと雖も、形の變は實に歴史の表號、前後を比較して優劣を判するも自然の順序なり。判して而して何似、曰ふべし、學問としては前の後に劣る遠きも、學者其人としては前或は後に勝る遠きものありと、新學開けて以來僅かに三十年、此間輩出せる者を以て直に三百年の人物に比するは、對を失ふやに聞ゆれど、昔時とて文運常々進めるに非ずして、時ありて急に盛を致し、或は元祿時代と稱し、或は寛政時代と名くべく、而して明治は即ち未曾有なる長足の進歩を以て名あれば、彼此の較量決して理なしとせず。熟々考ふるに、今は位高く、祿多く、而して信足らざるが如し、數千圓の年俸あるも、偶々同額の他官と比せられて俗吏と異なるなく、寛政の儒官の祿二百俵にして名望一世に高かりしと逕庭あり、法政學にては井上毅氏の若き、勢力ありしと謂ふべきも、

而も斯人や新學よりも寧ろ舊學を以て重ぜられしなり、教育にては福澤諭吉、新島襄の二氏太だ力あり、而も倶に事務に長じて學力の稱すべきなく、昔人の學力亦群に抜けるが如くならず、漢學、國文、國史、博言、今固より嶄新の說あるも、人を動かし得る者極めて少し、高に登て呼ぶも聲尙ほ遠に達せず、淺ましき事なり。要するに今の學者は見識ありて學に乏しき少數を除くの外、大抵は學藝を以て推さるゝ、恰も豪富の貨財を以て推さるゝが如く、貴、物に在りて人に在らず、人としては絕えて貴むべきなく、單に學藝を荷ひし凡人として認めらる、故に碩學と稱すべき者あるも、其言ふ所鸚鵡の語るが如く、世間の笑ふが如く、更に重を占めず、隨て學藝の大に世用を爲しながら、學者の價格甚だ低し、前代といへども先生の稱は槪して貴からざりしかども、之を貴くせし者亦少きに非ざりき。蓋し前には事々物々門閥を以て成り、布衣の力を伸ばすべき自由は學問に存し、爲めに豪傑の士往々にして學界に入り、學を以て

侯伯を教誨し、學を以て民衆を風動せしも、今は有爲の材ある者務めて俗界に走り、敢て書庫に兀坐して學者たらんとせず、竟に學界をして懦夫の世界に化せしめぬ、憾むべからざるか。然れども是れ學を修むるの道至て狹く、嚴緊なる規則を履まざれば學者たる能はざりしが爲めにして、設し己が欲する儘にして修業するを得ば、氣力ある者必ずしも學に冷ならざるべし、理化學の類は官公費を仰がざれば專攻し難かるべきも、法政學と文學とは道途頗る開發し、陋巷よりして到達し能はずとは限らず、豪傑の氣を負へる者書を讀む亦不可なからんか、儒學國學の變遷を繹ね來れば、此間の消息知るべからずとせず、文學の下行せる者の如何に進行し來りて如何に曲折すべきかも揣摩し得べからずとせず、本書は熟讀すべきの價値あり。著者内藤湖南は自助の人、貌揚らずと雖も、蘊蓄する所頗る多し、孜々として倦まずんば、其れ或は後人をして己を論ぜしむる猶ほ其の今時古人を論ずるが如くならしむるを得んか、然れども湖南

は名の不朽を以て自ら慰むるが如き妄想漢たるに非ず。

明治三十年一月

雫嶺迂人識

黑漆崑崙。夜奔投海。百鬼瞪目。摑空追。堀地求。兩々三々、扶籬摸壁。右眼八兩。左眼半斤。直饒與麼工夫。穿却皇天鼻孔得。猶是拖泥帶水。有什麼交渉。且道。明月宿蘆花。白牛臥露地底。也作麼生。黑頭杜多。白拈賊。漫弄燃犀。倒把閻羅印。據款結案。是賊知賊。罪狀分明。須一坑埋却。闔天下太平。請借手大方。同情者出來

藹々居士青巒題

書は姓名を記せば足る、學ぶに足らずとするものは、英雄の志なり、何を摘み章を作し、筆を執りて鳴々する者は、腐儒迂生の任なり。如今僞憲政時代の亂世に屬し、又呑噬攫搏の戰國に屬す、大丈夫苟も當世に志あるもの、宜しく其智囊を傾倒して、排難當に萬戸侯を策すべし、乃ち何ぞ腐儒迂生の任を以て任と爲さんや。初め湖南の雪嶺矧川兩氏と觚を「日本人」に執る、我偶々鄕に在り、遙かに書を寄せて曰く、今より文章恐くは君が累を爲さんと、後數星霜、乾坤寥廓、人の藤湖南を說く者稀れなり、我竊かに却て喜びと爲す。頃者君が近世文學史論稿成る、書未だ出でずして頗る世上に喧傳す、湖南其れ遂に文上の名を成す乎、群盲の隨喜あり、佳人の室に待つあり、悠々たる行路、我復たの名を成す乎、群盲の隨喜あり、佳人の室に待つあり、悠々たる行路、我復た君が爲めに憂ひなきことを得んや。然れども湖南の志豈此にあらんや、君見ずや、禹域四百州、風雲箭の如く、烟霧墨の如し、盍ぞ速かに君が劍を負ひ、君

が馬に跨り、直ちに江を渡り河を渡り、北の方萬里の長城に上りて、出沒して平原を望まざる、文章雄圖を策し、俗子と得失を爭ふ、要我徒の事にあらざるなり。山陽の別天、日本の南八、二君以て何如と爲す。

呂　泣　生

贈內藤湖南并題其近著近世文學史論

寧齋　野口式

知君經世平生志。史眼燃犀筆發硎。一代文章關氣運。百年河嶽見英靈。指陳貫串趙甌北。規畫詳明計改亭。似此奇才猶坎壈。紙窓風雪夜燈青。

黒頭尊者、志已に時と睽き、才世用たらず、精力を書巻に耗し、無聊を筆墨に遣る、縦に千古萬古を貫き、横に五方十方に亘り、其時を尚論し、其人を尚友す。嘗て興を近古の文物に動かして、三百年氣運の變移、寛濶なる寛文延寶風、伊達なる元祿寶永風、澁味ある安永天明風、派手なる文化文政風、躬ら其時に處して、而して目たり其人に接するが若し。會心の處に到れば、便ち往々筆を呵し墨を驅ることを免れず、興酣以往、灝氣流露、譬へば猶武夫健卒、稍を右にし劍を左にし、馬を盤らして撃刺、氣を盛にして叱咤、僵屍草の如く、萬人盡く廢するがごとく、快言ふべからず、戛然として筆を含けば、燈華爲めに動く。

嘻々として梁に笑ふ者あり、汝をして汝が論する所の時に處し汝が方ふる所の人と伍せしむ、汝果して能く頭地を其間に出し、輸を操て其人と周旋し、其

時を文飾するに足るか、汝自ら力を量らず、而して敢て妄りに前輩を是非するかと、之れが爲めに懊惱半日。

困て而して憊れ、寝て而して夢みる、儒服の客あり、勃焉として罵て曰く、孔曰く仁を成す、孟曰く義を取る、人の爲にす己の爲にす、汝將た何れをか擇ぶ、乃ち枯骨を鞭箠して、萬言千行、無用の辯を費す、汝竟に胡爲る者ぞと、覺めて而して汗背に浹きを見る、之が爲めに又懊惱半日。

昔しは楊子雲、太玄を作る、或ひと玄の尙白きを笑ふ、今は黑頭尊者、近世文學史論を著はし、覺めて而して懊惱、夢みて而して懊惱、懊惱已まず、頭も亦將さに白からんとす。寧ろ筆を焚き墨を折り、思を絶ち慮を廢し、死灰槁木に從て而して終らんか、尊者猶頭黑し、此の如く其れ退くこと能はず、將た寧ろ朱を拖き紫を紆ひ、利奔名走、勳業紛華を取りて而して快うせんか、黑頭已に尊者と稱す、此の如く其れ進むこと能はず、進退兩ながら不可、已乎已乎

博奕なる者あらずや、之を爲すは猶已むに賢る、筆墨なる者あらずや、之を弄するは乃ち猶博奕に賢ること無からんか。

黑頭尊者自識

例言

一、此の書の舊名を關西文運論と曰ふ。著者が昨年大阪朝日新聞社に在りし時、其紙上に連揭せし所なり。初め之を草するや、實に三百年文運の大勢に關係ある者、儒學、國學、小說戲曲、美術、宗教等を網羅し、著者が一家見を以て、之が論斷を試み、以て之を大方に質さんと欲す、其の篇章の若きは、最も簡率を主とし、二三週の日子、十四五篇を以て結尾せしめんことを期し、四月中旬、花を芳野に觀んとするの前日、先づ序論并に儒學の始章を草す。然るに既に筆を下せば、則ち往々豫期に違ふを免かれず、業時務を論議するに在るを以て、專ら本著に從事することを得ず、遷延數月に涉るの間、又他故に礙けられ、東西奔走、屢々續稿を廢し、篇章の長短、又意の如くならず、是を以て三十許篇を累ね、二百餘日を費し、而して僅かに儒學、附醫學、國學の三章を完成せるのみ。既にして社を辭して東上するに及び、同人交々慫慂するに、既成の部を裒めて册子とし、之を刪行せんこ

とを以てす、乃ち舊稿を取て閲過するに、遺漏紕繆、層見疊出す、因て頗る刪改補修する所あり、又平生の著論、此論と相發明すべき者數篇を末に加へ、以て活刷に附す。

一、本著極めて簡疎と雖も、三百年文物の變局に於て、畧ぼ大梗を盡し、必らずしも關西を偏擧して、他地方を略せるに非ず、舊名の頗る妥當を失せるを覺ふ、故に補訂の次を以て、之を今名に改む。

一、著者の浪華に在るや、客寓書に乏しく、大抵知人に假貸し、又書肆鹿田松雲堂主人、好意其の所藏を借示するに會し、僅かに以て參攷に資することを得。故に稽徵證引、極めて便宜を缺き、往々暗中摸索、架空結想、毎々負心の文字を作すことを免かれず、後修訂を經と雖も、一たび成れる結構、盡く改むべからず、特に其の太甚しき者を去る耳、若し大方讀者、批正を吝まるゝなくば、著者の慶甚し。

一、本著の大阪朝日新聞に上るや、此に緣りて新たに老儒先生の知を辱うせること尠からず、往々約するに高批を賜ふを以てせらる、今匆率印行するを以て、一々閲正を經るに遑あらず、亦異日再訂の時を待つべし。

一、本著の論次せんと欲して、而して竟に及ばざりし所、小說戲曲、美術の若きは、著者の腹藁、畧ぼ成案あり、宗教の若き、衰殘の期に屬し、大なる光明なしと雖も、殘山剩水、亦曲折の觀るべきなきにあらず、尋て當さに論次すべし、幸に再刷の日に際せば、順次增補して、三百年文運の大綱を領略するに於て、遺憾なからんことを期すべし。

明治三十年一月

著者識

目次

序論……一
儒學上……九
儒學下……三四
附醫學……六五
國學……八七
餘論……一四〇
地勢臆說……一五〇
日本の天職と學者……一六三

畫道の一大疑問（上篇）……………………………………一七五
山崎闇齋學派に就いて……………………………………一八五

近世文學史論

近世文學史論

序論

文物と時及び土

夫れ文物なる者は、民種の英華なり、方土の果實なり、或は其の時に應じて而して榮ふ、譬へば猶ほ櫻桃杏李の盛春に於ける、桔梗、敗醬、胡枝、紫菀の初秋に於けるがごとし、或は其の壤に因て而して宜しうす、譬へば猶ほ椰子榕樹の陰を炎日の下に交へ、松杉檜柏の翠を堆雪の中に見はすがごとし。

文物と時

其の時を以てすれば、則ち禮文の成周に備はるや、禮儀三百、威儀三千、其の詞は則ち雅頌、其の絃は則ち韶武、辭令の春秋に妙なるや、戰陣の間と雖も、整うて而して暇ある、以て相尙ぶことを爲し、雍容閒雅、曾て急言竭論せず、辯說の戰國に盛なるや、長短捭闔、縱を合し横を連ね、人の國を安危し、人の家を存亡せしむ、記誦訓詁の兩漢に精なるや、

三冬二十萬言、奇字難辭、擿闔を衒耀し、名物度數、蟲魚草木、曲さに詳審を極む、清談詞章の六朝に行はるゝや、半吐半呑、含糊微中以て其の玄を競ひ、綺章繪句、駢四儷六、以て其の巧を爭ふ、有唐の詩、菁華瑰麗已に極り、馳驟揮霍久有り、渾々灝々、沈鬱頓挫、前より光にして而して後を啓く、有宋の學、天人の際を極め、性理の奥を發し、碎胖の習を擺脫し、精一の旨に體達し、雲霧を排盪して、親しく日月を睹る、明清の窠轄考據、二酉四庫、汗牛充棟、獺の魚を祭るが若く、毫釐を剖析し、錙銖を甄別し、蠹と伍を爲す、かの佛法の如きも、永平に騰蘭西來してより後、傳譯義學、先づ草昧の運に行はれ、羅什龍樹の空宗を傳ふるも、講敷の業を主とするのみ、法相、南山律、唐の初に盛に、善無畏、不空の密教、其の中世に弘まり、而して宋朝に至りて、天台、南禪、乃ち天下を蓋へり、是れ其の時に應じて而して榮ふる者ある也。

其の土を以てすれば、則ち山東相を出し、山西將を出す、儒雅の風、洙泗に遺り、武健の俗、甘涼に存す、憲章儀文、經緯制作の美は華夏の誇る所にして、箕子の洪範、周公の禮樂、實に集めて之を成し、鉤玄遠思、婉言微辭の妙は、吳楚の具ふる所にして、老莊の

論著、屈宋の文章、又其の萃に拔く者なり、洙泗徐淮、南北の間に介まり、而して子思孟軻、英を含み華を咀ひて、斯に其の物を備へて、而して幷せて其の性を盡し、淮南の諸儒に至りて、又齊東の怪詭を該ぬ、南北の際、晉は玄言を尙び、宋は文章を尙び、齊梁の君、其の子孫と、亦皆詩文に於て長を見る、二陸張左、阮陶鮑謝、豈に時の選に非ずや、而して元魏齊周は、則ち猶ほ馬鄭の流風を受け、通經績學を以て業と爲す、徐遵明、劉炫、劉焯の徒、實に東京に嗣で、而して隋唐を開けり、唐秦漢の故地に踞し、其の盛時の學者、專ら三禮を以て重しとし、漢書文選之に次ぐ、凡そ音義註疏の書、此時に至て大成せり、北宋も亦頗る考古の學を雅尙す、南人の國に用ゐられしより、乃ち唐の太宗を誤て宋の太宗と爲す者あり、朝章典故の講ぜられざるを見る、故に南宋に至りて、鄭樵、李燾、王應麟、馬貴與等、其の精博を極むと雖も、一世の趨く所は、則ち此に在らず、濂洛の學、北の氣運を率て、而して之を南に渡し、朱陸の義、務め精微に在り、以て朱明に及で餘姚の直截一派を出すに至る。佛教の弘まるや、釋道安、襄陽の人を以て、譯經の規儀を一變し、廬山の慧遠、其の門を出でゝ、始めて涅槃常住の旨を發し、蓮社淨教の源を開く、是れ南

地佛教の先づ異彩を見はせる也、羅什門下、三論の宗、猶ほ北地義學の臭味あり、天台の智顗、曹溪の慧能は、南人の秀にして、法相の精緻、戒律の謹嚴は、北教の粹なり、智顗、北齊の慧文より傳ふと稱するも、文の門下北に在る者聞ゆるなし、南岳の慧思を經て、顗る自ら發明あり、敢て前轍を襲はず、況んや顗の大才、固より人の牙慧を拾ふ者に非ざるをや、慧能の神秀と、頓漸の辨ある、又以て少室已來の旨に變ずるあるを見るべし、杜順の華嚴は、天台法相の間に出入す、其の旨とする所、事々無礙に在り、密宗の教相は唯識に依り、戒法は四分に依る、皆北地に宜しうせし也。

之を歐西に例するも、亦曷ぞ然らざらん、唯だ是れ彼間文學の史、具さに此等の消息を傳ふる者、寔に亦少からず、而して近日文士、耳熟し目慣るゝ所たるを以て、煩を避けて一々證引せざる耳。

時と土と相經緯す

夫れ時以て之を經し、地以て之を緯し、錯綜して而して之を變化す、文化の史、斯に燦然として其の美を爲す。錦繡の文を成すを觀るに、繁簡相代る、此に絢爛の處あれば、彼に散漫の處あり、人の視線必ずかの絢爛の處に集中し、而して其の段を成し匹を成す、繁

箇の相代ろ、從頭徹尾、上下一樣なるを嫌ふや、則ち亦一縱一横、以て其の變化の奇を出す。横卷の山水を作るを視るに、必ず處々湊合の位置あり、以て全幅の氣脈をして、斷續相屬せしむること、藕を折ること數節、而かも絲は則ち相牽くが若くす、而して其の湊合の處、或は重嶂、或は孤峰、或は懸泉、或は幽壑、乃至樓閣、危巖、林樾、密箐、宜しきに隨て點綴し、以て其の重複を避く、是に於てか文化湊合中心の說あり。

文化湊合の中心

嘗て「地勢臆說」を述ぶるや、趙翼が長安地氣の說に因りて、頗る此の義を發す。秦中は古より帝王州たり、周秦西漢、南北の際、割據の大國、皆踞して都と爲す、唐の開元天寶に至りて、長安の盛極まれり、盛極まれば必ず衰ふ、是の時地氣將さに西より東北に趨かんとす、安史の亂後、河朔三鎭、唐の節度を受けず、其の末に及で、長安夷して郡縣と爲り、而して契丹已に遂に起る、洛陽汴梁、氣の東北趨する者の爲に、迤邐潜引して、一二百年の後、東北の氣、積で而して益固く、元明に至り、遂に天下の全きを有すと、趙翼の論、大旨此に在り。因りて長安の前、洛あるを說く、蓋し武力の强、冀州に在り、唐虞夏商、南面して天下を制するに當り、食貨の利、豫州に在り、人文乃ち此間に醞釀す、而

「地勢臆說」には具さに附錄に出す就き看るべし

して洛は二州文物の湊合する所の處なれば也。又長安の地氣は、洛陽に代りて維州の人力を興し、而して其の索くるや、燕京の帝王都たるに、人作に出で、人文の嚮往集中する所は、揚州に在ることを說き、以て趙氏の謬を匡す。既にして「日本の天職と學者」を刷するや、云ふあり。

「日本の天職と學者」具さに附錄に出す

希臘のペリクレスの時に盛なる、後に歷山王ありと曰ふと雖も、固より純正の希臘人に非ず、其の事業又攻伐に止まる、羅馬の神聖帝國一たび崩壞して、意太利の人力、復た歐洲文明の中心たるに足らず、阿輸迦王佛教の保護者たりし後、印度再び轉輪王を出さず、白露、墨西哥の著きは、其の生熟盛衰、自から一地壤に在て一元を終始して、全く壞空に歸せり、乃ち支那に至りても、三代の兩漢と、唐宋明淸と、文化一たび衰へて、而して再び盛んに三たび興るに似たりと雖も、河洛の開化は、關中の文化にあらず、江北の休治は、江南の人文にあらず、代る／＼相推移して、必ずしも復た興らざる也。因て諸々國民が人道と文明とを光被するの職、之を天より命ぜらるゝ者、世々にして其の任に堪ふる者を選ばるゝを說き、證するに

河洛の澤竭きて、而して關内の化盛んに、北方の文物枯れて、而して南方の人文榮ふ、亦時を以て而して命ぜらるゝ所ある也、埃及、アッシリア、印度、波斯、フェニシヤ、希臘、羅馬、相踵で迭に興る、亦各時を以て而して命ぜらる。

文明中心の移動

といふを以てし、以て文明の中心、時と移動するを斷じ、更に其の移動するや、後の中心、必ず前の中心に因ることありて、而して損益する所あり、前者の特色、或は消耗に就くには、後者の特色、新たに展開するの地を爲す所以、而して各其の時に宜しうし、以て人道と文明とを萬世に維持するの意を鋪張せり。蓋し殷は夏の禮に因り、周は殷の禮に因り、而かも忠や質や文や、尚ぶ所は同じからず、漢の治は覇道を雜へ、專ら王政を取るにあらず、故に周の禮文、秦の法律、并せ採りて斟酌す、唐は南北を合一し、詩賦經藝、兩つながら存して士を取るの法とし、氏族を志すには、六朝門地を尚ぶの風を傳へ、均田を定むるには、三代井田を制するの遺を紹ぐ、瞿曇の化、東南に播して、馬鳴龍樹の教、般若の宗を開き、其の西北に敷くや、世親護法の徒、瑜迦の論を造る、皆外道の説に得る所あり、其の震旦に入るや智者、大鑑の法、博大簡捷、佛に超え祖に越ゆ、亦豈に儒學道教、清談玄言の風

三百年來文物の變遷

に移さるゝ者なからんや、希臘哲學の祖は、多く埃及、フェニシヤの間に遊で、羅馬の學者、制法家、概ね希臘に學ぶ、近世に及でも、所謂學術の復活は、又遙かに希臘の秘鑰を發くに起り、東方の文明は、十字軍の媒する所と爲り、以て歐洲新文物の生面を開けり、文物の已にアルプスを踰えて北せし後も、ドーヴアの彼岸、此岸、ラインの東方、西方、迭に小盛衰なきに非ず、所謂エリザベス時期、ルヰ十四世時期と、再興獨逸帝國と、前後相代るに似たり、此は則ち文化湊合中心說の大梗なり。

將さに少しく慶元以來、三百年間、斯邦文物の變移を案し、而して其の前後遷に中心たりし關東關西兩地が、其の氣運に與りて力を爲せる所以を明かにせんと欲す、乃ちかの時の應ずる所、土の宜しき所、通じて之を四海に徵して謬らざるに庶することゝあり、故に先づ凡を發し例を設けて、以て其の端を啓くこと此の如し、

儒學上

惺窩以前の宋學

慶元以來の文物、其の最も先に最も盛に、異彩を放てる者を儒學とす。蓋し王室の式微、菅清二家專門の學も亦衰殘に就き、禪家の僧徒、獨り宋明に往來するを以て、文權漸やく此輩に集まり、五山遂に文辭の淵叢と爲れり、其の漢唐註疏の學廢して、程朱新註の講起ろも、實に此際の氣運と相關かる。清原頼業が學庸を禮記の中に拔きしは、かの晦庵の時と相前後すと雖も、惜むらくは其の說傳はらず、意ふに當時佛教亦已に台密の形式を專らとするに安ぜず、淨土の教、佛心の宗、世運の活動と相應じて新に興る、儒門の斯人あるを怪しまず、但だ繼起人なく、擴めて之を充たす能はず、久しからずして亂離相踵ぎ、公家武家、往々讎敵を相爲し、明經の博士も、禪僧の當時實力ある者に得らるゝが若くなるを得ず、是故に新註の經筵に講ぜらるゝや、或は以て玄慧が後醍醐帝に侍讀せしに始まると爲し、虎關師錬、實に始めて語類を讀めりといふ、其の後渡明の僧徒、彼地の文儒と應

清原頼業 文治五年卒 年六十八

玄慧 正平五年寂 年八十二

虎關 貞和二年寂

桂庵永正五年寂年八十二　一條兼良文明十三年薨年八十　清原業忠應永長祿年間の人　文之元和六年寂年六十五　如竹慶安明曆間歿

如淵天正中人

接する者、固より皆當時宋學の極盛に浸染せらるゝことあり、其の專心之に趨きしは、亦南禪の桂庵玄樹に始まる、應仁文明の際、京師方さに干戈劳年の衝と爲る、桂庵の學、是を以て大に上國に行はれずして、僅かに之を薩隅に傳ふるのみ、一條禪閤兼良は、縉紳家が程朱の書を讀むの嚆矢と稱す、亦流離開闢に終りて、大に其の説を弘むるに及ばざりしか、同時清原業忠も亦學庸を講ずるに新註を用ゐしも、其餘は猶ほ何趙の古註に據る、玄昌文之、桂庵に受けて之を如竹に傳へ、如竹之を愛甲喜春に傳ふ、新註に據りて國讀の法を創始せしは、桂庵文之にして、惺窩薩に至り、得て之に從ひ、道春に至りて之を完成す、道春點即ち是なりと云ふ、如竹に至て、釋を出でゝ儒に入る、嘗て藤堂高虎に聘せられ、又帷を大阪に下し、歸りて薩摩に歿す、大抵惺窩と時を同じうす、天文中、土佐に南村梅軒あり、吉良氏に賓たり、其の學、僧如淵、忍性、信西、天室等に傳へて南學の祖となる、而して桂庵、梅軒、并に周防の人たるを見るに、大内氏が明朝勘合印を掌り、使舶往來して山口の文化、西邊に卓出せし者、以て新時代の文物を啓くあるを見る、薩摩の坊津も亦使舶經由の要津として、早く流風を受けし歟、要するに此れ皆惺窩以前に在て、宋學の盛

惺窩派の宋學　藤原惺窩　元和五年歿年五十九　林道春　明曆三年歿年七十五　松永昌三　明曆三年歿年六十六　那波道圓　慶安元年歿年五十四　堀杏庵　寬永十九年歿年五十八　闇齋派の宋學　山崎闇齋　天和二年歿年六十五　佐藤直方　享保四年歿年七十

運を導きし者たり。

明壽院惺窩、身華冑に出で、資豪傑を禀け、桑林に挺き、洛閩に歸す、其の事を高尚にし、毅然自ら持して祿を覇主侯伯に受けず、儼然として天下の儒宗たり、其の門下、林道春は幕府に仕へて、強記博識を以て、註記の職に備はり、江戸府の叔孫通と目せられ、關東文物の草創たり、松永昌三は學校を京師に建て、其の門人木下順庵は、東下して盛を林家に競へり、那波道圓は紀州に仕へて抗直を以て著はれ、堀杏庵は尾張に聘せらる、一派の學、四五十年間、大抵程朱に依據し、草味の時、分業の風未だ開けざるを以て、所謂詞章記誦の習に染み、陸王に出入することを免かれざるあるも、質實にして古を信ずるに篤く、敢て私見を出して、門戶相高ぶらず。寬文延寶に及で、山崎闇齋出で、卓犖の材を以て、意を朱氏に純にし、當時學風の駁雜を排して、史子の飜閱、詞章の遊戲、一切之を禁じ、簡擇極めて嚴なり、佐藤、淺見、三宅諸子其の門に出でゝ、益之れを恢張す。山崎の學は南學に出づ、南學の傳、谷時中、野中兼山、小倉三省獨り土佐一國に行はれて、未だ上國に波及せず、闇齋に至りて帷を京都に下し、一時靡然、從遊甚だ盛んに、又東下して

淺見絅齋　正德元年歿　年六十
三宅尚齋　元文六年歿　年八十
谷時中　慶安二年歿　年五十二
野中兼山　寛文三年歿　年四十九
小倉三省　承應三年歿　年五十一
朱舜水　天和二年歿　年八十三
陳元贇　寛文十一年歿　年八十五
朝山意林庵　寛文四年歿　年七十六
三宅亡羊　慶安元年歿　年七十

弱主の輔佐たる會津氏に得られ、晩に神道を倡へて、論益々奇僻に流る、幕府か異學の徒、熊澤、山鹿等を禁錮せしは、識者以て其の山崎氏に聽くの致す所と爲す、其の峻峭嚴厲の風、豈に南海の俗に得る有る歟、當時天下を三分して、一は從前泛雜の學風を改めす、一は闇齋の學風に歸趨せしと云ふ。要するに宋學の大に行はるゝ惺窩、闇齋の二派、其の大幹なり、其の餘枝葉、若くは一時蔚然として萌生せし諸家に至ては、間々名儒の傳ふべきあるも、皆羽翼の功なり、而して尾紀水の三親藩か引ける輔佐人、朱舜水、陳元贇の徒、朝山意林庵、三宅亡羊、江村專齋等の若き、其の尤も著けるゝ者たり。其の文辭を以て表見する者は、石川丈山の詩に於けるか若き、大に時名あるも、運猶ほ草昧に屬す、艸山元政、丈山と倡首の功を同じうすべし、其の方外の人たるを以て、且らく舍て錄せさるのみ。

中江藤樹、始めて專ら陸王を以て家を成し、其の學行の醇、化澤の孚、鄕民に及べる、百年にして間然することなし、而して門下乃ち熊澤蕃山、有用の通儒を出す、其の千古の大材卓識、心學より入ると雖も、而かも心學より出てす、經世の論、學校禮樂を先とし、而かも頭巾道學の常談に非す、破天の荒語、自ら謂ふ、和漢に通すべからす、古今に渉る

江村専齋 寛文四年歿年一百
石川丈山 寛文十二年歿年九十
元政 寛文八年寂年四十六

べからず、今を救ふ活法、其の人を待て行ふべしと、一たび小過して而して竟に大に過はず、以て坎壈に終る。山鹿素行は兵家にして儒を兼ぬる者、其の文武の大道を主とするは、亦熊澤氏が文武合一論の流なり、而して其の此に因て禍を取るも、亦似たり、但だ此時の異論家、概ね治道の上より見を起し、未だ純ら學義を以て異を標せざる也。

陸王の學
中江藤樹 慶安元年歿年四十一
熊澤蕃山 元祿四年歿年七十三
山鹿素行 貞享二年歿年六十四

學變の過峽
木下順庵 元祿十二年歿年七十八

木下順菴出でゝ、而して嚮者泛雜の學、荊璞を磨して趙璧と爲す、徂徠稱して、錦里先生出でゝ、搏桑の詩皆唐なりと爲す、蓋し其の「古文眞寶」、「聯珠詩格」の圈套を出でゝ、而して白石、南海の偉麗秀健を啓きしを謂ふ歟、南郭稱して、所謂古學も亦先生之が開祖たりと爲す、蓋し其の「小學」「近思錄」に齷齪たらずして、「十三經註疏」を精讀すべきを倡ふるを謂ふか、門下の士、白石の典故、篁洲の律學、皆かの記問の習より一變して、轉じて有用の學と爲せる者、南紀の國、律學の講習、世々其の人あり、將軍吉宗の治術、實に此に源し、百箇條の法も亦吉宗の時に定まる、篁洲之を開かずといふべからず、而して鳩巢の經術は、即ち朱氏に純にして、而かも山崎一派狹陋の弊少なく、遠く寛政の學風を胚胎す、是れ其れ惺窩氏一派の大成か、抑も亦復古學勃興の過峽たる也。

新井白石　享保十年歿年六十九

榊原篁洲　寶永三年歿年五十二

室鳩巣　享保十九年歿年七十七

學義の異

伊藤仁齋　寶永二年歿年七十九

伊藤東涯　元文元年歿年六十七

荻生徂徠　享保十三年歿年六十三

學義の異なるは貞享元祿の際にして、伊藤仁齋、始めて復古の學を倡ふ、仁齋學に師承なし、始めにして宋學を精硏し、終にして一家の言を立つる、皆其の獨り自から沈潛反覆、之れを心に求めて、之れを己より出す者たり、太宰春臺、以て豪傑の士、文王を待たずして興る者と爲す、宋學の佛老に浸淫して、孔子の旨に違ふを論じ、易の一陰一陽の義に據りて、生々息まざるを以て道となし、天地間一元氣と言ひ、其の二端を以て流行主宰と爲し、理氣先後の說を排し、充養の方を主として、痛く復初の說を斥けたり、其の篤學敦行、恬靜自ら守り、諸侯に祿仕せず、烱眼炬の如く、讀書紙背に透る、器識曠世と謂ふべし、故に趨舍同じからざる者と雖も、其の用力の篤き、學行の敦に至ては、同時後世、異論あることなし、五子家學を傳へ、而して東涯の博洽精緻、亦其の緖業を恢張するに足る、元祿の半ばよりして、寶永を經て正德の末に至るまで、其の學盛に行はれ、凡そ天下十に七、趨て而して之に歸し、元和寬永以來の風、是に於てか一大變せり、繼ぐに物徂徠を以てし、其の特絕の天才を以て、好名の念に熾に、旣に頭巾習氣の道學に甘ずる能はず、又時相及ぶ先輩の籬下に立つことを欲せず、倔强の性、適々李王修辭の說に合ふことあり、而して

資稟文に妙なるを恃むや、乃ち經義を古文辭の間に求め、所謂聖人の道を以て、詩書禮樂の教に在り、事功苟くも立たば心性に論ずることなしとし、其の博辯宏才、史傳律令度數方伎に至るまで旁渉して兼通せざるなく、以て一代の才能を推倒す、其の學史乘實蹟を知るを尙び空疎の言を斥くと雖も、而かも鄙近の功利を以て、道德の根據とし、高遠の思を遺すことを免かれず、其の經世の論に至ては、江戶を以て權力名爵の盡く由て出る所たらしめんとし、照公の遺意未だ行はれざる者ありと稱して、一種治安の策を建て、時政の闕術を刺り、白石の無識を嘲る、或は此を以て賈生に比し、以て羅山の叔孫通に比すると相對す、頗る曠達豪宕を喜で、門戶を張皇し、一時俊髦其の門に出でゝ而して名を成すを樂まざるなし、是を以て、蘐園一派の學、數年ならずして天下に彌漫し、享保より以て寶曆明和に及ぶまで、五六十年、靡然として影從響應し、而して學風の轉移、勢全く成れり。

夫れ王仁の文字を傳へてより、文上宮に刱まり、詩大友大津に起り、吉備氏之を學樂に弘め、嵯峨帝之を平安に鼓す、明經の科、大學に建ち、文章の士、朝廷に重ぜらる、然るに經を講ずるは漢唐註疏を墨守して、文を屬するは「白氏文集」を影摸するに過ぎず、當

時氣運、誠に已むを得ざる者ありて、彼土に在りても、新義の勃興せしは、宋の中葉以後に屬し、而して我は則ち此際に及で、武治時會して文教地に墜ち、人文の發達爲めに塞を被ること、數百年の久しきに彌るを致すと云ふと雖も、曜慶の治成りて六七十年、儒林多士、猶ほ程朱の爲めに鞭を執るを甘ぜし時に當り、伊物二氏獨り赤幟を樹てゝ、思想獨立の先驅たり、偉なりと謂ふべきのみ。抑ゝ仁齋の疑を宋儒に挾さむ者、實に其の心に於て安ぜざる所ありて然るか、設ひ其の明の吳延翰等の說に啓かるゝ所あるを疑ふ者あるも、識者已に其の誣妄を辨す、其の人と爲りを思ふに、妄に異を立て新を標するを以て自ら喜ぶ者に非ず、故に其の門下、概ね君子人多く、用世の才に乏しきも、輕薄の習なし、謹で師傳を守ること、宋學の先輩に減ぜず、中に就て並河天民が識見超邁たるが若きに至ては、木荻二門の多士なるを以てするも多く其の比を見難き所也。徂徠に至ては、則ち滿腹覇氣、唯に其の出處の人心を飫かしめざるのみならず、其の進むや、又實に兵家を以て祿を獲たり、但だ其の才敏、既に人に過絕し、才給らざる所、又氣力之を濟す、而して其の灑脫流滑、禮節を簡略し、行實を檢せざるを以て、才俊子弟、名利に熱中する者、從遊して其の

思想獨立の先驅

興國の氣象伊氏に案き承平の習氣物氏に萃まる

欲する所を得るを便とす、蓋し是に於て從前學者、體察踐行を重じ、修齊治平を志とするの風熄で、而して文士技を鬻ぎ、詩酒徴逐、風流相高ぶるの習生ず、此は則ち二氏の相異なるなり、豈に興國の氣象、伊氏に案き、而して承平の習氣、物氏に萃まる歟。

勤王の首唱

貝原益軒　正德四年歿年八十五

木門の諸子

羽黑養潛　元祿十四年歿年七十

三宅石庵　享保十五年歿年六十八

二氏の外に在て當時の氣運と相關かる者、山崎の徒にして淺見絅齋の若きあり、王覇の辨を明にし、一生足京師の外を踏まず、勤王の義を倡へて、萬世の爲めに太平を開くを以て自ら任ず。博綜には則ち貝原益軒の若きあり、其の晩年「大疑錄」を著はして、宋儒の言、往聖の旨と合せざるを道ふ、蓋し聰明なる者の盡く前人に僕從する能はざるは益軒の篤謹と雖も此に至る、勢なり。二子粗ぼ仁齋と時を同じうす、其の徂徠と同時なるは、木門の諸子、白石、鳩巣以下、蘐園の徒と並び馳す、鳩巣自から謂ふ、義理に於ては、必ず羽翁の許可を得て以て自から信じ、文辭に於ては、必ず木翁の品題を經て以て自ら是れりとすと、羽翁とは羽黑養潛、山崎の徒なり、故に鳩巣の學は、洛閩を守り、其の文は唐宋八家を主とし、以て當時古學、修辭の說に抗し、三宅石庵と東西相應じて宋學の殘壘を保つ、然るに其の文辭を斥けず、石庵が懷德書院も亦後年中井兄弟を出せるを觀るに、其の

學風既に山崎一派と逕庭あるを見る、則ち時之を然らしむる歟。將軍吉宗の治は、專ら吏才の能に任用して、文儒を尊ばず、鳩巣獨り徂徠と顧問に備はり、眷遇優渥なるを得しは、亦其人白石の志大に氣鋭なるが若くならざれば也。新井白石、經濟の才を抱き、一たび明主に遭遇して、頗る志を時に行ふことを得、幾ならずして意を失ひ、事功多く廢すと雖も、かの皇族削髮の制を停めて、龍種の振々を圖りしが若きは、終古沒すべからざる者、貨制の壞濫を正せるも、亦恵一代に浹し、獨り韓使接應の儀、赫々の名あるのみならざる也。或は其の文縟を喜で、武健の風を損するを顧みざるを病む、然れども公武劫制の術をして、決して百世治安の遺法と爲すべからざらしめば、則ち一代の憲章、竟に遷定する所ありて、以て必由の制と爲さゞるを得ず、創業草昧の風、强覇權數の習、人の國を亡し、人の後を絶ち、以て自ら肥すが若きは、復た永く用ゐるべからず、而して式微の王室をして、其の僅かに積衰の餘に保てる名爵の虛權を幷せて之を失はしめ、以て之を實力の府に授くることと、徂徠の言の如くするに至ては、亦志ある者の忍ぶ能はざる所、故に白石が其の絶代の才調、典故の學、無雙と稱せらるゝを以て、之を實際に施し、以て其の時に應ずるの道を

求めんとするを許して、江戸を變じて室町の若くならしめんとせる者と謂ひ、太平を飾るに過ぎずして、經濟の略なしと謂ふは、誣たる也。白石の學問は、蓋し三禮に淵源して、國史朝典に渾融す、當時經濟を談ずる、荻生太宰の徒、皆禮樂を以て先とせざるなし、意ふには深く時俗の漸やく淫靡に流れ、鄭衞の音、人心を蕩搖するに憤ふる所ある歟、而かも彼土聖王制禮の意を精究して、之を國家生民而還の變遷に稽へ、以て治平の經綸に試用せんとせるは、唯だ白石を堂々たりと爲す、亦其の史學の炬眼精識、以て之を裨くるある也。安積澹泊と問答せる所を觀、其の古史に發明し、世運の轉移に論斷する所を讀むに、疑を決し幽を闡き、左右源に逢ふ、眇たる五尺の軀、三十五萬提封の三分の一を費して、一代の才學を網羅せる水藩史館に當りて、綽として餘裕あるを覺ゆ、其の詩も亦天分高朗、論者謂ふ、高華雄渾、片言隻語も褻乙に相涉ることなしと、而して其の鞭を着くる、實に蘐園諸子の先に在り、但だ志已に經世に在り、講授を以て徒を集めざること、熊澤蕃山と揆を一にす、故に其の學一世にして傳を失ふも、亦熊澤に轍を同じうせり。

安積澹泊 元文二年殁 年八十二

水藩史館

水藩修史の學も亦當時文學の一大偉觀なり、其の林氏の杜撰、國體名分を殽亂せるに激

心越 元祿九年寂年五十七
三宅觀瀾 享保三年歿年四十五
栗山潜鋒 寳永三年歿年三十六
水戶義公 元祿十三年薨年七十三
前田綱紀 享保九年薨年八十二

せらるゝ所ありといへば、則ち其の記聞の學、泛雅にして裁制なきを概せるに出るや、乃ち史を以てすと雖も、亦頗る山崎氏の經に於けると相類せる歟。「大日本史」「禮儀類典」の作、無前の大事業たるに論なく、文書の探索、人を四方に派して、金匱石室、到る處に秘を發せしを以て、爲めに殆ど一世を傾倒して、繼絕興廢の風を策勵し、稽古の學、勃然として萌芽するを致せり、其の大義名分の闡明、人心の嚮ふ所を二百年の前に定めて、以て昌平の運を開きしは、必ずしも復た贅せず、先明の遺民、朱舜水、心越師の若き、修史に預からずと雖も、早く禮遇を受く、安積澹泊、朱舜水の門に出で、全力を史に用ゐ、其の高齢巋然、獨り鄒枚寥落の後に存し、魯靈光の若きを以て、功最も多しと稱す、其の他聘に遭ふ諸子、三宅觀瀾、栗山潜鋒等、皆一時文儒の選、蓋し林崎伊門の逸材、取るべきあれば、則ち收めざることなし、而して最も桀きを山崎門下とす、獨り蘐園一派、終始遺に入らず、發縱指使する者は即ち義公、夷齊の操を持して、准后親房の志を行ふ、盛なりと謂ふべし。同時加賀の綱紀侯亦學を好み、其の事業に於て水府燦華の煥發なきも、學風淵雅、其の漢籍儲藏の富は、寧ろ之に過ぎたりと稱す、木下順庵及び其の門下、森を此に

異義の群起
太宰春臺 延享四年歿年六十八
服部南郭 寶曆九年歿年七十七
祇園南海 寶曆元年歿年七十五
梁田蛻嵓 寶曆七年歿年八十六
秋山玉山 寶曆十三年歿年六十二
宇士新 延享二年歿年四十八
五井蘭洲 寶曆十二年歿年六十六

受くる者多し。

物門の太宰春臺あるは、猶ほ木門の室鳩巣あるが若く、其の服部南郭あるは、猶ほ木門の祇南海あるがごとき歟、皆群を絶て而して萃に拔く、室宰二子は矜嚴自ら持し、道を行ふに志あり、服祇二子は才藻最も秀で、盟を詞壇に主どれり。梁田蛻巖、秋山玉山の若きは、亦物氏の風を聞て而して興る者、益七子の體を揚げて、初盛の貌を襲ふ、然るに亦骨氣充實、藻思華贍、優に大家の氣格を具ふ、末流の徒、動もすれば飣餖掙撦の弊を免かれざるも、輕佻儇薄の病は猶ほ鮮しとす。其の經義に於ては、宇士新兄弟以下、競て新說を立て、輕しく先輩を罵る、各一隅に割據して徒を聚め業を領し、混亂戰國の若し、徂徠を知る者も、徂徠を罪する者も、皆其の先聲を以て之に歸せざるなし、而して其の環て而して攻められ、叢りて刺らるゝ者も亦徂徠なり、宇士新に「論語考」あり、五井蘭洲に「非物」あり、中井竹山に「非徵」あり、服部蘇門に「燃犀錄」あり、其の他一々枚擧すべからず、嗚呼爾に出づる者、果して爾に反るか。

此際にして富永仲基「說蔽」の著あり、蓋し儒の教四方に宜しくして、而して此方の必

中井竹山、文化元年歿、年七十五　服蘇門、明和六年歿、年四十六　富永仲基、延享中人

澁井太室曰、國朝之詩、丈山款段、東涯騎驢、徂徠突騎、白石官騎、南郭散騎、萬菴游騎、桂山青絲騎、玉山健騎、蘭臺騎射、蛻嵒戲馬、

折衷學

ず泥すべきにあらざるを道ふ者、惜むらくは其の書傳はらず、然も其の「出定後語」の佛教を論ずる、一に皆斷々乎として之を己より出すを觀るに、其の儒に於ける亦復然る者あらん。夫れ金を沙に淘し、玉を石に簡ぶ、春光一たび被り、雜樹蔓草、葱蒨盡く榮ふ、芝蘭も亦其の中に生ず、物氏經義を古文辭に求めて、其の天才先づ其の大なる者を發す、後れ出づる者、其の路に由りて而して行く、其の大なる者を求むるも、已に得べからず、故に曲岐旁徑、徧探究索するも、能く超て上る者あるなし、而かも吉光片羽、或は偶然にして中るは、則ち必ずしも其の處幸不幸あるのみならず、亦其の人聰明出倫たるある也、富永の若き是なり。

寶暦明和より安永天明に及びては、正享盛時の耆宿、凋落略ぼ盡き、文豪傑の士、起て而して之を振ひ、以て一代の宗主たる者あらず、而かも文學の流行は、即ち天下に浹洽し、「四子」「五經」「唐詩選」刊布して僻陬三家の村に及ぶ。經說に於て立命の地を得んと欲する者は、則ち折衷學なる者を倡ふ、片山兼山、井上金峨の若き、以て巨擘と爲す。所謂折衷學とは、漢唐宋明諸家を兼採して、其の長を擇取し、敢て一家を主張せざるの謂なり、

片山兼山 天明二年歿年五十三

井上金峨 天明四年歿年五十三

吉田篁墩 寛政十年歿年六十八

皆川淇園 文化四年歿年七十四

村瀨栲亭 文政元年歿年七十餘

巖垣龍溪 寛政中歿年七十餘

山本北山

蓋し才力極めて大なる者、乃ち能く挺然として一家の説を爲すべく、即ち前修に資るあるも、渾然として之を已に融化し、貌襲の迹を存せず、伊物二子の若き是れなり、其の以下なる者に至りては、謹厚なる者は先進の士に從て、謹で其の轍に遵ふのみ、稍客氣ありて進取に急なる者は、則ち此等糅雜無方の一路を開き、以て自ら託する所以を求む、故に博渉或は餘あり、而して見地は則ち定らず、童習白紛、蠹冊の間に埋まりて、而して發明の功なき者あり、夫時運の豐亨一たび其の極に達すれば、則ち衰殺の勢生じ、豪傑の士、亦必ず世々にして出る能はず、則ち其の此に至る者、亦自然の數也。兼山「古文左證」の草あり、金峨の門、吉田篁墩、考據の學を安永天明の間に唱ふ、長崎の賈舶、多く近世清人の書を傳ふるに及び、此一派の學益滋蔓するを致せり、此れ亦かの蕪雜の折衷學より一轉して精細に入りし者、徳川氏季世の學問、盡く此の臭味を帶びたるは、實に源を此時に發せる也。同時皆川淇園、名物の義に精しきを以て京師に鳴る、村瀨栲亭、巖垣龍溪、亦古註學の大家と稱す。東都に在ては山本北山、龜田鵬齋、盛を一時に鳴らし、太田錦城は則ち稍後れて出づ、其の金峨の門に於ける、或は及び或は及ばずと雖も、要するに皆折衷の

文化九年歿六十一
龜田鵬齋文政九年歿七十五
太田錦城文政八年歿六十一
市川寬齋文政三年歿七十二
大窪詩佛天保八年歿七十一
文儒の品位漸やく下る
藪震庵延享元年歿五十七
細井平洲享和元年歿七十四

說、考據の學に出入する者なり、北山物門の修辭を抵排し、李王七子を彈斥するに尤も勉め、聲名藉甚、寬齋詩佛以下、關東の宋詩を主とする者、大抵其の風を聞て而して興る。

順庵仁齋以前、經藝詞章、未だ岐れて二途と爲らず、石川丈山の若き、隱逸の士、辭章を樂しむ者、此を以て家に名くるに非ず、木門には頗る詩文を以て專ら聞ゆる者あり、徂徠は躬ら經藝文詞を合して一種の學を爲すと雖も、其の徒南郭金華等より、既に詩文に力を專らにす、蛻嵒、玉山、藪震庵等の如き、經義は宋說を奉じて改めず、而して修辭の學は、則ち蘐園の矩矱に遵ふ、是に於て所謂文人一派、詩酒風流、放浪閒曠、繩墨に規せられざる者、日月に益滋く、加ふるに當時諸侯の文儒を招聘する者、米澤鷹山公の細井平洲に於けるが若きを除く外、概して一種の狎客を以て之を遇し、其の博洽に資て以て誇耀人に驕るの具と爲すに過ぎず、故に售るを求むる者、自ら其の心に枉て而して其の才を用ゐんことを欲する者に非ざれば、則ち斗升の祿を取て其の口腹に飽かさんとするの徒のみ。室鳩巣曰く、儒者寧ろ人主の忌む所と爲るも、人主の侮る所と爲る勿れと、鳩巣の八代將軍に於けるを以てすら、猶ほ此言あり、儒士の品位、享保の際よりして漸やく汚なるを見

瀧井太室 天明八年歿年六十九

江村北海 天明八年歿年七十六
片山北海 寛政二年歿年六十八
安達清河 寛政四年歿年六十七

る。瀧井太室云ふ、國初以前書生無し、書生あるは國初より始まる、然るに人主の之を視る、巫醫卜祝と同じ、進むに出身登庸の路なければ、則ち終身書生のみ、書生なくんば則ち已む、書生あるより以來、其の困しむこと未だ今日の若きは有らざる也、文宗の白石を用ゐ、備侯の蕃山を用ゐるが若き、前後に人なし、太上は師傅の優に居り、其次は教授の職を掌り、其次は列國に擧けられ、環列の祿を受く、其次は高門勳家に出入し、其次は頬を市井に皷し、最下なる者は憐を浮屠に乞ふ、大率其口を糊するに足りて、朋友を恤ふるに暇あらず、出るに車馬なく、入るに僕從なし、其の困しむも亦至れり、之を上にしては人主之に望むに諫を納れ國に益するを以てせず、之を下にしては衆人德を厚くし行を尊うし、子弟をして矜式する所あらしむるを望まざる也、求むる所は文字のみ、其の卑も亦甚しと、此に至て頽風復た回すべからず。蘐園、赤羽の後、詩文を以て社を結ぶ者、此際に至りて其の盛を極め、服蘇門が長嘯社、江村北海が賜杖堂、片山北海が混沌社、安清河が市隱堂、東西並び興る、江村北海が「日本詩選」を著はすや、好名の徒、詩稿を投じて採擇を請ふ者、必ず刻費と稱し、若干錢を納れしむ、龍草廬、書畫會を創し、又其の文を作

り字を書する、必ず謝金の多少を定めて、而して後之を許し、速に幣を贈らざれば、則ち輕諾して果さず、「納レ錢入レ選江君錫、待レ價作レ文龍子明」の語あるに至る、儒風の澆薄、人をして涕唾せしむ、然るに片山北海が混沌社は、則ち寛政三博士等を其間に出し、而して後市河寛齋の江湖社、又輕俊子弟を輩出す、禍福の相糾纏する、塞翁が馬のみならず。

（龍草廬寛政四年歿年七十九）

經史足らず、而して異端に汎濫し、文選の餘緒、衆技に精を耗する者、亦此の際を盛なりとす、富永仲基、服部蘇門の佛氏に於ける、前人の未發を啓き、三浦梅園の「三語」、天人の幽玄を窺ふ、此れ固より百代に光ある者なり、其の他高芙蓉の篆刻、吉田篁墩、木村蒹葭堂の博物好事、平賀鳩溪の物產戲曲、立松東蒙、太田南畝の狂歌、凡そ太平を文飾すべき者も、亦雜然として叢生せざることなし。

（文選餘技の叢起　三浦梅園寛政元年歿年六十七　高芙蓉天明四年歿年六十三　木村蒹葭堂享和二年歿年六十七　平賀鳩溪安永八年歿年五十七　立松東蒙寛政元年歿年六十四　太田南畝文政六年）

寛政三博士が白河樂翁侯を用ゐて、異學の禁を布きしは、山崎氏が會津侯を用ゐしに似て、而して其の跡更に明白を加ふ、當時弛慢の學風、頗る爲めに振飭を致す、柴野栗山最も此の擧に鋭意し、謗讟四起を避けず、關東五異學の徒、並びに山本龜田等、或は古學を倡へ、或は折衷を主とする者、皆敢て禁令に屈せず、關西に在ては赤松滄洲、書を栗山に

歿年七十五

三博士異學の禁

柴野栗山 文化四年歿年七十二

赤松滄洲 享和元年歿年八十一

西山拙齋 寛政十年歿年六十四

那波魯堂 寛政元年歿年六十三

岡龍洲 明和四年歿年七十六

頼春水 文化十三年歿年七十一

中井竹山 文化元年

寄せて、大に其の不可を論ず、唯だ西山拙齋、終始栗山を贊し、更に滄洲と辯ず。是より先き那波魯堂、其の師岡龍洲に背き、古學を飜して洛閩に歸し、頗る時に行はる、拙齋其の門に出で、而して識量遙かに其の上に超ゆ、夙に時習の靡薄を慨し、匡正に志あり、栗山幕府の教官と爲るに及で、慫恿して禁令を發し、頼春水、中井竹山等と聲氣相應ず、宋學の復た盛なるを致せるは、實に此等諸人一臂の力にして、此より其の後、新を標し異を立て、以て門戶を張るの風は、薾然として衰へたり。

三博士以後、幕府官學、勃然として振興し、述齋入て林氏を嗣ぐに及で、英邁の材を以て、益其の規模を擴大し、學政を更張せりと雖も、其の科試は則ち專ら宋學を以て統率し、特に人各私選あるを沮せざること、三博士の嚴たるが若くならざるのみ、故に經藝の講習、自ら因循に流れざるを得ずして、官學の門、經義の大家なし。但だ三博士よりして既に崎門の隘陋に鑑みて、頗る詞章の攻習を勸めしを以て、昌平學の師生、能文の人に乏しからず、又白川侯新政の後、浮文を戒しめ、實用を先ぜし効、士子の讀書、文儒を以て自ら稱することを屑とせざる者多く、皆大義に通ずるを以て自ら足れりとし、沈潛反覆、深く其

歿年七十五

官學經術の不振　林述齋天保十二年歿年七十四

龜井南溟文化十一年歿年七十二

龜井昭陽天保七年歿年六十四

考證學の盛行　中井履軒文化十三年歿年八十五

詞章の變遷　葛蠹庵寛政中歿　六如文化

の趣を味ふ者罕れなり、是れ經術の益振はざる所以なり。若し夫れ一世の趨嚮を察すれば、物門の餘焰漸やく熸して、龜井父子、僅かに其の餘緒を鎭西一隅に維ぐと雖も、亦頗る諸家に出入して自ら一家の言を爲し、必ずしも舊習を墨守せず、考證の學は則ち益盛にして、一時禁令の能く遏むる所に非ず、北山、鵬齋、錦城の東に於ける、淇園、栲亭の西に於ける、士林の傾倒衰へず、中井履軒、識力逸群、最も及び難しとす、而して淇園の晩年豪宕に耽り、履軒の放曠自恣なる、鵬齋の跡を酒徒に混ずるが若き、或は激する所あり、前時輕薄の習と同じからざるありと雖も、要するに猶ほ享元以來の風を脱せざる者と謂ふべし。

詞章には則ち淇園の文章を以て京師に雄視する、謂ふ龍門に規傚すと、中井兄弟、雅健左氏を學び、栗山諸人、唐宋大家を準とす、皆舊習を破る者、北山等の蘐社諸子を詆刺すると相前後す。葛蠹庵、僧六如等宋詩を倡へ、市河寛齋、寛政の初より、江湖詩社を結びて、益性靈を主張し、淸新流麗を以て後進を導き、大窪詩佛、菊池五山等之に羽翼して、纖巧雋奇を以て、更々相標榜し、一時海内を風靡す、詠物竹枝は其の好で新奇を競ふ所、以て前時古意少年從軍閨怨の題目に換へたり。其の詩酒放浪、輕薄の習は、又往時修辭の

中寂
菊池五山安政二年歿年八十四
古賀精里文化十四年歿年六十八
穀堂天保七年歿年五十九
菅茶山文政十年歿年八十
葛西因是文政六年歿年六十

徒の末流と相類する者あり、古賀精里嘗て其の子穀堂が、鵬齋、詩佛、五山等と墨田川に舟を泛べて賞遊を偕にせしを戒めて、舟中の徒皆鬼怪なりといへり、五山又袁隨園に倣て詩話を著はし、其の錢を納れて人の詩を收錄すること、前時江北海等の爲す所に異ならず。獨り菅茶山、卓然として時流に拔き、穩秀雅雋を以て、一家の面目を備へ、其の得意の候に至りては、往々神韻超朗、自然に絕調を成し、遙かに正享諸大家に接踵せり、葛西因是、心を詩文の格法に潛め、發明する所ありて、後生文字を商量する者の爲めに圭臬を貽す、亦此際に在り、此れ實に寬政前後、文化、文政に至る、二三十年間の大勢なり。論ずる者云ふ、偃武以後の詩、丈山艸山を以て沈宋とし、尙五山の風あり、木荻二家に至て、一變して唐明と爲る、然るに享元の下流、飣餖陳腐に陷て、口を開けば、陽春白雪聚星投轄、萬口一辭、人をして臥せんことを思はしむ、天明寬政の間、再變して宋元と爲る、然るに其の餘流、纖巧奇僻に陷て、聖得知、分外淸、頗る人をして吐棄せしむ、文化文政に逮で、專ら淸人の口吻を學び、或は沈確士に左袒し、或は袁子才を尸祝す、故に或は英靈閒氣を尙び、或は才調嫵媚を喜ぶ、是れ皆氣運に移されて然らざるを得ざるの勢也、江村北海の

經學轉移の候

松崎慊堂　弘化元年歿年七十四

猪飼敬所　弘化三年歿年八十餘

朝川善庵　嘉永二年歿年六十九

東條一堂　安政四年歿年八十

古賀侗庵　弘化四年歿年六十

佐藤一齋　安政六年歿年八十八

安積艮齋　萬延元年歿年七十一

「日本詩史」に論ずる所、味ふべしと、此論尤も此間變遷の消息を道破し得て當れる者也。

文政天保以後、經藝を以て專業とする者、漸やく寥落を致す、松崎慊堂は、諸國を出でて漢魏に歸し、猪飼敬所古學の流れを承けて、又該博と稱す、朝川善庵、東條一堂、徵引博渉を好む、要するに皆考據の學なり、古賀侗庵、淹通博綜を以て名ありと雖も、其の官學に在るを以て門戶を立てず、官儒佐藤一齋、安積艮齋の若き、皆文章を以て聞ゆ、一齋陸王の說を喜ぶと雖も、時不可なるを以て、敢て公然之を倡へず、其の公然之を倡ふる者は、則ち大鹽後素の若きあり、性已に褊狹、學も亦博からざるも、其の用力は深き、發明の說少からず、蓋し餘姚の學を奉する者、中江氏の後、正德中、三輪執齋の若きあり、巍然として一代の師儒たるも、亦纔で其の學を愼にする者なし、心學の徒、往往中江熊澤二氏の遺と稱して、一種淺近の說を市井の間に播し、狂歌者流と相表裏して、信を屠販傭作に取るも、固より士大夫の意を留むるに足る所にあらず、後素獨り墜緒を叔世に拾ひ、能て獨見を出す、亦伊物二子の後、希れに觀る所なり。鎭西には龜井昭陽既に老て、帆足萬里纔で興る、經術文章、一時に卓越し、又百家を淹貫し、釋氏外洋の書に旁及し、「入學

大鹽後素 天保八年歿年四十四
三輪執齋 寛保四年歿年七十六
帆足萬里 嘉永五年歿年七十五
關西の詞藝
賴山陽 天保三年歿年五十三
梁川星巖 安政五年歿年七十
廣瀬淡窓 安政二年歿年七十四
廣瀬旭莊 文久三年歿年五十七

新論」の著、侗庵稱して思孟以來、此書なしと謂へり、意ふに是れ博綜考據の學風、既に其の極に達し、發明創見の氣運、將さに開けんとする者か。

賴山陽私史を修めて、文名一世を蔽ひ、其の議論白石等先輩に資ること多しと雖も、文氣俊逸、步驟度に合し、叙事の妙に至りては、前に古人なし、從遊極めて盛んに、關西の文柄、殆んど其の手中に歸せり、一齋長齋、東都の大家と稱すと雖も、其の著述文章、能く當時の風氣を變じて、世好人心を動かすの大なるは、蓋し山陽の什一を望まず、詩も亦排奡の力を恃で、古體長篇を善くし、江湖社一派、七律詠物に纖靡たるを厭て、縱橫の才を詠史に逞しうす。纔で興る者は梁川星巖、精思績學、篤く力を詩に用ひ、宋を學ぶの淺俗を排して、唐人を宗とすと稱し、詩律精嚴、前古匹無し、卓として一代の鉅匠たり、而して其風骨俊悄、才調清艷なる者多きは、實に近世清人と氣類相感ずる者、玉池吟社の盛、江湖社に減ぜず、維新前後、詩を以て家に名くる者、概ね其の門に出づ。廣瀬兄弟、亦詩を以て鎭西に鳴り、宜園一派、元白率易の調を以て、頗る時俗の喜ぶ所と爲り、篠崎小竹も、亦詩文博物を以て、京攝の間に鳴る。

篠崎小竹 嘉永四年歿年七十一

水府史學、往々能者を出し、立原翠軒、藤田幽谷の若き、皆時流に拔く者、是より先き一藩の學、偏隅自ら局して、必ずしも時運と相關らず、翠軒復古の說に外に資り、以て之を一變す、幽谷之に繼で而して修史の擧を中絕の餘に起す、烈公國を承け、幽谷の門人、會澤正志「新論」を著はし、幽谷の子藤田東湖「弘道館記述義」を選するに及で、其の國體名分の論、一代を振盪して、四方風を仰げり、此れ亦經術文章の外に在て、時の風尙を動かすこと最も大なる者なり。其の興學の初、意見を會津の澤田名垂に徵して、頗る得る所ありと云ふ、名垂は會津國學者中に在て、山崎一派の拘束を厭ひ、賀茂本居諸氏の流を汲む者たり、然るに水府の學、義公の時すら、儒學に純なる者多くして、會津神儒合一の風無し、弘道館設けられて、而して神道の浸潤、大に前時より洽きを見れば、則ち山崎一派の學、亦未だ必ずしも近時國體論の淵源たらずんばあらざる也。

水府國體論

立原翠軒 文政六年歿年八十

藤田幽谷 文政九年歿年五十三

會澤正志 文久三年歿年八十二

東湖 安政二年歿年五十

澤田名垂 弘化二年歿年七十一

德川季世の學風

弘化嘉永以後、老儒大家、相踵で世に就き、新進才子、賴梁二家の指授を受けし者、星散棊布、大に相過ぐるなし、中に就て齋藤拙堂、阪井虎山、文章を以て壇坫の望を山陽に繼ぐ、拙堂最も大家と稱す、既にして文久中、昌平學、安井息軒、鹽谷宕陰、芳野金陵等

齋藤拙堂　慶應元年殁　年六十九
阪井虎山　嘉永三年殁　年五十三
安井息軒　明治九年殁　年七十八
鹽谷宕陰　慶應三年殁　年五十九
芳野金陵　明治十一年殁　年七十七
佐久間象山　元治元年殁　年五十四
藤澤東畡　元治元年殁　年七十一
春日潛庵　明治十一

を徵す、息軒の經術博洽精核は、慊堂、侗庵以後の無き所にして、兼ねて文辭に妙なり、宕陰の文章は、簡錬勁拔、遙かに前人に超越す、皆慊堂の門に出でたり、佐久間象山、經說は一齋に承けて、餘姚を主とし、其の超群の才、西學に得る所ありて、盛んに時に鳴る、當時藤澤東畡、物氏に出で別に一家を成し、春日潛庵、山田方谷、王氏の學を以て實用經濟の才あり、並びに關西に名あり、森田節齋、文章を以て聲譽籍甚、林鶴梁と東西相稱引延譽すと雖も、名或は實に浮く。蓋し直截簡捷を喜ぶ者は、餘姚氏に之き、精緻核實を好む者は、考據派に歸す、而して獨創特見の士は、則ち百家足らず、更に之を浮屠泰西の說に參せざるを得ず、世復た程朱一統の時に非ず、文運の變徵、漸やく將さに熟せんとす、其の成るや必ず將さに一種の異觀あらんとす、勢或は復た後の伊物諸子を出さんもまだ知るべからざりし也、但だ時幕政の末造に際し、內外搶攘、士人復た呫嗶を事とし、文藝に從ふに遑あらず、十數年間衰運日に長じ、以て明治維新の際に至り、時運の變態は、從來の文物を擧て、根柢より芟除し了し、其の變して而して成るの暇あらしめず、以て三百年文運を將て、一筆に勾斷し去れり。慶元以來、儒學の變遷、及び其の旁出の系たる文藝の

年殁年六十五
山田方谷 明治十年殁年七十三
林鶴梁 明治十一年殁年七十三

沿革、大略此に盡く。

儒學　下

潜流の時

夫れ清原頼業の卓見は、猶ほ長庚の空に當るが若し、官私の學、光既に虞淵に沒して、大學の曹司、鞠して茂艸と爲り、勸學院の雀も、復た蒙求を囀づるの聲を聞かず、頼業獨見を此間に奮ふ、豪傑の士と謂ふべし、五山僧徒が禪餘に渉獵する、桂庵、文之、梅軒、如竹が亂世に講說する、烟嵐を隔てゝ、月の見はれ月の滅する星光を望むが若し、唯一の運方さに成るの日、惺窩氏出づ、乃ち皎々たる月輪を東嶠の上に見る也。故に惺窩以前、姑らく名づくるに潜流の時を以てせん、譬へば大河の崑崙に發し、下關に趨き、分流岐出、合して鹽澤に滙し、伏流千里なるが若し、文化未だ開けず、或は薩南に、或は防長に、或は南海に、散じて未だ合せず、中心の求むべきあらざる也、其の積石に至りて、始めて禹域を浸す者は、惺窩の時然りと爲す。

京師中心の時

惺窩の後七八十年、洛閩の學、一味滔迸す、其の惺窩の門に出でざる、例へば南學一派の若き、亡羊專齋等の若き、歸化の人、朱陳諸子に親炙せし徒の若き、源委或は異なるも、滙して而して一に歸す、惺窩の若きは、則ち又陸王を外にせず、詞藝を貶せざりき、羅山惺窩と嘗て朱陸を辯ずるも、必ずしも嚴に涇渭を分たず、山崎闇齋に至りて、駁を變して純と爲し、麁を擇で精と爲し、高く性理を談じ、門戶の習、此よりして開くと雖も、未だ義理の異同を生ぜず、猶ほかの瞿曇滅後、前番の上座大衆二部、論諍未だ發せざるがごとき也。此時に當りて、京師には後水尾、後光明以下諸帝、皆聰明英邁にまし〳〵、後水尾帝は三宅亡羊、松永昌三等を召し、後光明帝は朝山意林庵を召し、靈元帝は仁齋の門人北村可昌を召して、經を進講せしめたまふ、就中後光明帝最も儒術を崇奉したまひ、御製の序を「惺窩文集」に賜て之を刊行せしめたまふ、皇弟尙仁親王、亦學を好み、栗山潜鋒、嘗て其の侍讀たり、「保建大記」を著して之を獻ぜり、其の他舊儀を興復し、故例を修備すること、慶長以來、一二百年、史筆を絕たず、而して京師の繁華、戶口の滋殖、明和安永の際に至るまで、猶ほ上進の勢徵すべき者あり、其の元祿以前に在ては、蓋し江戶の上

北村可昌享保三年歿年七十二

米川操軒　延寶六年歿年五十三
藤井懶齋　歿年未詳
仲村惕齋　元祿十五

に出でたりと云ふ、加ふるに文雅の俗、古より傳ふる所なるを以てす、徂徠稱して、洛は王臣の外、唯工賈之に居る、人に恆祿なし、唯利を是れ逐ふ、纖嗇の俗、周人惟れ肖たり、即ち儒生の其の間に寄する、亦生を爲し難し、則ち古耕肆を開き、百千群を成し、日給するに遑あらず、性を語り天を語り、率ね宋籍に非ざれば不可なり、其れ孰れか能く觚を握り頭を仰げて屋梁を視、曠日彌久、以て其の神仙より來る者を竢たん哉、故に聰僞仁齋の若きありと雖も、猶ほ其の習ふ所の者に率ふ、洛の重しと爲す所の者は其主か、王臣周禮秦を火の餘に執り、以て海內を欺き、而して名廬靡曼、百貨襍巧の出づる所と、其の山川の韶秀、語音の都雅と、是れ亦洛人の誇る所、習ひて以て意と爲し、見る所甚に卑し、復た其の外を思はずと云ふと雖も、其の講業を以て生を爲し、諸侯の祿を受けずして、而して能く道を樂しみ學を勸むることを得る者、京師の地を措て、當時他に求むべきなし、故に此際文學の隆、京師を最とす。惺窩、闇齋門下の諸子より、米川操軒、藤井懶齋、仲村惕齋、臼田畏齋等、仁齋、益軒と時を同じうせる諸儒に至るまで、凡そ此地に在る者、大抵高行淸節を以て、樹立する所あり、乃ち益先生の宇都宮遯菴、「俚諺抄」の著者巨利貞

年殁年七十四

自田堤齋元祿三年殁年四十六

宇都宮遯菴寶永六年殁年七十七

毛利貞齋遯菴同時の人

京師中心の人物功業

二山伯養寶永六年殁年八十七

齋の若きと雖も、皆祿仕に汲々たらずして、自ら能く家を成すことを得、其の弊や寡聞固陋にして、世用たらざるの嫌は則ち免れずと雖も、かの文藝の末技を傳り、權貴の弄臣として、儒士の面目を汚す者は、之れ無し、此れ京師儒風の一特色と爲すべし。

夫れ文化の中心此に在れば、則ち其の結で作す所、人物功業、必ず亦世道人心の大、乃至文辭技藝の末と相影響する者を出さずんばあらず、其の體察實踐の範を垂れて、德川氏末世餘姚一派盛に向ふの氣運を二百年の前に萠芽せしめし者、乃ち中江藤樹を近畿の一小村に生し、其の戰國處士と昌平儒人との交會に當りて、一身兼ね具へ、實用の才に富み、學究の習なき者、乃ち熊澤蕃山を生ず、其の後江戶に朱學の徒、二山伯養あり、蓋し藤樹の風を聞て而して興る者なり、山鹿素行は必ずしも蕃山を學ぶに非ず、而かも其の江戶に於ける地位、蕃山が京師に於けると類し、諸侯に禮重せらるゝことと、亦蕃山が言、堂上公卿を動かすに似たり、其の蜚行は則ち之に後れ、材略も亦及ばず。其の宋學統一の時を代表して、類に絕ち萃に拔く者、乃ち山崎闇齋を生じ、其の宋學統一の勢を轉捩して、獨見創思の時に嚆矢たる者、乃ち伊藤仁齋を生ず、會津氏をして異學の禁を申べしめし者は、

谷秦山享保三年殁年五十六　竹内式部文化七年殁年九十三　高山正之寛政五年殁年四十餘　蒲生君平文化十一年殁年四十七

江戸上着の林氏に在らずして而して闇齋に在り、淺見絅齋は山崎氏の顏曾か、處士の勤王を倡ふる者、斯人より始まり、「靖獻遺言」寥々たる小册子と雖も、其の人心を動かせし効極めて大なる者あり、望楠書院、世々尊王賤覇の議を持して、凌厲世に傲る。其の後寶暦の變、首謀竹内式部の若き、亦崎門の學を修めし者、而る後高山、蒲生の徒の關東に起る、皆風を聞て觀感する所あり焉、且つ崎門の士東に之く者、往々侯門に仕を求む、三宅尙齋、三宅觀瀾の若き、此を以て絅齋、谷秦山等と相惡し、故にかの南學峻嚴の風は、獨り關西に在て家を成せる儒士のみ之を傳へし也。仁齋が徂徠と倶に一國思想獨立の爲めに先驅として、百世朽ちず、而して徂徠の初年、實に仁齋に傾注し、書を寄せて疑を質せるを見るに、此を以て二人を抑揚すべきにあらずと雖も、先驅の功、自ら掩ふべからざるあり、爾後七八十年門戸繁盛の時尚、之を恢にする者は則ち徂徠、之を開く者は仁齋に歸せざるを得ず、世公論あり、物門に在りて春臺の若き、亦嚆矢の功を仁齋に許し、本門に在りて祇南海の若き、亦贊するに至言要言、聖賢を左右にし、以て邪說を擯斥し、截然壇を把て、世の爲めに先登す、景星卿雲の仰ぐべくして企つべからざるが若く、古の所謂超然

獨立する者と爲す、榊原篁洲、仁齋の學未だ大に行はれざる時に當りて、其の一家言を構して、先儒を辯駁するを見て、京師の學、此より變じ、京師の變は、則ち大阪江戸の變たらんと爲す、此言や實に以て仁齋が倡首たるの功罪俱に斷ずるに足るべく、幷せて當時文化の中心、京師に在るを徵すべき者矣、父子門人と、盛んに化風を揚ぐること、物氏の代り興るに及ぶまで、三四十年、故に惺窩闇齋、洛閩統一の時を通じて百餘年、此を京師中心の世と爲す。詞章に至りては、木門の桃李妍を爭ひしは、錦里東下の後に在れば、創業の功、之を京師に歸するを得ざるが若きも、錦里平安の人を以て、風體一新の機を開きしを觀るに、亦京師文化の醞釀する所にあらずと謂ふべからず。

關東文學の淵源

江戸が天下文化の中心と爲りしは、勢豈に元祿寶永より漸して、享保元文の際に全く成る歟。蓋し關東の文學ある、金澤文庫、足利學校、海內擾亂の際に於て、猶釋菜の禮を存し、其の藏書の文苑の珍たること、今に於て商彝周鼎の若し、金澤實時、貞顯の時に創し、上杉氏三世、太田道灌、小田原北條氏の若き、四塞の地に踞して、一方の民を安ぜしを以て、攻城野戰の暇、皆能く心を文學に用ゐ、以て江戸文運の爲めに遠く淸流を存したり。

林家の壟斷

澤庵正保二年寂年七十三

或は傳ふ野中氏廿二歳の時小倉氏從役を勤め江戸へ太守の御供せられし時に云遣すはて愛許に、禪學をすれとも、何

德川氏の開府に及で、既に林羅山を用ゐて注記の職に備ふ、家康の馬上天下を得て、而して世故に經る、儒士に聽て而して政を爲す者に非ざるも、亦興學に志なしとせず、慶長活字は以て印書の業を盛んにせんと欲するの意を見るべく、其の外國と往復する毎に、文教の張らざるべからざるを思ひしは、疑ふべからず、故に後人の羅山を咎むるに俗學を以てして、其の禮待せらるゝことと、崇傳天海にだも及ぶこと能はず、文教の興隆をして、一蹶して七八十年の晩きを致さしめたるを議するは、未だ必ずしも確論と云はず、寛永中將軍家光、復た儒術を起さんと欲す、羅山の人と爲りを鄙みて、遂に心を傾けて澤庵に歸依せり。元和寛永の間に當りて、江戸の宋學、未だ必ずしも京師に讓らず、野中兼山が未だ學に嚮はざるや、小倉三省の江戸に在るに託して理書を購はんとせしに、三省答ふるに其の書は待たまへ、江戸に儒學といふてあぢた學文はなきぞ、是でなければ、天下國家をさまらざる由といふを以てしたるを觀て、以て其の然るを知るべし。然るに林氏三世、徒らに博洽を以て稱せられ、纂輯する所諸書、世俗たらざるに非ず、且つ草創の際、語りて詳かなるを務むるや、勢擇で精しきこと能はずと雖も、其の宋學を主として、而かも心を道德性命の

艸紙と云書なし、禪の則を覺らす、故に其元にて句艸紙を求め下したまはれと賴みやられし小倉氏返答に、如仰我等も只今迄、禪學にて打過しか、愛許にて風聞候は、儒學とて面白き者有之の由、幸の便り有之、中庸と云書を求め、此頃最中見候、中々禪學より

理にだも用ゐず、巫醫卜祝と幷肩して士流に入ること能はず、又た務めて學權を龍斷して族屬門生の外、他人の之れを以て家を起すを欲せず、水府修史の擧すら、陰かに之を妨遏せんことを謀りしと云ふ、故に江戸初世、文學の振はざりしは、必ずしも當時戸口未だ大に滋さず、神祇、白欄諸黨の士人より所謂町奴の徒に至るまで、任俠武健に偏せるに由るのみならず。山鹿素行が「聖教要錄」、疑を洛閩に挾さむことと、伊藤氏の後に在らず、而かも入らざる書物著述を以て譴を蒙り、終に其の晩年、専ら兵家を以て自ら居り、儒學を廢せしむるに至る、亦獨り山崎氏の故に由らず、名相松平信綱の若き、其吏才を恃で、林春齋等ありと雖も、迂として之を禮せず、而かも其の熊澤蕃山に於けるは、即ち一二會晤するも優待至らざることなし、是を以て之を觀れば、林氏殆ど其の責を辭することを得ず。

將軍綱吉の時は、猶ほ漢の孝武、唐の玄宗の時のごとき乎、前二三世、奢華の風未だ開けずして、興役の事既に罷み、蓄積天下に洽く、豐富餘あり、坐ながらにして此の盛運を享くる者、豈に侈大の欲を發せざるを得んや、孝武の遠略を務め、方士に惑ひ、桑弘羊等を任用せる、玄宗の安祿山を寵し、李林甫に任じ、楊太眞に溺る、綱吉の柳澤吉保、荻原

面白く候間、求下候とて、中庸章句を一冊差越されき、是萬萬年朱子の道の開くべき最初の端なり。林春齋延寶八年殁年六十三

江戸豐盛の時

重秀、隆光等を用ゐる、輪臺の詔、靈武の讓、綱吉歿後、外間の訛傳を招きしも、亦終始相類す、獨り其文學隆興の事に於て相類する者なからんや、西漢の文學、孝武より盛なるはなく、有唐三百年、開元天寶、以て其の最高潮とす、則ち今乃ち綱吉の學を好むも、毎に親しく書を講じて、諸侯士大夫をして之を聽かしめ、以て自ら其能に誇り、儒員を以て士林に列して、皆蓄髪俗に歸せしめ、林氏の私學を擴めて、官學の規模を定む、幕府既に然れば、大小の諸藩、靡然として風を受けさるなく、國學の建設、儒士の招聘、一種流行の勢を成せり、家宣之に繼で、亦志文教に篤く、吉宗文術を惡むも、祖制の儀格に則ると雖も、儒術の治具に資すべき者は、亦善く取て之を用ゐたり、元祿の際、江戸の繁華、前古に超越して、已に京師を凌ぎ、商賈百工、優倡雜技の徒に至るまで、盡く焉に趣て、而して售んことを求めさるなければ、儒士の口を講堂に糊して、貧苦世を送ふるを迂とし、少しく功名に志ある者、亦翕然として西に背いて而して東轡せさるなし。天和中、木順庵の東下するや、門下の盛なること、既に林氏を壓し、其の才を育し能を陶せること、三百年比なき者は、豈に鬱勃として暢ぶるを得ず、積で而して愈厚き關東の氣運、先つ發洩の路

を此に得たるが爲めか、物氏の力量、順庵の上に在り、人を取るに才を以てすること、木門よりも寛に、而して其の成就せる人材、氣魄光焰、寧ろ讓る所あるが若きを覺ゆる者、伯樂一過の後、冀北馬群寥々の狀あるに非ざるを得んや。寛永正德より後、木門の英華、一時煥發し、而して徂徠復古の學を此時に倡へ、學は則ち辯博を尙び、文は則ち豐美繁縟を喜ぶ、特に其の氣象崢嶸、獨見を以て之を運すること、後の獺祭者流の若くならざる者あり、以て此の盛時の好尙に投じて而して太平を粉飾するに足る、徂徠の人と爲りは、人情に老熟し、其政術を談ずる、亦基づく所此に在りて、白石の禮文に心醉するが若くならざるも、其の學風に至りては、同じく豐華昌明の世を代表する者たるを失はず、時の人を作る、此の如き者あるか。

文物の東遷

意ふに延寶以後、三四十年間は、京師の文物、華實既に備はり、其の儉薄の土俗、殆ど以て之に培ふに足らず、累々たる美菓、將さに之を篚し之を篚し、輸して他に之かんとし、新興の江戶、乃ち關東衍沃の地勢と、武治豪華の習俗とを以て、林氏一株の蓁々に滿つる能はずして、將さに西の有餘を承けて、其の不足を補はんとせる時なり。山崎闇齋が東下

谷一齋元祿八年歿年七十一

佐々十竹元祿十二年歿年五十九

中村篁溪正德二年歿年六十六

酒泉竹軒享保三年歿年六十五

安藤素軒歿年不詳

安藤年山享保元年歿年五十八

鵜飼鍊齋元祿六年歿年六十一

鵜飼稱齋享保五年歿年六十九

は、寛文中に在りて既に陽氣の微動を見る、谷一齋、南學の種を移し、水府史館の開創に及で、上國の紅白、聚めて一欄の中に栽ゑたり、是より先き「武家系譜」の纂輯林氏惺門の諸子と力を協せて之を成す、猶ほ多く上國人に屬す、既にして「本朝通鑑」の纂輯は、即ち其の門下生員の力、優に之を辨じたり、然るに水府の修史は、既に林氏に對して別に旗幟を建て、而して又用ゐる所の文士、佐々、中村、酒泉、安藤兄弟、鵜飼兄弟、三宅、栗山等、大抵京畿以西の産に係り、木門の多士、雨森、松浦、祇園、西山、南部、榊原等、十に八九は西人たれば、元祿寶永、所謂常憲院時代の文物、燦爛目を奪ふと雖も、竟に是れ移植の芳菲たるに過ぎず、其の猶ほ未だ老熟せる平安の地、仁齋の若き碩果を有して、四方の瞻視を集むるに及ぶ能はざりしは、宜なり。享保に物氏の興るに及では、則ち其の門下の英俊、太宰春臺、安藤東野、平野金華以下、大半東國の人に屬し、不ざれば、其の東國に長じ、東國に業を成せることゝ、服南郭等の如く、不ざれば其の東國根據の力に託して其の地方に振ふことゝ、山縣周南等の如き者なり、此際大斡旋の力は、只だ一個狄生總右衞門の指呼に在りき、乃ち時勢と云ふと雖も、徂徠も亦人傑に非ずとせんや。

雨森芳洲寶暦五年歿年八十八
松浦禎卿享保十三年歿年五十
西山健甫元祿元年歿年三十一
南部南山正德三年歿年五十五
安藤東野享保四年歿年三十七
平野金華享保十七年歿年四十
山縣周南寶暦二年歿年六十六
蘐門の傳播

太宰春臺以爲らく、徂徠の志進取に在り、故に其の人を取るに才を以てし、德行を以てせず、二三の門生、亦其の說を習聞し、德行を屑とせず、唯文學を是れ稱す、是を以て徂徠の門、跅弛の士多し、其の才を成すに及でや、特に文人に過ぎざるのみ、其の教然る也と、雨森芳洲、本門の高足を以て、深く徂徠に服し、其の子をして就て學ばしめしが、既にして徂徠が人を教ふる德行を先ぜずして、家塾序を失ふを以て、少年を託すべからずと爲し、塾を出でゝ歸らしむ、然るに蘐門の學流行迅速に、十年ならずして海內を風靡せる者は、亦此の寬放の風、以て之を便にするあり。蓋し武治の豐盛、前代に比なく、而して社會の風氣、腐爛已に萠す、上には權寵の政を弄する、盛んに奢靡の習を煽で、復た創業儉素の制に非ず、下には貨權市賈に歸して、豪興侈樂、流俗の趨嚮を變じ人々の志す所、富貴一途に在りて、苟くも以て功名利達の圖るべくば、賂託便佞、爲さゞる所なく、前時道義を守り、意氣を尙び、貧賤に終へ、凍餓に瀕して悔いざるの風、日に銷し月に磨せり、此れ蘐門の傳播、從前山崎伊藤諸氏の比に非ざる所以。故に徂徠の義理に於ける、二辨の著、斷々然として一家の言を立つると雖も、其の門下經義に邃きの春臺は、文辭に長ずる

の南郭に視るに、世俗の崇奉至殷なる能はず、是れ獨り其の人と爲りの峻嚴近づき難きと、溫藉親しみ易きとに由るのみならざる也。

學者の黨爭

徂徠の時に當り、木門の氣焰方さに熾んに、門下の英俊、往々黨を樹てゝ相是非する者あり、雨森芳洲は白石を謂て心術測るべからずと爲し、反て徂徠と親しみ善し、鳩巢が白石と善きを以て、白石が盛んに事を用ゐるの日は、頗る之に滿たず、又其の廢せらるゝの後、吉宗の問ふに白石の狀を以てするも、肯て之を薦めざるは、則ち志尙の同じからざるに由るあるも、其の徂徠と並びに眷顧を享保に受るや、徂徠は每々白石を罵り、以て其の主柳澤が元祿に大用せられし後を承けて、白石が大に更革を施せしに不平なるの情を洩らし、鳩巢は又徂徠の學術を不正として、其の建言する所、外藩を削殺し、譜代を增封する等の議、往々之を排擊せり、徂徠が木門の多士に於て、彼を排し此に黨せざるべからざる者、以てかの勢焰猶侮り難きを見るべし。徂徠の門、春臺の識見自ら恃む、其の師と雖も之を攻むるを避けず、其の正德の政を稱して、元祿の跡を議する等、蘐社中に在て、好で異見を立つ、夫れ內訌の生ずるは、則ち每に敵國外寇の患寡きの日に於てし易し、春臺が

江戸中心の時
高野蘭亭寶曆七年歿年五十四
桂山彩巖寛延二年歿年七十二
井上蘭臺寶曆十一年歿年五十
良野華陰明和七年歿年七十二
中村蘭林寶曆十一年歿年六十
中根東里明和二年歿年七十二
河口靜齋寶曆四年

蘐社の籬下に一生を終へざらんと欲するを觀ば、適に大勢の物氏に集まるを知るに足る也。

徂徠歿して後、南郭が文壇に主盟たること三十年、江戸の文字を解する者、芙蕖社に參するを得ざるを以て恥とするに至る、高野蘭亭も亦名聲之に亞ぐ。此時に當り、林氏の門、桂山彩巖、秋山玉山の若き、亦修辭を以て著稱せられ、井上蘭臺の若きは、其の說反て物氏に近く、室鳩巢が朱說を固守するを駁して、幕朝必ずしも宋儒に依らずと論じ、良野華陰、上國に去る後、考證に浸淫す、鳩巢の門に在ても、中村蘭林の若き、亦往々朱氏を議し、其近言近意を以て、古言古意を解するの謬を道ふは、物氏の學に類す。中根東里は終に餘姚氏に往て而して還らず、紛々此の如し、其の能く舊業を守る者、河口靜齋以下、蓋し幾くもなく、概ね亦偏師の材、力以て滔々たる者を塞ぐに足らず。其の關西に在ては、山縣周南、荻の藩學を建つる、一に物氏の繩墨を奉じ、中國九州、風を望で之に趨く、和智東郊、瀧鶴臺、林東溟、其の門に出でゝ之に羽翼し、東溟は則ち京攝の間に教授すること殆ど三十年、以て物氏の學を鼓張す、阮東郭、菅甘谷も亦之が鼓吹を爲し、其の他梁田蛻嵒の明石に仕へ、秋山玉山の熊本の學を建つるが若き、經義は物氏に依らざるも、亦皆古

歿年五十二
和智東都明和二年歿年六十三
瀧鶴臺安永二年歿年六十五
林東溟安永九年歿年七十三
阮東郭寶曆十三年歿年七十四
菅甘谷寶曆十四年歿年六十九
石川麟洲寶曆九年歿年五十三
劉龍門明和八年歿年五十三

文辭播及に與て大に力ある者たり。然るに堀川派に在ては、東涯元文の初に歿して、古義の徒、其の將帥を喪ひ、三輪執齋、餘姚を唱へて挺然獨り秀づるも、知行合一の旨は、輕俊文士の相習染し易きか若きに非す、宇野明霞、徂徠の風を聞て興り、別に一家を成すも、亦世を永くせす、浪華懷德書院の諸子、朱學の墻壁に嬰り、石川麟洲、木門の流を酌むも、皆勢甚だ振はす、古文辭の橫行を極むる亦勢の必す至る也、而して古文辭派の中心は、則ち江戶の芙蕖社を大なりとす。赤松滄洲が劉龍門に與ふる書に稱す、平安の文學に於ける、其の由來尙し、然れども今を以て之を觀れば、東都の盛に及ばざること遠き甚し、乃ち名下果して虛士なしと稱するに足る者、唯だ岡千里一人、其の他彭々僙々、要するに亦春秋に義戰なき者と。此書の成るや、寶曆明和の際に在り、洵に文化中心の轉移、形成りて久しきを知る也。

東西儒風の同異

「夫れ京儒の弊は寡聞固陋に在り、齷齪徇俗に在り、而して其の美は高行淸節に在り、躬踐體察に在り、能く其の弊に脫するを得しは、益軒、東涯數子に過ぎず、東儒は則ち之に反す、列侯第宅、雲の如く連なるの地に在りて、苟くも碩儒と稱す、厚聘重禮、爭て之を

引かざるなし、其錫米僕賃の資に困しまずして、博渉を務め、治聞に誇るを得るは、固より其の所なり、但だ利祿之を外に誘ひ、博雜之を內に亂せば、則ち志の堅かり難く、心の泛なり易きは、亦免かれざる也、是れ仁齋が肥侯千石の聘を辭するを得て、而して徂徠が柳澤氏五百石の祿に総らざるを得ざる所以なり、二山伯養其の間に在るは、眞に鳳朝陽に鳴く者。東儒の長處は、徂徠出でゝ而して之を文辭に導き、而して大勢益定まる、故に江戸が文化の中心たるや、其の特色は實に詞章に在りき。蘐社諸子、春臺、南郭より、既に一生を仕進の途に託せず、講業を張り、文社を設け、町儒者を以て門戸を立つる者、日に滋し月に繁く、徂徠が之を洛儒に譏る所も、其の沒する比ひには、則ち東儒に在て必ずしも怪しむを爲さざるに至る、是れ江戸の民物富庶、漸やく京師に駕軼せるの致す所にして、其の能く文化の中心たるを得る者、亦實に此の形勢あれば也。然るに東儒の純ら經術を以て人に教へずして、而して好で文辭を以て徒を聚むる者、是も亦其の風土の宜しき所たるを以てするか、則ち其の豪華の觀は、京儒寒薄の風に似ざるも、其の見る所の卑しきは寧ろ之に愈らずや。且つ之を澁井太室、江村北海の言に徴せん、太室曰く、關西の學、終身

師の書を誦し、純にして駁ならずと爲す者あり、辭藻を黜けて正道を存すと爲し、而して深く家誡と爲す也、述作を好で、而して辭藻の外、經史あるを知らざる者あり、人々韻府を撰し、家々類書を藏し、甚しきは、每春花に對し、每秋月を賞し、輯けて冊を世に行ふに至るなり。關東の學、經を治むる者寡く、辭を修むる者多し、大抵文章は則ち軌範文範、明諸家、詩は則ち于鱗選する所唐詩、明七才子絶句解、史は則ち左氏、司馬、典故は則ち「世說」「蒙求」、多きを具へて之を奇とし、猥談之を誇り、方伎之を賤す、相傳へて曰く、某は唐詩に精し、某は「世說」に熟す、某は于鱗尺牘に嫺ふと、進で其の講說を聽き、退て其の訓詁を搜り、童習白紛、以て一語の出づる所と、一字の據る所とを求む、得ざるあれば則ち時日を惜まず、行露を憚らず、必ず窮めて而して止む、此を以て家を成す、-大異事なりと。北海も亦云ふ、惺窩先生よりして後、京師の學匠、講說を宗とし、師弟の間も嚴重にして、其の徒の師を信ずることも厚く、講釋を聽くにも、必さゝ書を丁寧にして、世上のわる口にいふ、先生こゝに於て一咳すと云までも記するならはしにて、其ころ中島先生など云しは、諸州の書生を集め、所謂舌耕の席を開くといへども、さのみゝたりなる

ことはなかりしなり、然る故に物學ぶことなき世俗までも何となく、學者は敬すべき事のやうに覺え、尊貴の學者を欵待ありしすかたも、今時とは大に違へり、然るに護園の學起り、過激の言多く、やゝもすれば洛儒々々といひ、其抗顏人師と稱し、叨りに自ら尊大にするなどと非議し、又講釋は益なき事のやうに云ひ、輕俊の輩、風靡雷同せるより、學風一變して、講釋のもやう大にかわれり、其故いかむとなれば、徂徠既に講釋は益少しといへり、さらば徂徠に從遊の人は師說を守り、講說をなして人を集むることはなさゞるかといへば、左にはあらず、中にも南郭など、赤羽に在て「左傳」「唐詩選」を講ぜるには、其席へ出る人、殊におびたゞしく有しなり、是も時勢のやむことを得ざるにて、高名の下には業を請ふもの多く、一人一人へは解說もしがたければ、これを一席に集めて講釋せざることあたはず、又一つには仕へて俸祿を得るにもあらざるに、姑らく耕織に代るに是を以てするも、餘義なき事なり、然れども講說の席を開けば師說に違ふ、師說に違ふといへども其勢ひ講說を開かざること能はず、此に於て更に說をなして曰く、我洛儒の抗顏人師と稱するに倣ふには非ず、たゞ是を以て衣食のたすけとし、耕織に代るのみなりと、是より

して講釋をする人も聽く人も其樣子大に變ぜり、いはゞ京師の宮寺にて軍書の講談をたす輩の席へ、人多く集まるにさのみ異ならずと、關の東西、古今の變、誠に是の如き者あり。

文章布衣に落つ

云ふあり、此御國、文雅の盛なりしは、寶永正德の間なり、享保の中頃より、文雅草莽に下り、有識の士、是を前知せるにや、赤石蜕嵓先生の詩に、「登ㇾ高能賦今誰是、海內文章落二布衣一」と俊杰先見の明恐るべきにあらずや、民間にはかり文あらば、文章なり、無位無官の者、詩文作るは、蟲草間に吟ずるなり、これさへ近年傑出の者なし、枯草の蟲、霜枯の音といふべしと、是れ當時に在りて、文物を觀るに社會の英華を以てせずして、治其の衰徵とするの見解に出づ、故に其の疎謬は辯ずるに足らざれども、此の言に因て而して文運の推移を見るべし。蓋し京師に在ては、文學始めより處士、町儒者の育成する所たりしも、江戶は即ち之に異なり、是れ觀察する者が其の衰勢に際し、顧みて木門、蘐社の盛時を想ひ、驚詫して其の隆汚の因を上下の位に歸する所以なり、若し百年無事、社會機關の漸やく複雜に赴くや、恒祿の士、每に窮乏に困しみ、農商の實力、其の貨權と同じく張り、而して綱吉の時、侈大の風、頓に其の勢の鬱興を致せるを觀ん者には、渙然として

其の解を得難からざるのみ。此の形勢の變や、時と彌長じ、享保の吉宗、寛政の定信、明君賢相、綱紀を振肅するあるも、以て之を回らすに足らず、文化天保の際に及では、屢令を下し、市賈農耕の徒にして、浪士を聘し、武技を習ふを禁ずるも、終に制すべからず、文武の實力、士種の手を離れて、階級制の社會、乃ち顛覆の漸を成す、德川中葉以後の史蹟、此の如きのみ。然れども寛政より天保に至る五十年、其の文運は實に草莽の士に成就せられて、而して鉅匠名手、往々寶永正德の諸子に軼過する者あり、草間の蟲韻、未だ必ずしも喬木の禽音に讓らざるなり。

文化中心の動搖

文雅の士大夫の間を脫して、草莽の間に榮ふること、東西皆然るに及では、其の中心の權衡、復た搖て而して安からず、南郭寶曆に歿してより、江戶の文壇に主なく、物學の末流、蔓延滋甚しきも、雜卉の時を得るが若く、大に相過ぐる者なし、折衷學の興るに及ぶも、其の首倡の名家と稱する者すら、僅かに一方に割據して、先輩を詆刺し、以て其の立命の地を占むるに過ぎざれば、復た此を以て一代の風尚を變ずること、徂徠當時の如きを望むべからず、但だ家重、家治二將軍の時、政綱頗る弛び、而して田沼意次、其の機變の

才を弄して、一世を攪亂し、百萬の市民をして邯鄲夢裡に恍惚として麻醉せしめたるが爲めに、江戸の繁華、益下層に入りて、猥褻に流れ、詞章の末節に生を託する徒をして、自ら其の汚下を覺えざらしめしのみ。乃ち寛政異學の禁制、官學の振興に至りては、其の得失相掩はざるの觀あり、柴野栗山が白川定信に得て、盛んに其の議を主とするに當り、林信敬すら頗る之に平ならずして、程朱を偏守するは、幕府歴世の意に非ざるを上言せり、而して三博士歿して後、其の禁も亦弛で、且つ其の禁制の範圍に、一代の學風を驅て、程朱に歸らしめずして、而して他に趣かしめたりと雖も、かつ世の學徒をして、其の一生の安する所は且らく問はず、必ず先づ東漸して昌平の黌舍に入るの風を生ぜしめたるは、則ち全く效なくんばあらず。之を要するに、文化の中心、一たび江戸に歸してより、其の外形に於ては、德川氏の世を終ふるまで、復た他に移らざるが若きも、其の實力の萃まる所は、則ち常に其の外形に伴ふ能はざる者あり、是れ察せずんばあるべからざる也。

尾參勢濃の材

我が邦の地形、山骨峻聳して、直ちに海壖に薄り、沃野極めて乏し、關東八州は其の最も大なる者、畿内諸國、地力厚からずと雖も、河川縱横、又大裏海を控へ、漕運の便、比

南宮大湫　安永七年歿年五十一
塚田大峯　天保三年歿年八十八
鷲津毅堂　明治十五年歿年五十八

より便なりとするは莫し、故に此の二方土なる者は、天下民物の滙集する所の處、文化の中心、彼に移り此に轉ずるも、竟に此の二方土の外に出づる能はざる者は之が爲なり。故に昔に在て東國王化未だ洽からず、文物の輸入、西蕃の交通に仰ぐの日は、裏海沿岸、人文最も昌んに、吉備一路、材能毎に産す、文化中心、漸やくに東國に移るに及で、京師江戸、兩都を聯繫する海山二道の材、鬱然として茂生するも、亦勢の必ず至る也。尾參勢濃の野、其の衍沃關東に亞ぎ、其の津泊の便畿内に亞げば、則ち材の此間に生ずる者、尤も滋く且つ偉なりとす、尾張の敬公學を好み、堀杏庵、陳元贇等を聘せしより、國文儒に乏しからず、而して明和安永、關東の儒風、委瑣殆ど極まり、詞藝輕薄の習、一世を靡爛するに當り、細井平洲、南宮大湫、尾材を以て晩に江戸に出で、雅量德行、澁井太室等と同じく四方の景仰する所と爲り、就中平洲が米澤の政治に與り開ける底績、嘖々傳稱せらる、塚田大峯の經義に於ける、亦一時の選、其の後風流文士、恒に跡を絶たず、郁々たる文國として、以て幕末に及び、鷲津毅堂の經術、森春濤の詩詞、明治の世に亘りて皆一代の鉅匠と稱せらる。津の藤堂氏も亦鞬櫜の初めより、早く文學を尚で、如竹、三宅寄齋等、當

森春濤明治二十二年歿年七十一

奥田三角天明三年歿年八十一

津阪東陽歿年不詳

土井聱牙明治十三年歿年六十四

て藩祖に禮待せらる、藩の士奥田三角は東涯の高足たり、津阪東陽、文化文政の際に在りて、一方の名儒たり、猪飼敬所も亦招聘に遭ふ、近代には齋藤拙堂、文章巧妙、海內匹罕なりと稱す、土井聱牙は放曠にして能文、明治の世に及べり。凡そ此皆名通國に聞え、才一代に拔く者、但だ其地兩都の間に介するを以て、竟に獨立して一中心を形くる能はす、其の名を成す者、東江戶に於てせざれば、則ち西京攝に於てせざるを得す、是れ誠に天の其の勢を限るなり、抑も平洲、大湫が儒者の品位を積聚至極の時に保てるが若きは、其の關東文運に效する者輕しと謂ふことを得ず、是材の力、決して藐視すべからざる也。

關西實力の蘊蓄

山縣大貳明和四年歿年四十三

關東文運の外剛內乾、既已に此の如く、而して關西には則ち隱然たる實力、往々時尙の先聲たり。竹內式部、公家を糾合して、變を寶曆に企て、而して山縣大貳、王政を夢想して、禍を明和に取る、是れ其の關係甚だ明かなる者なり。折衷の學は井上金峨、片山兼山に始まると雖も、榊原篁洲が紀藩に儒官たる、訓詁は馬鄭に據り、義理は程朱を取り、良野華陰が京師に教授する、已に百家に出入し、久く「鄭註孝經」を南都東大寺に得て、考證の風を開く、折衷一派の東都に横溢するに當り、皆川淇園、開物の學、獨造深詣、確として把

持あること、汎々の徒に同じからざる者あり。龍草廬が刱せる書畫會、後年江戸に盛んに、江村北海が「日本詩選」、「五山堂詩話」の藍本たるが若き、其の弊習に屬する者も、亦概ね西之が始を爲し、東に傳へて之を完成す。高山彦九郎が謀は光格明主を奉じて、此勢を政治に實にせんと欲せる者、其の急進に過ぐるを以て、事遂に成らずと雖も、江戸中心の安からざる、關西實力の冥々日に長ずるは、以て測知するに難からずとす、而して又此際最も特出の顯象を浪華文運の勃興とす。

浪華文運の勃興

五井持軒享保六年殁年八十一

中井甃庵寶暦八年殁年六十六

巽齋即蒹葭堂殁年出前

浪華の文學、世五井持軒を以て首倡と爲す、大抵仁齋益軒等と時を同じうす、懷德書院享保に建ち、三宅石菴、中井甃庵、持軒の子蘭洲等、相踵で教授す、木門の派も入り、物氏一派も入る、其の地は即ち西南諸道の要津に當り、五方財貨の集散する所にして、其の人は氣を好み利に鋭に、專ら廢著交易の事を爲し、所謂「屠販豪俠隨レ地異」なる者、固より文物の發達に適するに非ず、而かも西國侯伯の財政、必ず命を此の地に聽き、豪商大賈、坐ながらにして貨權を操るの勢已に定まるに及んでは、篤く富力を恃で、閒を文藝に娛しむ者、間亦少からず、木巽齋の若き其の最も著はるゝ者、蓋し此の時に至りて、而し

て從前諸子辛苦栽培の種芽、勃如として業を示せる也。寛政の學政更新、其の令の發せらるゝは、則ち江戸に在り、而かも宋學再興の端は、實に浪華混沌社に發し、三博士も其の在野羽翼諸子と、皆此の地に在りて相交遊し、意氣投合、以て此の學を東都に成せる也。中井竹山、議論公武を動かして、其の丰采騰氣、宛として浪華賈人の風あり、宋學を以て旗幟を建つと雖も、自ら惺窩闇齋兩派の徒たらずと稱す、是等も亦た後世所謂實學の冑にして、三博士等と同じく、文辭崇尚の風を以て、性理空談の習に換へ、以て文辭隆盛時代、五十年間、特異の光彩を文物に賦したり。山本北山等、蘐社修辭を攻撃するに勉めたるに拘す、然るに其の結果や、人の爲めに嫁裳を作すの觀ありて、關東の文學、終に西來博士派が聖堂風に壓せられ、其の詩に於けるも、江湖社諸人、撥亂の功は、遂に之を致せり、而かも首難の功は子琴、六如を推さゞるを得ず、反正の功は、茶山、星巖に歸せざるを得ず。此の文辭時期の最高潮は、文に在て佐藤一齋の賴山陽と、詩に在て大窪天民の梁星巖と東西相匹す、其の三博士時期以前の風を承くる者、履軒の鵬齋と、其の行を異にし、其の思を精にす、亦匹なり、三博士後、經義を以て家を成す者、慊堂の敬所と、亦匹なり、

子琴即葛蠧庵也

文辭時期の後勁たる者、艮齋の拙堂と、亦匹なり、其の力量、其の著述に表見せる者、精細に之を較せば、固より軒輊なくばあらず、而して之を總ぶるに、西の蔚勃たる實力内に蘊する者、之を東に比して反て毎に重厚なる者あるが若きを見る也。

鎭西文運の發達

浪華文運の興隆と相前後して、鎭西の發達は、頗る生面を開けり、夫れ肥筑の港津が、海外交通の門戸たること、上古より已に然り、鎖國制を爲してより、瓊浦一港、猶ほ外舶の互市を許さる、而して三百年崇儒の風、勢必ず支那文物の輸入に隨て、大に時尙に影響する所なきを得ず、朱明一代、洛閩守株の學風は、先づ其の初世に至大の感化を與へ、次で嘉萬七子は、物門一派七十年流行の泉源を爲し、歸震川の時習の外に獨立せる、以て室鳩巢に比する者あり、而して山本北山等が蘐社諸子を排擊せしは、明かに袁中郞が李王を詆斥せしに倣へり、其後考證學の流行は、又明末淸初の風を承くる所多く、當時學者、爭て新渡の書を購ひ、以て其博辯を助けたり、因是が詩文を論ずる、金聖歎等の跡を襲ひ、茶山の詩、實に始めて漁洋を尸祝すと稱せられ、山陽の詩、李北地を慕尙するも、其の絕唱たる詠史樂府は尤西堂が作に啓かるゝあり、星巖一派の體、乾隆嘉慶の作家に肖する者

安東省庵　元祿十四年殁年八十
高天漪　享保七年殁年七十四
岡島冠山　享保十三年殁年五十五

あり、夫れ此の如し、何ぞかの輸入の門戸たる鎭西が、三百年文運に於て喫緊の功用を成就せるを疑はん。但だ夫れ京師江戸が方さに上進の勢に在るや、其の消化力の强盛なる、外より來る文物、盡く吸收して其の口腹を肥さゞるなければ、則ち鎭西偏鄙の地、以て之を阻滯して、自ら取て餌養すること能はず、故に安東省菴、貝原益軒、夙に鴻儒と稱し、高天漪、岡島冠山、西音に通ずるを以て、同時諸子に稱擧せらるゝも、未だ其の地に據りて上國に抗衡するに足らず、其の名を成す、概ね二都に於てせざるを得ざりき。既にして木門物門の俊秀、相踵で東來し、以て文權を把握す、蓋し大勢の此時に於て轉換せらるゝを見る、江戸中心の時期闌なるに向んとして、新舊二都、貪饞已に飽き、其の醞釀する所、散じて之を四方藩國に敷き、以て海內に滋潤し、而して有力の侯伯、封境相犬牙し、加ふるに海外文物の流潮に接することゝ、獨り支那のみならずして、其の西洋技術に於て、又最も早く通ずるの利あることゝ、鎭西諸國の若き者、其の先づ嶄然として頭角を露はすべきは自然の勢、此れ龜井父子、海內物學の後勁として、而して又鎭西學風逆流東上の陳吳たる所以、三浦梅園、帆足萬里の學、絕特の力を見し、宜園の詩、別に門派を成せる所以なり。

關西人材の富
山片蟠桃
文政四年
歿年七十
四

之を前輩の言に聞く、三百年間、其の一毫人に資る所なくして、斷々たる創見發明の說を爲せる者、富永仲基の「出定後語」、三浦梅園の「三語」、山片蟠桃の「夢の代」、三書是のみ、關東學者、頭を四子五經に埋めて、門戶の主張に一生の精力を耗す、而して關西には則ち、往々能く流俗見に超脫して、心を根柢の疑問に用ゐたる者ありと。凡そ非常の士、人に抜くの業を成す者、或は高峻超邁、萬人の從ふ能はざる所を爲し、或は時尚の嚮ふ所を導て、一代の宗匠と仰がる、人各々趣舍あり、未だ遽かに二者に擇ぶべからざる者あり、是故に物徂徠の文辭を以て、德川盛世の代表たり、談笑して天下を靡くが若き、後に之を排する者ありと雖も、又全く其の圈套に脫する能はず、寬政更新の後、八家を以て李王に換ふるも、竟に一たび盛なりし文辭嗜好を撲滅するに至らず、亦豪傑たるを失はず、而も其の利祿姓名を土芥にして、思を疑ふ所に潛め、五百歲にして其の解を知る者を待つ、醇乎たる學士の風、豈に尤も尙ぶべきにあらずや。三人者皆關西に產し、而して其の二は浪華に係る、且夫れ其の人物を以てすれば、藤樹の行、蕃山の才、仁齋の學、皆千百年間出の偉觀、東人の之に比すべき者、其れ唯だ白石、徂徠二子か。湛井太宰曰く、惺窩以降、

世の宗とする所五人、羅山博にして多可、藤樹約にして自ら責る、闇齋精にして刻剝、仁齋醇にして自尊、徂徠傲にして放縱と、羅山東に用ゐらると雖も、而かも西に產す、其の東に生ずる者一人耳、雨森芳洲曰く、中江與右衛門は賢人也、得て間然することなし、山崎嘉右衛門は丈夫と謂ふべし、伊藤源助は少時儀刑を親望す、君子なり、荻生茂卿は故人なり、博覽文章、海內比なし、木下先生は英才を教育すと、其の東に生ずる者、亦一人耳、天の關西を眷すること、何ぞ此の如きの厚きや、

文化中心の內實

夫れ元祿寶永以後、江戶の殷賑、海內に比なきを致し、文化中心も亦全く此に移りて、一國勢力の東偏、殆ど回すべからざるが若し、然るに關西の實力、冥々の際に長じ、天明寬政の際、學術の生面を開く、實に西材の力に資るに在れる者、其の源は固より浪華地氣の興隆に由れり、かの西南諸國の發達も、亦盡く其の結果を浪華に集注せざるなければ、其の財力の殷阜厚なる、乃ち從前賈俠の淵藪をして、一時儒士の冀北たらしむ、而して西南諸國の漸やく其の力を增大する所以は、則ち覇府關東に在りて、其の勢力、長鞭馬腹に及ばざるの觀あると、及び帝者の神京、海內の望を繫く者こゝに存し、而して其の僻處

月俱に崇く、學術の益明かなるに隨て、益其の光輝を發揚するとに在り、加ふるに明君踵を接し、潛德の四方に洽きこと、水の地下に行くが若く、天下の文治を希ふと、武治を喜ぶとに論なく、其の幽光の一たび煥發せんことを期せざるなし、而して關東は則ち吉宗去て後、主に暗弱多く、賢宰時に出でゝ其の祖制を改め、王室を尊で以て其の威力を保たんとするも、勢已に及ばず。水府尊王論、一時天下を動かし、幕末諸藩の學制を建つる者、必ず範を取る、蓋し當時世論、實に三百年習染の儒學と、新興の國學との衝突に惑ひ、水府の主義、此の二者を折衷して、頗る洒落あるを以て、爭て此に趨くのみ、但だ其の時已に革變の運に迫り、大に四方の瞻望を集めて、關東中心の勢力を復するに至らずして泯焉として熄みぬ。文久の安井、鹽谷、芳野等を擧用するが若きは、傾覆の機前に在り、儒學の運命、秋葉の野分の風を待つが若し、其人の學問文章、觀るべき者ありと雖も、所謂文運に於て復大關係あることを得ず、而して公卿の諸大夫、及び近畿士人の山崎氏峻峭の學風を承くる者、大鹽後素等以來、精悍の王學を攻むる者、實に公家を煽し、西南諸侯の力を用ゐて、明治の大更新を成せるを觀て、以て百年以來の傾嚮を見るべく、之を文化中心

の脫殼は東に在りて、而して濺々たる金蟬は、早く已に關西に翺翔すと謂ふ、必ずしも權衡を失ふと爲すべからざる也。

變遷の總說

夫れ慶長庚子、大勢一定してより、德川氏の世を終ふるまで、精しく之を算すれば、二百七十許年、前百餘年は文化の中心京師に在りて、理學の期たり、而して詞章は猶ほ混沌の時に屬す、古義派の興る、之が殿後たり、故に其の所謂異義も亦義理上より見を立つ、中間七八十年、中心江戶に移りて、文辭の期たり、古文辭派、前の古義に資りて、更に之を洗刷し、學問用心の根柢より異見を出し、而して斡旋して之を文辭に鍾かしむ、後八九十年、中心の形は東に存して、而して其の實は西に移る、經義の復興を名として、而して文辭の嗜好を廢せず、墨守の陋を去ると稱して、考證に、餘姚に、百家異端に汎濫す、是れは則ち江戶中心の餘風を承くる者、亦猶ほ江戶の京師に資るあるがごとし、而して其の開特絕の人物は、流行渦心に立てる時の代表者に在らずして、渦外に超脫せる遺世の徒に在り、かの創見の三人者の若き是なり。關東關西兩中心か、足參勢鼎と鎭西と以て之に陪し、而して一昂一低、儒學の盛衰を促がせる者此の如し。

附醫學

醫術の變遷

儒學は實に三百年文運の一大脊梁なり、其の政治と相表裏して、凡そ理亂休戚、因循更革の故、此と相係らざることなし、其の經絡氣脈の通ずる所を繹ねば、かの肢體筋肉の動止操作する所以に於て、明らめ知るべからざる莫し、而して儒學に襯貼して、其の關係最も緊密に、其の變遷發達の跡最も類同せる者は、醫術を然りと爲す。足利氏の季世、和氣丹波兩家の業漸やく振はざるは、猶ほ菅清二氏の學のごとく、半井瑞策が和氣氏に掉尾たるは、亦船橋秀賢が淸原氏に中興せるに類し、上池院、吉田、竹田諸氏が僧官を以て、專業の家たるは、五山僧徒の間々儒學に精しき者あるに似たり、古河三喜が明に入りて留學すること十二年、以て李杲、朱震亨の術を傳へしは、猶ほ桂庵が程朱新注を專研せしがごとく、其の一生を東偏に終りて、大に中原に行はれざりしも、亦桂庵が學、獨り薩南に遺りしと相同じ、李朱の學、補中益氣を主とし、五行運氣、臟腑配當を論ずること、宋儒性

船橋秀賢 慶長十九年卒年六十

古河三喜と桂庵

理空談の習風を承くれば、則ち其の兩ながら我が新時代文運の淵源たる、偶然に非ざる者あり。曲直瀨道三は其れ醫家の藤惺窩か、其の術を三喜に東國に得ること、猶ほ惺窩が朴庵文之の傳を薩南に得るがごとく、大に李朱を標出して、方術中興の祖たること、惺窩が宋學の祖を以て、幷せて儒學の中興たるに異ならず、其の著「啓廸集」、天正二年、朝廷特に詔するに、天下に頒ち永久に傳ふべきを以てす、亦後光明帝の惺窩集に序して、校刊せらるゝに同じ、但だ其の輩行は遙かに惺窩に長じ、其の歿年も亦慶長以前に在り、是は則ち以て氣運の促かす所、兩道の勃興、期せずして同じきを見るべく、後に古方家の興る、復古派儒學の誘引する所と爲る者と均しからざる者あり、豈に人の生に於けるの、其の急なること義よりも甚しき者あり、故に醫術の行はるゝこと、儒學よりも速かに、而して又其の術を操る者、富榮なり易ければ則ち因循して改むるを思はず、故に其の變革の運は、寒薄の儒生に後るゝを免かれざるか。

曲直瀨道三と惺窩

道三文祿三年歿年八十九

曲直瀨家の兒孫、東下して幕府の官醫と爲るは惺窩の高弟、道春の兒孫が、關東の文柄を執ると同じく、其の門下の或は東に下ること、岡本玄治、井上玄徹等亦若く、或は西に

岡本玄治正保四年歿

井上玄徹
貞享三年
歿年八十
五
山脇道作
延寶六年
歿年八十
五
野間玄琢
慶長
間人寛永
古林見宜
明曆三年
歿年七十
九
長田德本
寛永七年
歿年百十
八
講解専門
の醫

留まること、山脇道作、野間玄琢、長澤道壽、古林見宜の徒の若き、亦惺窩の徒、兩都に家を爲すと同じ。道壽が修學に科程を立つること、朱子小大學の意に倣ひ、又精を藥品に致して、土佐用の稱、土佐道壽が名と不朽なるを以て、之を南學の徒に比するは、稍牽强に嫌ありとせんか、然るに甲斐德本が自然良能說を倡へて、患者の好む所を邀へ、利導啓發して、妙技奇中、其の峻拔の術を奮て、廉潔の行を兼ね、惠澤一方の民に被るは、豈に中江藤樹の類たらざらんや、其の時皆儒に先だつは、亦かの生と義と趨舍の遲速、世俗の免かれざる所なれば也。

儒家に在て、宇都宮遯庵、毛利貞齋の徒、専ら諺解を以て淺蒙を啓く、醫家も亦之行り南川維遷云ふ、國初京師の醫家「素問」「難經」を講ずる者、饗庭東庵を嚆矢とす、其の門人味岡三伯に至て、其學愈盛に行はる、井原道閱、淺井周璞、小川朔庵、岡本一抱子、皆其の傳を受て生徒を教育す、堀元厚、朔庵に學び、亦諸子と頡頏す、此諸人皆講授を以て任と爲し、而して治療を専らにせずと、一抱は戲曲家近松門左衛門の弟、其の醫方諸書を諺解すること數十部、後進に益すること尠からず、醫學の傳播益盛んにして、而して弊も

亦隨て生ず、陰陽運氣の空理、天下を靡從せしめて、絶て發明創見の技なし、是れかの宋學性理の談、漸やく人心を厭はしめしと同じく、弊極まりて將さに變ぜんとするの候なり。

儒學の盛なるに及で、京師の儒者、仕へずして家を成す者は、講說に入らざれば、即ち往々方技を兼ねて以て口を糊す、堀杏庵が曲直瀨正純に學び、江村專齋が秦宗巴に學ぶが若きは、則ち亦仕途に在て之を兼ぬる者なり、松下西峰が古林桂庵の高足たる、村上冬嶺が世醫たるが若きは、則ち方家よりして、儒を兼ぬる也。伊藤仁齋は儒者の醫を兼ぬるを不可として「儒醫辯」を作る、然るに其の門人並河簡亮は則ち以爲らく、儒流皆恒祿あるを得ざれば、則ち醫を兼ねて業と爲すも、道に害せず、專ら儒を以て居るときは、或は衣食支へず其の志を固うする能はざらんと、其の門往々儒醫を出し、而して古方の大家と稱せらるゝ者あり、論者謂ふ、仁齋徂徠、古學を倡へしより、醫家も亦復古を主とする者あり、簡亮が古義の徒にして、其の方技仲景を宗とするを視るに、古方の興る、豈に此際よりするかと、簡亮が古方の祖とすべきと否とは、未だ遽かに斷ずべからずと雖も、當時氣候已に熟して、而して儒の古學の勃興、又外より之を熏せしは、則ち疑ふべからざる也。

儒醫
正純　文祿寛永間人
秦宗巴　慶長中人
松下西峰　元祿十六年歿年六十七
村上冬嶺　寶永二年歿年八十二

古方家の嚆矢

名護屋丹水元祿九年歿六十九

北山友松元祿中歿

名護屋丹水、北山友松、貞享元祿の際に當りて、先づ明醫の窠臼を去りて、直ちに仲景に泝る、丹水は平安の人、少にして經學を勤め、易占に精し、壯に及で醫に歸し、言ふ、吾が藥を用ふる、病因の陰陽虚實を問はず、唯だ見證に就て治を施すのみ、輓近方法細碎多岐、諸を古に考ふるに、徵信すべき少し、志ある者術を擇ぶを先と爲す、後世憑臆の論一切廢棄し、然る後醫治始めて道ふべきのみと、一世の李朱を奉ずる時に獨立して、務めて之を排斥し、撰述頗る富む、榮謗喧然、醫家に古方後世の目ある者は丹水より昉まると云ふ。門下又盛んに、芳村恂益の若き、隱居して著述を以て終り、徂徠稱して好學君子の醫と爲せり、後藤艮山は則ち贅薄きを以て、丹水の門に入るを拒まれ、發憤して遂に大名を成す、徂徠が仁齋に書を贈りて答へられざるに激するに似たり。友松は長崎娼婦の子、明僧化林獨立二人に就て醫を學び、亦仲景を規範として、諸家に參酌し、業成りて大阪に行ふ、學問浩博、行事奇偉、聲一時に震ふ。二子者の輩行は仁齋より長ずれば、此れ猶ほ未だ儒の古學に啓かれし者と謂ふことを得ず、意ふに仁齋の學、之を宋儒に比すれば、已に存養を貴て、重きを日用行事に置き、其の經濟を談ずる、桓寛の「鹽鐵論」を取りて、

後藤艮山享保十二年歿七十五

獨立寛文十二年歿七十七

山脇東洋　寶曆十二年歿年五十八
吉益東洞　安永二年歿年七十二

儒醫の古方家
香川太沖　寶曆五年歿年七十三
香月牛山　元文五年歿年八十五

山村通菴　寶曆元年歿年八十

稍功利に傾ぶけりと稱す、徂徠が跡を論じて心を問はざるの學に至ては、固より純乎たる功利の說なり、蓋し世情の趨く所、議論漸やく唯物實驗の主義に流るゝ者、當時自然の勢なりし歟、丹水が見證施治の說の若き、亦仁齋の言に冥契する者あるに似たり、山脇東洋、吉益東洞等起るに及では、即ち高く周漢を談じ、盛んに家言を張りて、古書を疏解す、是れ實に物氏の風に浸染する者也。

丹水、友松は必ずしも所謂儒醫の徒に非ず、後藤艮山、其の門人香川太沖、及び松原慶輔、香月牛山、山脇東洋等、相踵で輩出し、各古醫方を以て鳴る、而して是れ皆儒醫の徒なり。艮山は江戶の人を以て、家を京師に成し、始めて順氣說を唱へて、宋明諸醫の甘補を主とするを徒論とし、謂ふ、百病は一氣の溜滯より生ず、故に順氣を以て治療の綱要とすべしと、乃ち艾灸熊膽溫泉を用ゐて沈痾を活暢せしめんことを求む、香川太沖之を推衍して「藥選」等の著あり、溫泉治法に於て最も得る所あり、山村通庵も艮山に學て、人工泉を創意す。松原慶輔は並河簡亮の門に出で、寛厚の長者を以て、山脇、吉益諸子と傷寒論を會講するや、推されて主と爲る。丹水、艮山、慶輔、東洋、世に古方の四大家と稱す、

永富獨嘯庵明和三年歿年三十五

奥村良筑寳暦十年歿年七十五

古方隆興

東洋と仁齋

東洋と徂徠

東洋と錦里

蓋し東洋に至て、益古方の勢焔を揚げ、儒に於ては漢魏の古學、醫に於ては張長沙、勵精之を攻め、聲名藉甚、又識鑒ありて才を愛し、永富獨嘯庵、吉益東洞二子、皆其の推轂に因りて材を成し譽を馳す。吐方を越前の奥村良筑に受けて、汗下吐三方を備具し、官に請て刑屍を解剖して「臟志」を著はす、儒醫の盛、此に至りて極まり、而して古方の隆興、勢も亦定まれり。吉益東洞曰く、我が醫方、之を今の儒流に視ぶれば、東洋は其れ伊藤仁齋か、衆に先て鞭を著けたり、吾が業は敢て物徂徠に讓らず、隱として一敵國の若き者は永富氏の子か、我死せば即ち此人將さに海内の冠冕たらんとすと、蓋し東洋の前、古方の大家なきにあらず、然れども其の一世を風靡して大勢を定めし者は、洵に其の功を推す、東洞の此の言ある所以、而して又其の才物を奬成すること、木錦里の風あり、其の時は則ち錦里仁齋に後るゝこと、且さに六十年ならんとす、亦醫方の儒學に比して大に變じ難き者あるを見る也。

東洞の萬病一毒說

永富氏の子、落々たる人傑、其の東洋より少きこと二十七歲、東洞より少きこと三十一歲なるを以て、兩つながら後生畏るべきの目あり、而して中道夭折す。吉益東洞、晩に大

名を成し、則を扁鵲に取り、方を仲景に考へ、宋後溫補諸説を一掃し、以爲へらく、萬病一毒、藥も亦毒、毒を以て毒を攻め、毒去て體佳に、未だ始めより元氣を損せず、何ぞ補と云はんやと、「藥徵」「方極」の諸撰、相繼で成り、峻劑を驅使して、沈患痼疾を起し、剛厲峭直の性を以て、流俗の惑を啓き、緩劑溫補、劇毒除かず、以て死を致す者は、非命の命か、良醫に遇はずして粗工の手に斃るゝ者は非命の命か、死生命あり、醫の治する所は人事、醫にして死生を司らんと欲するは、天命を以て私行とするなりと言ひ、治驗卓絶、門下濟々、醫方の大變、此に於て全く成る、東洞毎に言ふ、天下の醫、余を以て標準と爲すと、後の古方を唱ふる者、皆東洞を祖とす。其子南涯、更に之を推衍して、氣血水の説を立て、謂ふ、人身の營養する所以の者、氣血水の循環して已まざるを以てす、病毒の生ずるは、三者停滯して常を失へばなり、故に毒は一にして、而して毒の因る所の者は三つと、父子相承けて、其の業益々廣し、其の蘐園を以て比と爲すは、誠に當れるを見る、其の立論も亦教を重して性を問はざる、儒の古學家の説に類するあり、然るに儒學に在りては、仁齋一逝して、中心東に移り、醫方に於ては、則ち東洞の起る、猶ほ關西に於てす、

吉益南涯文化十年殁年六十九

東洞の時中心未だ

ず
是は則ち二術の必ずしも相同じからざる也。

關西醫術の全盛

東洋、東洞二子、舊習を打壞して、拘忌の弊を去り、而して一時俊傑、聯鑣並び馳せ、

荻野元凱 文化三年歿年七十

明和安永の間、斯道の光輝、燦然として盡く關西に發す。荻野元凱は金澤の人、惠美三白は廣島の人、並に吐方を善し、元凱朝に仕へ、僧官に補せずして典藥大允に任ず、三白百病停食に生ずるの說を唱へ、嘗て佛書の四百四種の病、宿食を本と爲すを言ひ、又病を治するに斷食法を用ゐるを言ふを見て、引て以て證と爲せり。元凱は又刺絡を善くす、同時

鍼灸復古

平安の垣本鍼源、最も刺絡に精しく、常に謂ふ、一鍼以て萬病に應ずるに足ると、攝人菅沼周桂、善く鑱鍼を用ひ、鍼灸復古と稱す、世之を古方鍼と謂ふ。慶元の間、京人松岡意齋、金銀を以て鍼を製し、而して意齋流あり、其の門人加茂祠官駿河、幕府に仕へて駿河

產科

流あり、又明の術を傳へし吉田流あり、而る後杉山流關東に興りて管鍼を用ふ、此に至り

賀川玄悅 安永六年歿年七十八

て鍼科又一變す。產科には賀川玄悅の關西に鳴る、亦明和前後に在り「產論」の著あり、

玄廸 安永八年歿年四十一

養子玄廸「產論翼」を著はし、其の子蘭齋、久しく缺けし女醫博士の官に復す、蛭田玄仙、白河の人、亦產科に長じ、賀川氏の術未だ關東に及ばざるに當りて、大に東國に行はれし

外科

華岡隨賢天保六年歿年七十六

村井琴山文化十二年歿年八十三

中西深齋享和三年歿年八十

畑柳安文化元年歿年八十四

も、遺書傳はらず、門下の述作、又其の蘊を發するに足らず。外科には吉益、中條二流の金瘡醫已に陳して、寛文延寶の交より南蠻流漸やく盛んに、栗崎流、楢林流、カスパル流等あり、紀人華岡隨賢出でゝ、而して面目一新す、隨賢は吉益南涯の門に出でゝ、又大和見水に外治を受け、磨淬多年、内外合一、活物究理の說を樹め、藥餌鍼灸の及ばざる所、腹背刳くべく、腸胃揃ふべし、苟くも以て人を活すべくば、必ずしも成規に局促せずと爲し、麻沸の方を製し、癈痼者に値へば、先づ之を投じて昏醉せしめ、然る後手を下す、奇功偉績、世稱して華佗再出と爲せり、門人本間玄調「瘍科秘錄」を著はして、其術を東國に弘む。東洞の門には、村井琴山固く師說を守りて、鎭西古方の泰斗たり、中西深齋「傷寒」一書を攻讀すること三十年、論者其の註釋顯明、實用に期するを稱す、瀨丘長圭、腹診の法を闡發して、江戶に行はれ、東洞稱して東方の一人とす。橘南谿、天明中に在りて、元凱の門人、中達、若村二人、享和中に在りて、並びに刑屍を解覩して、東洋の遺緒を繼ぎ、御醫畑柳安、醫學院の號を賜て、最も講說に勤め、學範の著、深粹確實と稱せらる、此れ其の最も著はるゝ者なり。

醫方の變關西に終始せる所以

望月三英明和六年歿

凡そ此間遷移、醫方に於て實に前古未有の大變態たり、一時趨嚮、各科の方法、必ず實驗實効に據りて、以て議論を立て、從前性理空談の習、洗除して遺すなし、而して其の成功は、大抵關西人の手に藉て而して之を始終す、儒の古學、端を西に造して、効を東に收むる者と同じからず、豈に醫の市野に行て以て業を爲すこと、儒よりも易く、又且つ京攝の地、素より散地處士が、淸苦刻勵、以て頭地を流俗に抽でゝ、家に名け命を立つるに宜しく、而して關東の醫は、其の食祿に飽き、其の舊習に安ずるを以て、寧ろ其の位地を危うし、其の成敗を賭して、以て功名自ら奮ひ、駭異特絕の行を爲さんこと、儒よりも難き者あるか。後藤艮山、儒と爲りて伊藤仁齋に超え難く、僧と爲りて隱元に見たり難きを以て、慨然として思を醫方に潛む、是の若き者獨り艮山のみならず、乃ち關西杏林の動盪、人目を駭せし所以、故に其の大家と稱する者、山脇東洋が御醫の家を承けし外、率ね皆其の身に及で名を揚げ業を成せる者なり。但だ關東も亦獨見の士なきに非ず、内藤泉庵「醫經解惑論」を著はす、論者以て條分縷析、頗る濬發多し、未だ排割の習を免かれずと雖も、亦葛藤を芟除し、別逕を開く者なりと爲す、月望三英は吉益東洞と時を同じうし、世に稱

して天下の二名手とす、而して三英悦びず、東洞を斥して、口を開けば周漢を稱するも、特に張子和の餘流に出で、麁暴自ら用ゐ、人を刀匕に試むる者と爲す、「醫官玄稿」の著、古醫方を表章して、痛く五行運氣の妄を辨ずと雖も、所謂古方は京醫の古方に異なり、其の學博覽に得て、經方を融會し、偏執の見を立てず、深く識者に許さる、原芸庵、京人を以て江戸に移り、機警を以て鳴る、皆東醫の錚々たる者なり、然るに其の醫方復古の功、竟に東國に成らざる者は、惟だかの因習の弊之を致すに非ずや。

（原芸庵　安永四年歿）

（醫方の折衷派）

論者云ふ、享元以還、長沙の學大に闢け、戸ごとに著はし家ごとに述ぶ、漢土に讓らず、然るに吉益爲則、一切武斷、枉を矯めて直に過ぐ、其子猷務めて之を皇張す、亦蛇足を免かれずと、吉益氏の前四家に拔て、古方を大成するを以てするも、古昔の義は、往々之れ有り、是に於てか變移の候亦兆す、蓋し亦儒の折衷考證の學興るの運に應ずる有る也。平安の淺井圖南、素難倉公に原き、折するに仲景を以てし、傍に香川、吉益二氏を排す、議論頗る江戸の望月三英に類す、江戸には則ち山田圖南、博辯宏議、「傷寒論集成」の著、中西深齋「辯正名數解」と並び稱して、諸家註釋中、最も要領を得たりと爲す、論者云ふ、

（淺井圖南　天明二年歿）

（山田圖南　天明四年歿年五十七）

福井楓亭 寛政四年歿年六十八

和田泰純 享和三年歿年六十

博引旁證、從前固陋の習を一掃す、其の長博に在り、其の短も亦博を嗜むに在りと、皆天明中に歿して、當時古方の途轍を踏まざる者。既にして天明寛政の際福井楓亭、和田泰純、京師に興る、楓亭學該博を極め、術精巧を致し、歸趣古方家に異にして、一時の大醫と稱せらる、天明中江戸に召されて醫官と爲る、泰純は則ち吉益の門下に出でゝ、別に一家を成し、謂ふ、古來名工碩師、神を醫術に專らにし、各々得る所あり、其の善に法りて而して其の疑を闕かば、古人孰か我師に非ざらん、「傷寒」「金匱」は固より我道の詩書、殘缺ありと雖も、要領備さに存す、歷代方書、猶ほ鄭訓朱義のごとし、各一長あり、偏廢すべからず、取捨は已に在り、要は治を以て主と爲す、舊聞に拘泥し、一見に僻守すべからずと、是れ明らかに折衷の說を執る者なり。同時江戸の官醫多紀藍溪、桂山父子、丹波氏の遠裔を以て、先世創設せし躋壽館の規模を擴め、既にして白河侯の新政に遭逢するや、躋せて國黌と爲し諸生を教育す、亦三博士が昌平學を振興すると相應ずる也、特に其の官市の名家を延き、并せて在野儒士を聘すること、三博士の學政を制する狹隘なるに愈る者あり、明和再營の後、桂山は「素問」を講じ、山田圖南、桃井陶庵等は「傷寒論」、目黑道

多紀氏と三博士

多紀藍溪 享和元年歿年七十

桂山 文化七年歿年五十六

目黒道琢 寛政十年歿

田村元雄　安永五年歿

太田澄玄　寛政七年歿年七十五

琢等は「内經」「難經」等、服部玄廣は「靈樞」、加藤俊丈は「難經」、田村元雄、太田澄元等は本草、小阪元祐、岡田道民は經絡、井上金峩、吉田篁墩、龜田鵬齋、太田錦城等相續で儒籍を講じ、一時名流、網羅殆ど盡く、江戶醫學、是に於て蔚然として興起す。桂山の學、又精博匹無く、其の著はす所諸註、衆說を條疏し、精義を斟酌し、是より先き諸家か五行經絡を假て、臆造論駁、訂詁の義を失ふ者、桂山の書出でて、人々適從する所を知り、粗鹵杜撰の風熄む、論者謂ふ、桂山茝庭二氏、學術湛精、尤も解經の體を得、而して學者漸く正路に向へりと、茝庭は桂山の孫なり、古賀精里も亦桂山を稱して、攻方、善治、教育、三者を幷せて之を有し、兼ぬるに篤行博愛を以てす、其の徒甚衆、造就する所多しと謂ふ。醫方此に於てか再び變じ、而して中心始めて關東に歸せる者は、多紀氏經營の功たり、意ふに其成功、三博士の儒に於けるよりも善き者あるを見るに、亦其能く時運に應じて、研究の方、至當に歸し、矯直偏執を爲さゞるに由れるか。

多紀茝庭　安政四年歿年六十三

東國醫方の振興

多紀氏父子一たび東國の醫方を振ひて、而して名匠並び起こる、猶ほ西の山脇、吉益二氏に於けるがごとし、醫黌教授諸人、既に一時の選なり、其の他片倉鶴陵、曹溪の門に出

鈴木良知 文化十三年歿　岡節齋 弘化五年歿年八十五　村田誠齋 安政五年歿年六十四

でゝ、更に産科を賀川氏に學び、術一時に震ひ、名桂山に亞ぐ、鈴木良知は偏强にして學に沈潛し、岡節齋は山田圖南の門に出でゝ、文恭將軍に寵眷せらる、而して茝庭又先緒を其の間に擧ぐ。德川氏の末、洋醫方大に興るに及で、從前諸家、齊しく振はざるを致すと云ふ、蓋し京師に村田誠齋なる者あり、吉益北洲の門に出でゝ、師家氣血水の說を敷衍し、二物三氣四氣三變と爲し、河圖洛書に本て說を立つ、西洋解剖學を排して、生機活動の迹を觀て說を爲すは、廢城殘壘を觀て以て戰機を論ずるが若し、脈を診し胸腹を按し、活動の妙を察するの猶萬軍馳逐の狀を目擊するがごときに如かずと爲す、然るに其の性命の理、

西說暗合 藥劑の能否を論ずるに至りては、往々西說に暗合す、則ち亦時運の自ら至る、自然に此の如き者あるか。

三百年間、醫方三大時期の沿革、大略此の如し、而して古方の興る時、最も光華の發揚せるは、儒の古學の先輩、最も雄偉非常なると異なるなく、亦其の儒學に薰染せらるゝ所多きは、彼れ實に三百年文運の大幹にして、醫方百技、皆之が枝葉たりしを以て也。鳥山

儒醫相資 見庵、古方未だ興らざる前に在りて、經を伊藤仁齋に受け、其の徒をして兼ねて儒學を講

ぜしめ、物徂徠も亦醫の儒書を讀まざるべからざる所以の由四あるを條說す、劉石秋云ふ、後藤艮山は經義に純に、山脇東洋は疏解に博く、香川修菴は書として讀まざるなく、香川牛山は儒雅自ら喜び、吉益東洞、永富獨嘯菴は兵法經世の學に於て、尤も深鍊と稱す、刀圭を以て家を爲すと雖も、要皆古今を貫穿し、百家に出入し、瓌奇倜儻、能く言はんと欲する所を言ひ、爲さんと欲する所を爲し、以て一世に偃蹇す、人豪と謂ふべし、京人目するに儒醫を以てする、亦謂れなきに非ずと、夫れ古方家の祖、此數子者を出でざれば、即ち儒醫の功や沒すべからず。多紀茝庭云く、近日醫家著述、多く名儒の手を假て纂はる、「醫經解惑論」の太宰春臺に於ける、「產論」の皆川淇園に於ける、「產論翼」の柴野栗山に於ける、皆是なり、片倉鶴陵の著も、亦多く龜田鵬齋、太田錦城二子の手に成ると、橘南谿嘗て論じて云く、漢土の醫は文質に勝つ、皇國の醫は質文に勝つ、文質該ね備はりて漢人に愧ぢざる者は、香川太沖のみと、又云く、本邦醫籍、大抵不文、西人に示すに足らず、唯だ「產論」「學範」の二書、文章觀るに足ると、「產論」の成るや、文辭斐然、世皆稱歎す、玄悅淇園を見る毎に、未だ嘗て感泣して之を謝せずんばあらずと云ふ、山田圖南

の「集成」も亦稿未だ成らずして歿し、其の友太田錦城、其の門人と實に之を修定して世に行へり、誠に醫方の儒學と盛衰相縁り、變移相類す、由る所極めて深きを知るに足る也。

本草學は原と醫學に附庸として興る者、慶元の際、吉田宗恂、藥性に精しきを以て稱せらる、洋船獻ずる所の珊瑚枝、柏枝瑪瑙花を辨識するを以て、家康に寵遇せらる、然るに當時未だ建て一科を爲さず、諸醫撰著、亦發明の說なし、寛文延寶に及び、肥前の儒醫向井元升あり、繼て貝原益軒あり、始めて彼我を對照し、親しく物產を驗し、此學の端啓く。長崎の盧草碩、本草を講じて「藥性集要」を著はし、之を福山德順に授け、德順大阪に往て、亦徒を集めて之を講ず、加賀の稻生若水は實に德順に從て、本草の學を受けし者、性鑒別に妙に、古今を總括して「庶物類纂」一千卷を著はす、大抵益軒と時を同じうす、新井白石稱して、齡未だ五十ならずして、此の大著あり、古今罕覯なりと爲す、其の門松岡玄達、丹羽正伯、野呂元丈、又出藍の譽あり、關西の本草學、此よりして盛なり、丹羽、野呂二子、關東に用ゐられ、藥を諸州に採る、玄達の講業、獨り京師に盛んに、筵に列なる者數千人、是より後江戸の服南郭が「莊子」を講ずる外、比す可きなしと云ふ。玄達の

本草學
吉田宗恂 慶長五年歿
向井元升 延寶五年歿年六十九
稻生若水 正德五年歿年六十一
松岡玄達 延享三年歿
丹羽正伯 寶曆二年歿年五十三
野呂元丈 寶曆十年歿
小野蘭山

門、小野蘭山（文化七年歿年八十二）を出す。博識無雙、殊域產する所、一卉一介の微も、立ろに指名せざるなし、寬政中年七十餘、關東に辟されて、本草を躋壽館に講じ、又諸國採藥の命を奉ず、論者或は之を李時珍、リンナアスに嫓べて、宇內本草の三大家とす。關東には則ち阿部將翁、東奧南部の人を以て、漂泊して淸の福建に留まること十八年、本草を學で歸り、江戶に居り、享保中幕命を奉じて、藥を東北諸國に採り、發見する所多し、壽を保つこと一百四歲、寶曆中に歿す、亦一代の偉人なり。田村藍水（田村藍水即元雄）其の門に出て、幕府の醫官と爲り、人參の耕作熟製に於て、最も功績あり、其の子元長、其の門人、讃岐の平賀鳩溪、皆時に名あり、而して鳩溪の機警多能、尤も發明多く、又蘭人に學で、始めて西洋の物產學を倡ふ。宇田川榕庵（宇田川榕庵弘化三年歿年四十九）の「植學啓源」は、リンナアスの綱目に據り、此學繙譯の嚆矢とす、今の伊藤錦窠は尾人を以て榕庵に學び、其の聲海外に播す、此は則ち蘭學の支派に屬す。稻生、阿部二氏東西に祖たり、而して其の流兩つなから出んに、名家踵を接す、然るに其の專家極めて鮮なく、固より時の習風と大に相關すべきにあらざるを以て、其の變遷の際、儒學醫道の低昂顯著なるが若きあらざる也。

洋學

徳川氏の中葉以後、醫學と糾纏して而して興り、潜流浸潤、以て明治文運の源と爲りし者を洋學とす、島原教匪の亂、益海禁を嚴にせしより、蘭人の長崎に互市するを許すと雖も、象胥の吏、唯だ其の言を記するを得て、而して其の文を讀むことを得ず、國字を以て蕃語を記して、以て通譯の用に備ふるに過ぎず、故に外科の醫、洋方を傳ふる者、西、栗崎、楢林、カスパル、吉雄の諸流、頗る世に行はれ、寛文の初め、已に幕府の官醫と爲る者あるも、特に手授口傳に得て、方書を繙て講究するに非ず、又泰西星暦の學を傳ふる者、往々横文を解讀するあり、崎人林吉左衛門、其の門人小林義信と並に徒を聚めて講習し、正保中林は刑死し、義信は禁錮せらるゝも、後赦されて從遊頗る盛んに、天和三年、官暦の日蝕を錯推せるを言て而して中るあり、譯官西玄甫は明暦二年、幕命を受けて葡萄牙の天文書を解讀し、向井元升、國字之を寫して、名けて「乾坤辨說」と曰ひ、西書飜譯の嚆矢たり、延寶中召されて官醫と爲り、譯官西川忠英、泰西の暦算に通ずるを以て、享保四年、召されて江戸に至り、將軍吉宗、諮問する所あり、此の數人者、蓋し皆西籍に通ずるも、講習は國禁たるを以て、學其人と共に絶え、克く其の緒を續ぐなし。寛永七年、禁書

西川忠英享保九年歿年七十七

禁書令弛ぶ

令出で丶、殆ど百年にして、而して享保五年、始めて西書の教法に關せざる者は輸舶を許すの令あり、是れ將軍吉宗が實用を尚び、又心を星暦推步に留め、西人の其の術に精しきを聞き、其の書を得て之を譯せしめんと欲するに由る也。

青木昆陽西學を中興す

青木昆陽明和六年殁年七十二

前野良澤享和三年殁年八十一

杉田玄白文化十四年殁年八十五

青木昆陽、幕府の儒官を以て、吉宗に眷遇せられ、其の命を奉じて、始めて橫文を攻む、延享中長崎に遊び、精思研鑽、稍其の聲音語路の旨を得たり、譯官西善三郎、吉雄幸作等も亦た官允を得て西書を繙く、此を西學の中興とす。大槻玄澤曰く、和蘭學の一事、白石新井先生に草創し、昆陽青木先生に中興し、蘭化前野先生に休明し、鷧齋杉田先生に隆盛なりと、白石は橫文を修めしに非ず、特に其の絕倫の才、早く意を外邦の事情に留め、正德中、羅馬人に就て其の所說を記し、「采覽異言」「西洋紀聞」を著はす、百年鎖國の習に染みし邦人の心目、之が爲めに洞開せらる、是れ草創の功を此に歸する所以なる歟、故に西學の入るや、之を啓く者は星曆地理、而して之を張る者は醫術なり。前野良澤は初め吉方を吉益東洞に學び、齡知命に近うして、志を蘭學に興し、青木昆陽に學び、又長崎に赴きて、吉雄、楢林等の譯官に受く、杉田玄白、明和中和蘭の人身解剖書を得て、良澤等と

之を死囚に對驗して其の精確を覺り、相倶に譯業を興し、講明社を結で、有志の士を集め、拮据四年にして「解體新書」成る、蘭學興隆の機、此に於て定まれり。玄白の業を羽翼する者は、桂川甫周、中川淳庵等あり、大槻玄澤は仙臺の人、良澤玄白等に學で、更に長崎に遊學し、天明中「蘭學階梯」を著はし、始めて其の聲音の理を明にし、其の修學譯辭の法に及ぶ、文化八年、幕府飜譯局を淺草天文臺に置き、玄澤に銀を給して蘭書を和解せしむ、子玄幹、「蘭學凡」「西音發微」を著して、文典の學益明かなり、宇田川玄隨、良澤玄澤に學で、始めて西洋内科の書を著し、其の嗣孫榕庵、植物學、化學の著譯あり。文化文政の際に至て、此學益盛んに、名匠輩出す、因人稻村三伯、玄澤の門に出でゝ京師に教授す、藤林泰介、小森鶴齋、又其の門に出づ、近畿の洋學は則ち此時よりして開く也。天保弘化の際、京師に新宮凉庭、小石元瑞あり、既にして船曳卓堂、女科の譯あり、廣瀨元恭、物理、生理の學を興し、浪華の緒方洪庵、病理の書を譯す、然るに江戸に在ては、其の學を爲す者、杉田玄白等よりして、已に醫術の外に逸して、竊かに資て經世の談に渉る者あり、「西域物語」の著者本多利明、時務を論じて破天荒の言あり、青地林宗、「氣海觀瀾」

桂川甫周 文化六年歿 年五十九

大槻玄澤 文化十年歿 年七十一

大槻玄幹 天保八年歿 年五十三

宇田川玄隨 寛政九年歿 年四十三

藤林泰介 天保七年歿 年五十六

小森鶴齋 天保十四年歿 年六十二

新宮凉庭 嘉永七年歿 年六十八

小石元瑞 嘉永二年

殁年六十三　緒方洪庵文久三年殁年五十四　箕作阮甫文久三年殁年六十五　省吾文政三年殁年二十六　高野長英嘉永三年殁年四十七　渡邊華山天保十二年殁年四十九　杉田成卿安政六年殁年四十三

の著ありて、又幕命を奉じて、異域の地理事情を譯述し、箕作阮甫省吾父子、歴史地理に精通し、高野長英、渡邊華山等は、其の所學に因て時事を諷し、以て禍殃を取れり、杉田成卿は海上砲術の書を譯し、又獨逸の書に渉る、弘化嘉永の後、邊事大いに滋く、海外諸國の學益開けて、獨り蘭學に止まらず、而して江戸の文物、鬱然として海内菁華の處たり、以て今日に至る。夫れ洋學一塗、獨り儒學、醫術と軌を同じうせず、專ら東に盛んにして而して西は則ち寥々たる者、豈に其の興るや、時已に文化中心、東移の後に在り、而して其の學又た物質に偏して、理義に渉らず、亦東の宜しき所にして、西の便ならざる所たるを以てするか。要するに、其の勢慶元以前の儒學に類し、白石の草創、或は清原賴業に比すべく、福澤氏の業、惺窩氏に似ることとなしとせず、以て明治文運の淵源と爲すべくして、以て德川氏の盛を鳴らす者と爲すべからざる也。

國學

國學儒學の相緣相斥

荷田春滿元文元年歿年六十八

賀茂眞淵明和六年歿年七十三

春滿と仁齋

國學が三百年文學の偉觀たること、以て儒學に雁行すべし、而して其の發達の際儒學と或は相緣り、或は相斥く、前後轉捩の大關鍵は、則ち荷田春滿、賀茂眞淵に在り、猶ほ儒の伊物二子あるがごとき也、然るに春滿の歿する、仁齋に後るゝこと三十年、眞淵の歿、徂徠に後るゝこと殆ど五十年、亦以て儒學の德川氏文學の大幹たり、諸他の學藝、或は爲に誘はれ、或は爲に激されて而して起るの勢を見るべし。

春滿が洛南稻荷山の祠官に崛起せるは、仁齋が堀河の市人に振ふと、勢相同じ、但だ仁齋の學、猶ほ宋儒の臭味を脫せず、纔かに徂徠に至りて、乃ち一切理談を廢し、而して經義詞章、合して一と爲る、春滿國學の復古を以て任じ、國史私記、古文古歌、兼綜して該通せざるなく、史の「神代卷」「萬葉集」に於て、實に卓として一家を成せり、詠歌は其の主とする所に非ず、又中世以後、淫靡風を成せるを憤り、一生戀歌を詠ぜざるが若きは、

亦徂徠が通達圓滑を愛して、大に文風を扇げると同じからずと雖も、其の從前神道者流、詠歌之家に滿たずして、兩つながら之を洗刷せんと欲せるは、仁齋と亦異なるなり、是れ實に儒の古學興るの後に出で、焉に觀感する所あるに由れる歟、其意見粗ぼ其の國學校の創立を幕府に建議するの書中に見ゆ、曰く、

今也洙泗之學、隨處而起、瞿曇之教、逐日而盛、家講仁義、步卒厮養解古詩、戸事誦經、閭童壺女識談空、民業一改、我道漸衰、紀土州嘗嘆詞、田園蕪荒、寶庫傾盡、善相公深痛矣、臣竊以、是亦是以見太平日久之象、唯有爲可痛哭長太息者、在我神皇之教、陵夷一年甚於一年、國家之學、廢墜存十一於千百、格律之書泯滅、復古之學誰云問、詠詩之道敗闕、大雅之風何能奮、今之談神道者、是皆陰陽五行家之說、世之講詠詩者、大率圓頓四教儀之解、非唐宋諸儒之糟粕、則胎金兩部之餘瀝、非鑿空鑽穴之妄說、則無證不稽之私言、曰秘曰訣、古賢之眞傳何有、或蘊或奧、今人之僞造是多、臣自少、無寢無食、以排擊異端爲念、以學以思、不興復古道無止、方今設非振臂張膽辨白是非、則後必至爰

耳塞心混向邪正、欲退則支已漂已晦、欲進則老且病且憊、猶豫無所決、狼狽失所爲、伏此請望、或京師伏陽之中、或東山西郊之間、幸賜一頃之閑地、斯開皇國之學校、然則臣自少所蓄、秘藉奥牒不少、至老所訂、古記實錄亦多、書皆藏于此、備他日之考索、僻邑之士爲絶難及者、或有寒鄕之客有志而未果者開多借之讀之、才通一書百王之澆醨此知、洞覽千古萬民塗炭可拯、幸有命世之才、則盡敬上之道不委于地、若出琢玉之器、則柿本氏之教再奮於邦、六國史明、則豈翅官家化民之小補乎、三代格起、則仰亦國祚悠久之大益哉、萬葉集者國風純粹、學焉則無面墻之譏、古今集者謌詠精選、不知則有無言之誚、夫本邦設施學校、權輿于近江朝廷、主張文道、濫觴於嵯峨天皇、菅江家有分彰院、源藤橘和繼起、太宰府有學業院、足利金澤延及、然所藏三史九經、陳俎豆於雍宮、其所講四道六藝、薦蘋蘩於孔廟、悲哉先儒之無識、無一及皇國之學、痛矣後學之鹵莽、誰能歎古道之潰、是故異教如彼盛矣、街談巷議無所不至、吾道如此衰矣、邪説暴行乘虛入、憐臣愚衷、創業於國學、當世倒行、垂統

於萬世、首創難成功、非經國大業邪、繼續易用力、眞不朽盛事哉、臣之至愚何之知、所不敢自讓者語釋也、國學之多紕繆、後世猶有知之者、典籍猶存、古語之少解釋、振古不聞通之者、文獻不足、國學之不講、實六百年矣、古語之有釋、僅三四人耳、其爲巨擘、新奇是競、極無超乘、骨髓何望、古語不通、則古義不明焉、古義不明、則古學不復焉、先王之風拂迹、前賢之意近荒、一由不講語學、是所以臣終身精力用盡古語也、

以て其の時と其の志を立つる所由とを知る可し、其の儒學に於ける、必ずしも之を排斥せずと雖も、其の父仇を殺せば、其の子劫を行ふ、漸已に此に兆す、眞淵官長以下、竟に儒者と相詆訾するに至りしを怪むなき也。春滿の此文を讀むに、其の文辭世儒も或は逮ばず、下眞淵の若き、亦少時修辭の學を爲し、頗る蘐派の詩を善くせり、然るに其の門人に至りては、村田春海が自ら儒者を以て任じ、而して國文に妙なりしを除く外、儒氏の言に精通する者、寥々日に寡し。徳川初世の儒者、概ね兼ねて國文に通ぜざるなく、往々歌集を遺す者あり、蘐氏出でゝ而して其の門人南郭の若き、猶ほ詠歌ありと雖も、春臺輩より已に

村田春海　文化八年歿　年六十六

斯道は以て遂に堂上に勝ち難しとして全く之を廢し、然る後儒者の國文を善くする者、極めて希なるを致す、是に於て二道の背馳、復た合すべからず。春滿の若きは、固より當時吉川、垂加以下の神道、和漢を雜糅し、二條冷泉家の歌學、形迹に拘束せらるゝを慨して而して起ると雖も、未だ此を以て門戸を張り、以て異教の徒と相抵排するに意あらざりしに似たり、其の資性慷慨にして、而かも巉刻嶄絕の行を爲さず、自から京洛人の氣象あり、歿するに臨で其の著書稿本を焚き、未成の言を以て後生を誤らざらんことを欲す、眞に深人なる哉。其の嗣子孫、在滿、御風、蒼生子の若き、關東に家すと雖も、自づから父祖の風を承け、出處苟くもせず、廉介不羈、時俗に染まず、亦堀河氏と相類する者あり、而して在滿の國歌八論、官家の拘束を非り、古今傳授の妄僞を辯じ、定家卿を退けて、而して後京極攝政良經を進め、議論痛快、歌道の振作に於て、實に撥亂の功ある者、其の箕裘の業を克くする、殆んど亦紹述氏の下にあらざる也。

在滿寶曆元年歿四十六年
御風天明四年歿五十七年
民子天明六年歿六十五年

春滿以前の和歌

春滿が終身其の精力を用盡し、以て敢て自ら讓らずと爲せる所の者は、語釋に在りき。

是より先、難波の下河邊長流、圓珠庵契沖、相與に流俗の間に振ひ、沿習の陋を排し、拘

下河邊長流、貞享三年歿、年六十三
契沖、元祿十四年歿、年六十二
宗祇、文龜二年歿、年八十二
松永貞德、承應二年歿、年八十三
中院通村、承應二年薨
通茂、寶永七年薨、年八十
通躬、元文四年薨、年七十二
烏丸光廣、寛永十五年薨、年六十四

忌の弊を去り、古言を考證して、歌調の汚れるを慨し、語格の誤を正し、之を上世の風に回さんと欲す、延寶天和の際、水府義公、修史の擧ありて、心方さに國學に嚮ふ、亦「釋萬葉集」の著あり、因て遙かに二人を鼓舞して、其の業を大成す、是に於て契沖「萬葉代匠記」の作あり、義公又其臣安藤年山をして就て學ばしむ、今井似閑、海北若沖、野田忠肅等は、二氏の傳を受けて、京攝の間に行はる。蓋し古今傳授の義、東常緣が宗祇に授くるに起り、數傳して細川幽齋に至り、之を亂離の間に維持す、松永貞德、幽齋の傳を受けて德川氏の初に鳴る、堂上公卿の和歌を善くする者、世亦其人を絕たず、而して靈元の帝運、又麗藻の煥發を催す、「鷗巢」「水日」「桃蘂」の三御集、帝者の斯道に勉め給ふこと洵に著きを見るべく、而して後水尾帝、憤世の詠、最も人心を興感す、冷泉飛鳥井二氏は專業の家と稱し、又中院通村、通茂、通躬、烏丸光廣、光榮、武者小路實陰諸卿あり、或は以て惺窩氏の勃興、淸家の中興に況ふべし。論者云ふ、慶元以後、堂上の歌盛にして、泰斗に乏しからず、此等諸公、詞林に冠冕たり、天下之に鼓動せられて、二條家の風復た興る、而して其の下流、詞の禁忌に束縛せられ、又三玉集等を模範として、風調日に降る、長閑

武者小路實陰元文三年薨年七十八
木下長嘯慶安二年歿年八十一
佐川田壺齋寛永二十年歿年六十五
加藤盤齋延寶二年歿年五十四
望月長好天和元年歿年六十三
平間長雅寶永七年歿年七十五
有賀長伯元文二年歿年七十七
戸田茂睡寶永三年

しな、あかれすよの詞、人を嘔吐せしむと、蓋し草庵の嚼蠟、草根の人工、以て無二の寶典とし、陳言を點化して、巧を造語の末に求む、其の此に至る者は亦宜なり。木下長嘯、佐川田壺齋の武門に出でて、隱居吟詠するは、石川丈山が詩に隱るゝに似たり。加藤盤齋、望月長好等、貞德の門に出で、寛文延寶の間に行はれ、長好の門、平間長雅あり、大抵契沖と時を同うし、河瀨菅雄も亦此時に當れり、有賀長伯は長雅に學て、名所の考證に精しく、門下極めて廣く、川井立牧等、以て翹楚と爲す、春滿の時に當る、是れ皆復古以前の名家にして、舊習に沿て敢て革めざる者なり。貞德の時、林道春其の博通の餘を以て、歌學に涉獵し、往々專家を凌いで、秘說を辯駁すと雖も、業とする所此に在らざるを以て、新たに成說を立つることを爲さず、故に近世古學の祖、實に長流契沖二氏を推して倡首と爲す、春滿乃ち其の後を承けて、大に後學を啓ける也。

江戸の隱家茂睡が二條冷泉二家の禁制、極めて理なきを論じ、吟詠情を攄べて、敢て拘束を受けざりしは、亦二氏と時を同じうす、其の識見固より二氏の下に出でず、而かも仕を致して隱居し、其學傳ふる者なし、豈に山鹿素行の類か。北村季吟が貞德の門人を以て

歿年七十八

茂睡と素行

北村季吟　寛永二年歿年八十二

近衛家熙　元文元年甍年七十

春滿以前の神道

吉田兼見　慶長十五年甍年七十六

兼治　元和二年卒年五十二

兼從　萬治三年甍年七十三

吉川惟足　元祿七年歿年七十九

出藍の譽あり、元祿の初年、關東に辟されて父子祿を受けしは、木順庵が東下と相前後す、而かも其の學風は則ち寧ろ弘文院の迹に似たり、故に木氏が宋學古學の過渡たり、又林家に抗衡して、盛んに英才を育し、遂に能く徠門の徒と文華昌明の時に相馳逐するを致せるは、則ち之れ無し。春滿同時、近衛家熙、野宮定俊の若き、堂上の名家を以て、亦古今傳授を排して受けず、斯に亦東西氣運の早晩異あるを見る。

其の神道に在りては、神祇四姓、卜部氏獨り變故に遭遇して、漸やく利權を占む、兼倶延德中に在りて、説を足利義熙に進め、古記神異に託して、其の族系を文り、其の家業を弘め、兼見、梵舜、兼治等兄弟父子、德川創業の際に在りて、頗る寵眷を受け、遂に神祇長上と稱するに至る、唯一神道の旨、術は眞言の事相を踏襲し、密乘の教意を附會して、竟に兩部習合の實を脱せず。兼治の子兼從、豐國の社務に補せられて、家を萩原と稱す、豐國社毀たるゝに及び、後水尾帝の旨を以て僅かに配流を免かれて、吉田に蟄居す、吉川惟足、乃ち其の隱栖に就て神道を學び、盡く其の秘義を傳ふ。或は云ふ、惟足は江戸の賈人、產を破りて鎌倉に隱れ、素より詠歌を好で、竟に神道を學ぶに志あり、慶安萬治の際

京に至りて兼從に從學し、竊かに其の家の書を盜み、吉田氏の訴ふる所となりて、殆ど將さに罪を得んとす、會々人ありて營救し、幸に免るゝを得たりと。既に東歸して、寛文の初、會津正之侯に親信せられ、堀田正俊、稻葉正則兩侯も亦其の説を喜び、業漸やく世に行はる、兼從の人物、固より惺窩に比すべきにあらざるも、其の勢或は相類す、惟足は則ち以て羅山に比す、可ならんか。

垂加時代の神道

山崎垂加の神道に於けるは則ち山崎闇齋の儒學に於ける也、其の地位既に類し、其の人亦同一人たり、寛文の末、闇齋の會津侯に仕ふるや、惟足が門人服部春安、其太極説を破して、國常立尊の義を立つ、闇齋因て終に惟足に就て神道を學ぶ、又伊勢流の神道を出口延佳に受け、中臣秡の深義を大中臣精長に受く。

出口延佳 元祿三年卒

延佳は外宮の祠官、易理に通じ、其の神道を説くや輙ち陰陽五行を談じ、又「五部書」に據りて説を立つ、然れども其の學術該博、吉田氏の鹵莽なるが若くならず、衆説を薈萃し、間發明あり、蓋し度會氏の學、元應中家行「類聚神祇本源」を著はし、北畠准后が「元元集」、「神皇正統紀」の原づく所となりしより、中ごろ微にして、乃ち延佳に至りて更に述作あり、神代卷を説けば所謂神宮傳説を

宗とし、准后の「東家秘傳」、忌部正通の「口訣」、一條禪閣の「纂疏」より「私記」卜部懷賢の「紀釋」等に溯り、中臣祓を釋すれば卜部家習合俗說の附會を哂ふ、其の學は則ち惟足に過ぐ、而して其の俗に容れらるゝの才、或は及ばざる也。垂加二家を折衷すと雖も、蓋し亦延佳に得る所多し、豈に其の儒に於ける、南學を受くると類せるに非ずや、天人唯一、道の要土金の敎に在るの說を立て、謂ふ、土と敬と倭訓相通ずと、以て居敬究理の說に合し、神聖の世に出る、東西處を異にするも、其旨妙契すと爲す、深く猿田彥神を欽し、云く、道は大日孁貴の道にして、敎は猿田彥の敎たりと、五部書を信じて垂加の號も亦實基本紀の神垂冥加の語に取る、留守友信以て近世神道の正統を得たるは山崎垂加一人たり、高才明智、博學實德にして、卜部、忌部の傳を兼綜し、諸社家に存する所を蒐めて、擇で其の正に就き、三敎習合の雜說を棄て集めて大成し、上神人の德光を掲彰し、後代に正統の傳を垂ると爲す。正親町公通、其傳を得、故に山崎氏神道の嫡宗を正親町流と稱す、又下御靈社司板垣信直、攝人高田未白、山本源藏等あり、就中玉木葦齋等、時の冠冕と稱す、鴨祐之は後に別に一家を成せり、關東に在ても亦澁川春海に傳へ、以て跡部光海、伴部安

玉木葦齋元文元年歿
鴨祐之享保八年歿

澁川春海　正德五年歿年七十七　跡部光海　享保十四年歿七十一　伴部安宗　享保初年歿年六十餘　岡田盤齋　延享元年歿年七十八　出口延經　正德四年卒年八十一　龍凞近　元祿六年歿年七十八　青木永弘　享保元年卒

宗等より岡田盤齋に遞及して、世に鉅匠と稱せらる、此等は大抵春滿と時を同じうす。松下見林も亦度會氏より伊勢流の傳を受け、延佳の子延經、又家學を傳ふ、本源和平の神道と稱する者、林中助の若きあり、其他神佛習合の說を主とする者には、山田の祠官龍凞近の若きあり、延寶天和の間に著はれ、唯一家には長崎諏訪の祠官青木永弘の若きあり、享保中に名あり、要するに皆所謂陰陽五行、胎金兩部の圈套を脫せず、而して勢の氾濫する所は、則ち天和の初「舊事大成經」の大僞作を激成す。蓋し林羅山、既に神國說を立てゝ神道の佛法に殽亂せらるゝを厭ひ兩部家の義を斥く、垂加は唯一家に學び、又「五部書」を取る、故に自ら其の流れて佛意に入るを覺らず、而して其の人素より浮屠を排す、是れ神道の儒佛二氏に牽かるゝ、竟に一場の大爭賽、大混亂なきを得ず、天和に於ける潮音が「大成經」は此の時會に投じて而して作れる者、文運の俄かに興る、挾書律の除ける漢代と類する者ありて、蠹殘焚餘、眞贋雜出す、寬文より以て元祿に及ぶ、實に僞書時期と稱すべし、獨り「大成經」のみならざる也、特に其の問題重大にして而して其の詐力一代を掩ふに足らず、轉瞬の頃便ち敗れたりと雖も、以て其の時の趨く所を見るに足る、吉川惟

足も亦此計に與れり。春滿が慨然として其の紊亂を匡正せんと欲せる所以、此に在らずや。

春滿以前の史學

史學に至りては、材の豐富、學の博洽、力を得る所十の八九、獨り天才神識を以て之を濟すべきに非ず、故に林家の「本朝通鑑」、水府の「大日本史」、固より寒薄なる關西の企及すべからざる所たり、乃ち關東に在ても、三長兼ね備ふる源白石の若きすら、「古史通」「讀史餘論」以下の著、特に其の創見の卓異を見すのみ、かの林當二氏纂輯の業に、則ち之が爲めに頭地を放出せざる能はず、況んや其餘をや、且つ西山公の材能を網羅する、關西の史才、概ね採て藥籠に收め、栗山三宅等の若き、特に其の才華を西に揚ぐれば、則ち亦羅致を免かれず、契沖、長流、詞藝の人も、亦皆甞て徵招に遭ひ、其の超世違俗の姿、僅かに曳尾の操を全うすることを得たり。但だ山崎氏の徒、往々亦國典精博を以て關西に鳴る者あり、鴨祐之が「日本逸史」「大八洲記」ある、谷秦山が「保建大記打聞」ある、其の志は則ち大に稱すべき者あり、然るに祐之が正親町公通の歌人の薦を屑とせず、秦山が神道を固執して其の同門三宅尚齋とすら合せざる、實に其の東用たらざるの素を見る。儒

黒川道祐　元祿二年歿

醫の徒、松下見林、黒川道祐、並に國典に通じ、見林の博識、最も及び難しと稱す、「異

春滿以前の有職學
野宮定基 正德元年歿年四十三
高橋宗恒 寶永三年歿年六十七
壺井鶴翁 享保二十年歿年七十九

稱日本傳」比較史學の端を啓き、識者以て國學者必讀の書、著者が獲難きの績學を知るに足るべき者と爲す、「前王廟陵記」「國朝佳節錄」、亦廢典の興復に資なくばあらず、或は契冲の古言を解釋せるを稱して、見林の學識を遺すに不平なり、其の後世に重ぜらるゝ此の如し、意ふに其の人と學と質實樸茂、才を詞藝に騖せず、故に當時に烜赫たらざる耳。有職の學は、堂上家より出づ、故に殆ど關西の專らにする所、白石が典故に心醉するや、其の教を受くる所は、則ち野宮定基なり、定基の門、高橋宗恒、元祿寶永の際に名あり、享保中梅園惟朝が「國史神祇集」の編を續ける樋口宗武あり、歌は契冲を慕ひ、尤も有職に精しと稱す、壺井鶴翁、考證頗る精しく、著述最も富み、藹然として時の大家たり、春滿と時を同じうせり。春滿の國史を究めんと欲するは、亦かの林家常齋と精博を競ふに非ず、將に以て皇道の由る所を明らかにし、教學を陵遲の餘に挽かんとする也。格律を起さんと欲するは、亦所謂有職家と撰を同じうせず、將さに典禮の殘闕を補て、之を當世に施さんとする也、故に眞淵以下、春滿の學を傳ふる者に、史學を專業とする者あらず、春滿の令式に志あるや、故實興復の運に會して、朝廷の大儀に補ふ所ありき。

關西中心の時

之を要するに春滿以前、國學の英華全く關西に發し、二條冷泉の秘、有職故實の儀、之を堂上に占有して、地下の輩は、輦轂の下に在るも與かり聞くことを得ず、徂徠が奈良の餘を以て海内を欺くと謂ひ、春臺が歌道の堂上に企及すべからざるを嘆ぜる所以。獨り神道のみ、吉川、山崎氏の傳、東も亦之を有すと雖も、習合、伊勢諸派の並び出でたるは、亦た竟に西に及ばず、春滿又爬羅剔抉、垢を去り光を彰し、教政を興起せんと欲し、建學の議、幕府に容れられて、既に地を洛東に卜し、而して其の發するに會して果さず、眞淵田安家に仕へて、而して氣運學風、斯に一變せり。

眞淵と徂徠

賀茂眞淵は國學の物徂徠なり、其の春滿に伏見に學ぶは、徂徠が初年仁齋に傾注せるが若く、其の家を江戸に成して、古學を唱道するは、徂徠が古文辭を以て旗幟を建つるに同じ、並に皆一代を風靡して、門生天下に布き、十年ならずして四方風を採り、面目一新す。眞淵の學は、長を「萬葉」に見、契沖春滿の說に因りて更に之を振明す、蓋し古史を明らめんと欲せば、古言に通ぜざるべからず、古言の精「萬葉」に萃まる、故に先づ「萬葉」を研究し、以て「古事記」「日本紀」以下に及び、更に之を上世の器服に參し、音調の古風

眞淵の詠歌

を盡して、溯りて神世の情を探り、以て所謂神皇の道を知らんと欲す、是れ其の學を爲すの序とする所。意ふに契冲の草創、專ら舊規の破壞に在りて、未だ新たに適從すべき所を定めず、又志歌體の洗新に存して、以て古史研究の門と爲すが若きは、或は未だ思ひ及ばず、故に動もすれば緜密に過ぎ、瑣屑に流るゝの譏あり、其の詠歌の若きも、長流「漫吟集」に序して、滿誓の舊柯を奮て、八雲の茂林に入り、縱橫調を成して昔人の道はざる所を道ひ、物名俳諧毫髮遺憾なく、無常歌に至りては、詞采の富麗、我邦未有の長篇たり、其れ十年經思の兩都賦の亞かといひ、契冲も亦「晩花集」に序して、若狹の少將を棄て、隱遁に生を終へし長嘯子、獨り其器大なること敵なかりしも、此を以て翁に比せば、拔山の力或は愈らん、弓を挽き劍を揮ふの技、翁實に焉より長ぜんと、互に相推稱すと雖も、議者仍或は並びに「玉葉」を以て帳秘として、未だ中古に溯ることを爲さずと謂ふ、春滿は固より語釋に由りて古道に進むの義を建て、高簡爽朗にして務めて大體を重ず、而して其の自ら歌詠に發する所は、則ち未だ其の倡ふる所に副ひ、大に世聽を聳かす者あらず、眞淵出で、絕倫の天才を以て、古言を運用すること、日夕常用の語の若く、縱橫揮霍、絕

て窘蹙の態を見ず、詞意倶に高古にして、直ちに人丸赤人の壘を摩す、蓋し眼千載を曠しうし、南都以還、僅かに鎌倉府に於て神契するあるのみ、徂徠を以て之に比するに、其の前に契沖、春滿ありて、古言の勝廣たるは、徂徠が前に殆ど古人なきに及ばざるが若きも、其自ら作る所に至りては、矯健磊落、天馬空に行くの風骨、陵上漣瀨、銀河天より落るの聲調、心手相應じて、馳騁蹶かず、徂徠が習氣未だ除かず、而して英雄人を欺くの槪に非ず、抑も亦國語の倣し易き、異邦鴃舌の音と比すべからざる者あるか。

徂徠固より仁齋を壓するに意あり、故に事々にして其の爲す所に反し、務めて其の轍を襲はず、眞淵は則ち春滿を師奉すと雖も、春滿既に學問は天下の大路、斷言して自ら是とすべからず、學者亦必ずしも師教に拘泥すべからざるを道ふ、古學の徒、師弟の義を重じて、而して各發明あり、敢て墨守せず、永く一種の美風を傳ふる者は、蓋し此に淵源す。

春滿眞淵學義の異

是を以て眞淵の春滿と、學問趨嚮、頗る亦逕庭なきを得ず、春滿は皇朝の書を讀まん者先づ西籍に涉りて、事理を明辨し、南都の辭藻を釆りて、神世の蕪道を開き、雄心を作興して、往蹤を尙論せば、古道復せざるを患へずと謂ふ。眞淵に至りては、古道を主張して、

紀記二書の行藏

多田義俊
寛延三年
歿年五十

本居宣長
享和元年
歿年七十二

儒學を論駁し、人作に出でゝ、强て天地の心を限隘せる者と爲し、禪讓放伐の習を罵斥し、而して邦俗往昔婚娶犯倫なるを回護す、其の言詭激に過ぎて、中道に醇ならざる者あり、黎民の愚は君威を彰はす所以と曰ひ、間燕穢の地を存して、大道乃ち成ると曰ひ、夷狄禽獸の道、必ずしも貶すべからず、生類蠢々、人其の一に居る、何ぞ貴賤靈惷を其間に存せんと曰ふ、枯燥なる科學懷疑の見に類する者あり、宣長以後、益儒者と相攻めたり、殆ど亦仁齋が猶宋儒理談に出入し、徂徠與るに及で、乃ち道即文章の義を立てゝ、性理の徒と極力相抵排するに似る也。

卜部氏の徒、「舊事紀」「古事記」「日本書紀」を稱して三部の本書と爲す。「舊事紀」は度會延佳帶つて之を校讎し、源白石は其の重複錯亂多きを以て、未成の書たらんことを疑ふ、而して其の僞書たるを斷ぜし者は京師の多田義俊なり、義俊は壺井鶴翁の門に出で、其の人疎放不羈にして、而して才識警敏、古書を攷謬し、眞僞を抉摘する、往々人の意表に出づ、眞淵と時を同じうす。眞淵は則ち謂へらく、「舊事紀」は僞書と曰ふと雖も猶ほ八百年前の作に係る、間古言の參稽すべきありと、本居宣長も亦其の大同以後に成り、紀

記二書を綴輯して時に「古語拾遺」及び今は已に亡せる古書に取る者と爲す。「書紀」に至りては、舍人親王の撰旣に其の謹を極め、國史の首に居て後世の模範たれば、學者崇奉、唯だ及ばざらんことを恐れ、歷世講說、其の奧旨を發明するを以て務と爲さゞるなし、其の神代卷の若き、辭を措き文を成す、儒釋の書に出入して、傅會するに理談を以てし易きを以て、神道者流、最も之を崇重し、兩部、唯一、伊勢、垂加の徒、皆之を講硏せり、浪華の醫、白井宗因、寬文中に在りて「神社啓蒙」を著はす、義俊が以て羅山の「神社考」に愈れりとする所なり、宗因の言に、「神代卷」を取るべきは二三策のみと云ふ、然るに荷滿は猶ほ盡敬王の道を稱說すれば、未だ之を批斥するに及ばず、眞淵古道を明らめんと欲せば、先づ漢意を滌刷せざるべからざるを主張するに及で、乃ち稍「書紀」を疎じて而して「古事記」を右にす、嘗て「古事記」を釋するに志あり、齡晚景に薄りて果さず、本居宣長之を繼承して遂に「古事記傳」の著、古言に由りて古史を解し、古俗に徵して古道を明らむるの學を大成す、宣長公然「書紀」の漢習の病を斥し、敢て舍人親王の剪裁を議す、其徒益此說を譸張し而して「古事記」遂に「日本紀」に代りて古學の經典たり。然るに宣

谷川士清 安永五年歿年七十

天野信景 享保十八年歿年七十三

眞野時縄 元祿十六年歿 卜部兼魚 貞享三年卒

吉見風水 明和中歿年八十餘

長の同國に谷川士清あり、垂加派の神道を玉木葦齋に受けて後に別に一家を成し、「日本紀通證」の著、儒佛の書に渉獵して辭句の本づく所を擧げ、博く先哲の說を彙集し、參互檢討、註するに漢文を以てす、又尾人河村秀根あり、天野信景の門に出でゝ其の兄秀頴と並に博洽を以て知られ、「書紀集解」の著、以て士清の通證と並駕すべし、此等は皆眞淵と時を同じうし、同じく考證を主として而して古學の徒と趨舍を異にする者。其の紀平洲、南宮大湫等と大抵相前後するを觀るに、當時尾參勢濃の野、文運の鬱勃たる以て見るべく、其の地内外兩宮の存する所にして、度會氏父子以下、國學の來龍、固より儒學より深遠に、尾張津島の祠官眞野時縄、菅原直勝、卜部兼魚、東愚、度會延經等に學で「古今神學類聚鈔」百卷を著はし、松下見林の刪正を求めしは、元祿中に在り、又天野信景の若きあり、春滿と時を同じうして博洽の學を成し、以て後進を啓けば、其の成就せる文物に於て、亦國學の徒、大に儒者に過ぐるあり、且つ其の家を爲すも、必ずしも東西兩都に出づるを須ゐずして、其の上に就て業を成すことを得たるは、異とするに足らざる耳。尾張東照宮の祠官吉見風水が、從前神道者流が據りて金科玉條とせる「五部書」の僞作たるを辯じ、宗

廟社稷の別を明にして、外宮を社稷に貶し、度會延經が「辨卜抄」を増益して吉田氏の僭妄を發せしも亦此際に在り、風水も亦垂加の門流に出で丶別に一家を成せる者、思ふに士清、風水、並に師風を變じて力を考證に專らにす、豈に其の時之を致すか、抑々其の地之を然らしむる也、荒木田經雅が「神宮儀式帳解」を著せる、宣長と同時の人に係るが若き、亦其の餘波と謂ふべし、而して其の上風の精を鍾めて精博の考證に循ひ、更に獨創の識見を以て之を運し、國學に於て無前の偉動を策せし者は、則ち松阪の醫生本居春庵たり。

荒木田經雅文化二年歿年六十二

宣長の古道學

　春庵は則ち宣長、所謂鈴屋大人なる者、始め京師に出で丶醫術と儒籍とを攻め、既にして契沖、眞淵の書を讀で、志古學に嚮ふ、一夕眞淵を松阪の旅舍に見て遂に籍を其の門に委し、爾後贈答質疑、矻々倦まず、而して其の新に自ら發明する所は、則ち更に精義を極め、古學一道、金聲して之を玉振し、「古事記傳」の大著は實に其の本領の存する所、蓋し半生の心血を注ぎ盡せる者、其の書を讀めば上世の言語風俗、器服禮文、身處して而して目睹するが若し、後之を指摘する者あるも、特に其の枝葉末節に過ぎず、夫の大綱の若きは一定して動かすべからず。其の古道を主張するや、之を産靈神の産靈に歸し、諾冊二

服部中庸文政七年歿年六十九

神之を肇めて、天照大神承けて而して之を保つ所と爲し、天皇の大御心を心として其の詔命を敬奉し、其の惠澤に賴りて各祖神を齋祀し、克く其の分を盡して、歡樂以て世を終るに在りと謂ふ、或は其の老莊の說に類せるを疑ふ、而も彼は虛無自然を主とし、此は實體ある神物を奉ず、天祖を以て日神と爲し、天命因果を排して、禍福の原を禍津日神、大直毘神に出づと爲し、古傳の載せざる所は、之を神異不測に歸して、妄りに臆度を加ふべからずといふ、其の門人服部中庸、更に推衍して「三大考」を著はし、天地泉の開闢を示す、蓋し忌部正通が「神代口訣」、貞治中に於て水土團して一圓球たり、天其外を包むの圖を作る、谷秦山以て千古の秘を啓くと爲す、中庸豈に此に基て之を葦牙の傳說に參し、而して三大清濁、昇降離析の說を爲せるか。又俄羅斯北邊の警に際して「馭戎慨言」の著あり、尊內卑外の旨を擴めて、此邦を以て獨り天照大神の邦にして、大地の頂上、萬國の最尊と爲す。是に於て儒佛の徒、叢りて而して之を難じ、宣長も亦此と往復相辯じ、益其の說を張る、而もかの婚娶犯倫の事の若きは、是れ古の俗にして今の習に非ず、人の今日に處するは、公法世尙、準じて而して之に從ふ、是を神道と爲すと解し、反りて儒者を難ずるに

貴賤雜婚の陋俗を以てし、族品の天分濫るべからざるを道ふ。其の語格を論定して「詞玉緒」「紐鏡」を著はし、音韻の學を釐正して「漢字三音考」「字音假字格」を著はせるが若き、緒餘に屬すと雖も、亦皆先輩未發の蘊を發し、一世の耳目を新にせり。晩年藩主紀侯、召見して侍醫の班に加へ、其の京に入るや、四方才俊、就て學を受くる者多く、縉紳鉅卿も亦其の講莚に列す、蓋し此より前き、縉紳家各其家傳を守り、地下の人を視ること奴隷の若くなりしに、是に至りて草莽學者の說、頗る其の耳を傾くる所と爲れりと云ふ。

破壞と建立

宣長、眞淵を謂ふ、其の道を論ずる、未だ語て詳かならざるあり、故に大義未だ顯はれず、又其の漢意を去ること、未だ全く淨盡せず、往々其の窠臼に墮るを免れずと、蓋し眞淵の才、文辭に長じて而して理義に略す、或は其の天分然る者あらん、抑も亦勢の已むを得ざるか、何となれば、眞淵の地位は破壞に主とせざるを得ず、是れ其の論議、專ら性靈に發して、動もすれば證引に疎に、簡捷獨斷に過ぎて、理路組織に短なる所以、宣長は則ち地位建立に宜し、故に其の古史研究に於ける、言靈の精微を發して、彼が如きの斐然を成すことを得、而も其の古道の說に於けるは、豐かならざるの載籍に擇で、已に備はるの

儒術に抗せんとす、經營太だ困しみて、功或は其の勞に酬いず、同門の間、猶ほ紛紜を招く、然れども其の純ら我が古史に據りて言を立て、衆技雜流に出入せざるを以て、臆說牽合の弊較少し、乃ち下りて平田の徒に至りては、建立の說益熾にして、赤縣印度、乃至西歐の古傳、捜羅して而して參取せざるなからんと欲し、倔强の才、比較宗教學の緒を啓て稽徵辯博、一代を壓倒すと雖も、其の世俗學者をして瞠目して而して疑怪せしむるや益甚し、古學の徒にして、專ら文辭一端に浸淫せず、道義の說に出入する者、大抵本居氏を宗とするは此が爲なり。

眞淵宣長用心の異

且つ眞淵始めて榛蕪を芟り、我より古道を推拓す、故に觸目自ら新異に驚詫すべからざるなく、好奇の心動き易く、耽古の病生じ易し、甞て正月に當りて、躬ら古制の服を服し、其友加藤枝直以て已甚しと爲し、書て今俗に戾るを戒しむ、宣長の見は則ち諸に異なり、謂ふ道なる者は上之を行て而して下に施す者にして、下私に定むべき所に非ず、神學の徒が俗に異なるの行、即ち古に合せしむとも、今世に在ては私たるを免れず、道は天皇の天下を治むる所以、今其の正大公共なる者を以て、自ら限りて隘小にし、巫覡の爲に類し、

加藤枝直天明五年歿年九十四

「聲文私言」に、宣長が古

歌論の異

事記傳に其姓を署すとて、朝臣は無位人の稱すべきにあらざるを以て、平安曾美とかき、又其畫像に披風の後を王人の裾に擬したるを識る、宜長すら此の如し、耽古の弊脫し難きを見るべし。

詭秘隱怪、自ら標榜して神道と謂ふ、數ずるに勝ふべけんや、上の時に制する所、下之に遵て是非することとなし、古道の意此の如し、故に吾家祭祀、供佛施僧の事、一に先世の爲す所の如くして惟だ謹み、強て世俗と異を立てず、學者宜しく道を明かにするを以て務とすべし、私に道を行ふべからず、唯だ其の明らむる所、以て人に敎へ書に著はし、之を後世に傳へて、五百歲千歲、以て時至りて而して上の用ゐて以て天下に施さんことを待つべしと。眞淵の詠歌に於ける、殆ど天授あり、宣長及ぶ能はず、而かも其の歌を論ずるが若きは、則ち亦宣長の言正鵠を得る者多し、歌體の變遷、勢の已むを得ざるに出で、措辭設意、世を逐て充足し、古風後世、各其の長あるを言ひ、新古今を以て斷じて極盛の運とし、而して又其の當時作者の獨造妙詣して、後人の學び難き者と爲す、所謂古風家が「萬葉」を墨守するは、矯情尙ぶに足らずとし、其の學修の序は、亦宜しく後世よりして古風に入るべしと論ず、細かに其の論次する所を咀嚼するに、剖析微に入りて、批評の切當せることと、其の頭腦の健實を想ふべし。縣居氏を以て蘐園に比せば、宣長は其れ春臺か、而して其の人東に興らず、豈に當時江戸文運、其の大幹たる儒學すら方さに碎瑣に流れて、以て

縣門諸子の趨嚮

村田春道明和六年歿
春鄉明和五年歿年三十
千蔭文化五年歿年七十二
小野古道明和中歿
加藤美樹安永六年歿年五十七
林諸鳥寬政六年歿年五十餘
楫取魚彦天明二年歿年六十
油谷倭文

此の絶代の大材を承當し起すに足らざるか、而して眞淵の門、文辭を以て鳴る者は、則ち大半東材、古體の歌、鬱然として東都に興る。

宣長云く、東には文人春海あり京には歌人蘆庵あり、其の詞章の工、吾が及ばざる所なりと、蓋し眞淵東下して、村田春道、加藤枝直、以て莫逆の友と爲し、小野古道、林諸鳥、加藤宇萬伎、春道の二子、春鄉、春海、枝直の子、千蔭、楫取魚彦、倭文子、餘野子、筑波子等、以て受業の弟子とす、皆東國の出、而して最後の三子は婦人なり、其の餘皆古言の學を攻めて、萬葉古體の歌を善くす、就中春海、千蔭、最も少年後進にして、又た最も秀俊たり、關東古學の徒、大抵二子の門に出づ。然るに二子の趣嚮、頗る其の師と同じからず、春海謂へらく、詠歌の法、古言の學は縣翁を奉ずと雖も、道は則ち周公孔子の道を道とす、和學者とは儒の本朝典故言辭に通ずる者、本邦の俗、少うして儒、老て佛、古より盡く然り、此の二者を舍て別に道を建つるは、吾未だ之を聞かずと、是れ其の白川樂翁に悅ばれて、其の餼稟を得る所以にして、又本居氏の徒と相惡く、彼は此を譏りて佞とし、此は彼を罵りて妄とする所以か。其の文辭に至りては、宣長すら已に推服す、以て其の價を

定め難からず、大抵其の歌、所謂古學家と異なり、必ずしも「萬葉」の詞を釆らず、故に平易にして味長し、其の和文は則ち門人小山田與淸評して曰く、詞を古に釆り、心を今に設け、體をかゝくにゝかりて、錦をおり繡をさへよそほひて、文かく道のはしたておこされしは、今むかしにたぐひなき功なりけりと、時に稱して貫之以來、能文比なしと爲す。（子寶曆二年歿年二十　鵜殿餘野子天明八年歿年六十餘　小山田與淸弘化四年歿年六十五）千蔭も亦瀟洒たる詞人、凡々道を求むるの徒にあらず、「萬葉略解」の著、後學に裨あり、筆札の妙、世の景嚮する所と爲るのみ、亦以て關東の氣風、文辭に宜しくして、而して理義は其の長ずる所にあらざりしを見るに足る。論ずる者云ふあり、楫取魚彦の傳に、眞淵初年の姿を專らとし、萬葉の語を以て歌を作す、其の下流奇僻に流れ、佶屈聱牙、人の耳を驚駭して、意は必ずしも後世に異らず、千蔭春海の儔に「古今」を以て正鵠とし、中古のうるはしきを希ふ、是れ眞淵晩年の風に遵ふ也、本居宣長、國學は古體の美を負ふと雖も、和歌は「新古今」を以て宗とし、歌のさま華に流れて實少し、要するに和歌は所長にあらず、門下異流雜出此の如きは、眞淵の大家たる所以也と。

關東に於

關東將軍三四世の後、世々京師貴種淸族と姻を通す、而して纔かに五世[illegible]の運を以て

ける有職學

日下部景衡 享保中人

伊勢安齋 天明四年歿年七十

貞野安通 寛政九年歿年五十二

榊原長俊 寛政九年歿年六十四

瀨名貞雄 寛政八年歿年八十一

す、禮文綺縟の習、先づ後庭より開けて、武弁樸野の風、漸く世俗に鄙しまる、其の外に於て北村季吟の東下して和學所と爲るは、其の内に於て秀才の凌騰、先づ物語草子の講筵を開くに促がされし也、六世の文雅なる、近衛公の東下、新井氏の西上、徭典禮の修備を務めて、有職故實の研究、漸やく學者の心を用ゐる所と爲る、其の草刱の功、白石の力を大なりとす、白石が外弟に日下部景衡あり、武家の故實に精し、白石「軍器考」の著、其の資助に頼ること多しと云ふ。安永天明の際に及で伊勢安齋あり、其家室町氏以來、武家典禮の事を主どる、安齋家學を講習して、博覽該通、著述極めて富み、攷據精密、從前未だ有らずと稱す、往々前輩の謬誤を斥正し、甚だ裨益あり、偶々其の議論、古史神道に涉る者を觀るに、亦識見の人に拔くを見る、門人貞野安通、榊原長俊等、盛んに其學を發揮す、同時瀨名貞雄も亦武家の故實を研索し、最も元和以來の事實に精通せり、既にして大塚蒼梧、寛政享和の際に當りて、有職故實を以て家を成し、兼ねて儒籍に涉り、和漢を貫穿し、其の考證の精核、安齋の上に出ろも、其の下に在らずと稱せらる、且つ安齋の學は武職を主とす、而して蒼梧は則ち律令朝儀に通ず、蓋し此より前京師搢紳學士の專占たり

大塚蒼梧　享和三年歿年七十三

京攝歌人の輩出

入江昌喜　寛政十二年歿年七十九

加藤景範　寛政季年歿

有賀長牧　文政元年歿年六十九

小澤蘆庵　享和元年歿年七十九

伴蒿蹊　文化三年歿年七十四

澄月　寛政十年寂年八十五

慈延　文化二年寂

し有職の學、適さに此際に至りて關東學者も亦其の域內に闖入することを得。

但だ夫れ眞淵の勢は猶ほ徂徠の勢のごときも、眞淵の時に猶ほ徂徠の時のごときを得ず、蘐社芙蕖諸人、關東氣運の精英を吸收して略ぼ盡き、寶曆明和以後、頓に衰颯を極む、眞淵別運を取りて、新たに興て之を振はすと雖も、人才頗る落莫の歎なくばあらず、故に縣門の勢焰は、物門の熾盛なるに及ばず、而して其の關東中心の據を立つること、亦牢として拔くべからざるを致す能はず、千蔭春海等の俊髦、旆を東都に發するの時と雖も、京攝の間、猶ほ之と相抗衡して、關東學風の披靡する所と爲らず。其の浪華に在りては江田世恭、入江昌喜の若きあり、有賀氏の徒に加藤景範あり、有賀長收も亦起て家學を此地に振ふ。其の京師に在りては、小澤蘆庵、伴蒿蹊、僧澄月、慈延、平安和歌の四天王と稱す、然るに四子の才、軒輊なきに非ず、一概に並で稱するは、固より公論に非ず、蘆庵の才調秀拔、最も餘子の及ぶ所に非ず、素より武技に精しく、資性亦慷慨、其の蒲生君平か「山陵志」を修めんとする志を嘉して、之を其の家に舍し、富豪三井某の輕薄を惡て之と絕ちしか若き、以て其の人と爲りを見るに足る、其の歌道に性情を攄べて、修飾を假らざるを以て主

とし、所謂たゞごとを以て歌の至境とす、蓋し頗る時習に慨する所ありと云ふ。是より先き元文より寶暦の間、僧似雲あり、歌を好で西行の跡を慕ひ、古今傳授を藤原實蔭に受けて、遍く名山勝地に遊び、和泉弘川寺の地を以て西行の墳と爲し、庵を結びて居る、明和安永に及び、僧涌蓮、亦和歌を善くし、眞率樂易の風に長ず、京攝たゞごとの一派、實に此等より發す、蘆庵の逸才、既に舊習に沿て搢紳家の法則に拘束せらるゝに堪へず、又古學の驥尾に附して佶倔の語を作すを屑とせず、是れ其の別に法門を開く、たゞごと一途に出づる所以か。蒿蹊も亦同調の人、其の結想、人家の庭園、假山假瀑、奇卉異花、雜然として秀を競ふが若きを厭ひて、悠々として山峙ち水流るゝ自然の景物に類するを愛すといふ、又能文の名ありて「畸人傳」等の著あり、然るに香川景樹の未だ行はれざるや、之を嘲て曰く、此の如き文字我二十年前にして辨すべし、唯だ此の如きを爲さゞらんと欲す、我の今に至りて文章なき所以也と、亦時に英雄なく、豎子をして名を成さしむるに過ぎざる耳、澄月の歌、蘆庵に雁行すと稱す、往々奇趣を求めて、專ら率易を爲さず、慈延は則ち才調較劣る。夫れ澄月、蒿蹊は武者小路實岳に從て、二條家の風を傳へ、涌蓮、蘆庵は

似雲寶暦三年寂年八十六

涌蓮安永三年寂

冷泉爲村に從て冷泉氏の法を受く、各々變ずる所ありと雖も、要するに皆俊成風を倡へて、古學家と並び馳する者たり、冷泉爲村は則ち當時に在りて、搢紳家の歌風を振ひし者、日野資枝も亦之と名を齊しうす、而して梨木祐爲、祐之の孫を以て、亦爲村に學び、詠歌八萬首、精力比なしと稱せられ、前數子と時を同じうす、此れ猶ほ徂徠歿後、享保元文の間、京師猶ほ古文辭學の倂襲する所と爲らざりしがごとき歟、向者云ふ、蘆庵古今體を唱へ、見聞する所に隨て、心の趣く所率易詠出するを主とし、特に六帖の風を布き、爾々二條家近時の束縛を打破するに足る、同時伴蒿蹊、古學を尙び、又中古體の歌を唱ふ、近世地下和歌の盛なること、實に安永天明の際に在り、偃武以後、詠歌一道、堂上を歸とせし者、此に至りて乃ち一變して、地下の達人を以て標準とす、而かも二條冷泉の間全く其人なしといふべからず、涌蓮は爲村卿の門人なり、黃中は澄月の門人にして、又西洞院時名卿の琢磨を受く、是より先き二條家の歌人、江戶に武田白寬あり、大阪に加藤景範あり、京には澄月、大愚あり、又閑院宮美仁親王、傑出の歌仙にして、御詠近世の姿に非ず、風體立意、殆ど三代集の眞に逼ると、亦以て當時の形勢に於て、發明する所あるに足る。

梨木祐爲　享和元年卒

香川黃中　文政四年歿年七十七

關西の語學攷古有職家

富士谷成章安永八年歿年四十二

御杖文政六年歿年五十六

藤井貞幹寛政元年歿年六十八

高橋宗直天明五年歿年八十五

橋本經亮文化三年歿年四十七

富士谷成章が言語音便の說を究むるは、豈に其の兄淇園が開物の學に觀感する所あるか、本居宣長「玉の緖」を著はすや、成章が「かざし」「あゆひ」二抄を觀て歎じて曰く、豈に意はんや我に先て鞭を著くる者あらんとはと、其の詠歌作文も亦夐かに時流に拔けり、歌を搢紳廣橋氏に學ぶを以て、其の超瞥の才、往々古風に出入すと雖も、毎に京家を回護して陽に之を論破せず、而して微に其の獨見を示す、用意蘊藉、及び難き者あり、惜む其の世を永くせざるを、而も子御杖家學を承けて、又詠歌に妙なり。考古の學には藤井貞幹あり、其の家言、宣長等の嘲罵する所と爲る者、杜撰の譏を免かれずと雖も、篤學好古、著書後人に惠すること多し。有職の學には、高橋宗直、宗恆の子を以て、其の家學を大成し、亦儒學を伊藤東涯に受く、尤も諸家の記錄に通達し、其の著「寶石類書」二百餘卷、裒然たる大冊、以て其の博洽を見るべし、其餘數十部あり、宗直の門、橋本經亮、警敏不羈の資を以て、力を斯學に專らにし、服飾故實の攷證極めて多く、「寶石類書」の校正も亦其の手に成れり、中道夭折、著書稿を脫せる者甚だ少きも、其の學識超群なるは蓋し沒すべからずと云ふ、武家の故實に東備の土肥經平の若きあり、其の著書も亦能く世に播せり。

京攝古學の播布

上田餘齋 文化六年歿年七十八

田山敬儀 文化十一年歿年四十九

前波默軒 文政元年歿年七十四

小河萍流 文政三年歿年六十五

清原雄風 文化七年歿年六十四

京攝の間古學あるは、加藤美樹之を東より移植せしに濫觴せる與、其の門に上田餘齋あり、畸行狂才、俗と睽乖し、交友極めて寡く、其の親しみ善する所、盧庵蒿蹊數子に過ぎず、又門戶を張り子弟を延くを意とせざるを以て、其の文辭、珠貝の璀璨たるが若く、其の旨趣、古松の槎枒たるが若く、異彩溢發、奇姿橫生、獲難きの珍たりと雖も、識る者洵に鮮し。鈴屋氏の業大に盛んにして、東は江戶より東海諸國、西中國九州に迄るまで、門葉滋蔓するに及び、京攝も亦古學の風靡する所と爲る者、殆ど二十年、此時に當りて蘆門の英俊田山敬儀、前波默軒、小河萍流等ありと雖も、以て原を燎くの火を撲滅するに足らず、又且つ前後下世し、有賀長收、富士谷御杖等も亦相踵で而して逝く、是れ古學の家をして獨り張らしむる所以、亦猶ほ元文以後、東涯以下相踵で地に就き、而して古文辭の橫流天に滔るがごとき也。然るに海道以西、古學を爲す者、既に本居氏を宗とすれば、則ち千蔭春海の徒、盛んに關東文場に相翺翔するも、勢函嶺を踰て西すること能はず、「怜野集」の撰者清原雄風の若き、鎮西の人を以てかの二子の間に游ぶと雖も、其汗漫放浪せし所の地は亦關東を出でず、竟に芙蕖社諸人が海內文壇の主盟たりしが若きこと能はざる也。

國學の博覽派

塙保己一　文政四年殁年七十六

萩原宗固　天明四年殁年八十二

山岡明阿彌　安永九年殁年六十九

塙保己一が和學講談所を寛政中に開きしは、三博士學政更新の運に合す、而も其の學は歴史律令を主とし、其の業は史料の蒐輯刊行を專らとす、「群書類從」の成る、實に我が刻書の事に於て無前の大業たりしと雖も、三博士が學風の肅清を圖りて、毀譽紛々、一大警策を儒學の趨嚮に加へしが若きことあるなし。若し保己一をして覇心を包藏せしめんには、吉川家の惟一神道、北村氏の和學所、之を衰廢の餘に起すこと、三博士が林家の業を扶植し、擴めて昌平學の盛を致せしが若くし、以て當時古學の徒を鞭撻せんこと、或は其の宜しく出づべきの途たらん、意ふに此の若きは學術の進運に於て必ずしも希ふべき所に非ず、而して保己一の偉たる所以は、亦此に出でざるを以て減せざる也。保己一の學を爲すや、萩原宗固の指導に賴ること多し、宗固は二條冷泉二家の風に出入して詠歌に名あり、而も能く賀茂眞淵が當世に卓絶せるを識りて、保己一をして己れを棄てゝ之に就て教を受けしむ、僅かに半歳にして眞淵殁す、保己一又嘗て律令を山岡明阿彌に學ぶ、明阿も亦眞淵の門に出でゝ師と趣向を異にし別に一家を成せる者、其の長ずる所は紀傳律令に在り、其の精力の注ぐ所は「類聚名物考」三百五十卷等に在り、保己一の學風、淵源する所なくばあ

屋代弘賢　天保十二年殁年八十四
石原正明　文政四年殁年六十二
松岡辰方　天保十四年殁年七十七
中山信名　天保七年殁年五十

考據派

狩谷棭齋　天保六年殁年六十
市野迷庵　天保十一年殁年七十
北靜盧　嘉永元年殁年八十四

らず、而して精博更に焉に加ふ、其の著者を以て煩雜比なき校訂の業を成し、能く後世をして其の恵に頼らしむるに至ては、眞に千古特絶の奇事、人類記性の妙用を極めたる者と謂ふべきのみ。其の門に屋代弘賢あり、藏書五萬卷、博覽にして筆札絶妙と稱せらる、石原正明、松岡辰方は有職故實に精しきを以て著はれ、中山信名は放逸にして舊記文書に通ぜるを以て名あり。蓋し當時儒學、已に考證一派あり、學人も相高ぶるや頗る博洽を衒ふ、氣運の感ずる所、國學の徒も亦た博覽一派の別に旗幟を建つる有り、塙氏は其の大將たり、而して其の之と相前後して各自ら家を成す者に至ては、林々として衆き也。

狩谷棭齋は純ら國學を以て著はるゝ者に非ず、其考據和漢に渉りて、彼間の學に於て、漢儒の言を取り、唐鈔宋槧、碑揩法帖、以て古泉貨に至るまで、珍異貴重き者、蒐備せざるなく、「和名鈔」「靈異記」「法王帝說」等を訂證し、「古京遺文」「度量權衡考」等の著あり、亦松崎慊堂が漢學を主張し、石經を開刊すると時を同じうす、棭齋、市野迷庵と並びて、二三右衛門と稱せられたる一人、北靜廬、亦博洽を以て時に名あり、好で前人の謬誤を指摘せり。靜廬等と同じく狂歌に名ありて宗匠の號を充されたる石川雅望亦、「雅言集

石川雅望天保元年殁年七十八

村田了阿天保十四年殁年七十二

岸本由豆流弘化三年殁年五十八

覽」の著ありて其の文を作るや、一句の來歷なきはなきを期せしが若き、罪なくして配所の月をながめんと言ひし顯基中納言を景慕し、蚤歲薙髮して、一生不犯なりし村田了阿が、考證千典「俚言集覽」の著あるが若き、是れ皆當時專家の外に在て、博覽一派の風を揭げし者。若し夫れ古學の徒に在ては、春海の門人に小山田與淸の若きあり、擁書倉の藏書數萬卷、其の富屋代弘賢と並び稱せらる、春海、千蔭の後、與淸、平田篤胤、伴信友と、或は稱して三大家と爲す、平田は神學に聞え、伴は考證に名あり、而して與淸の長は類書に在り、大家の稱、當否必ずしも論ぜず、而かも其の博引旁搜の力に至ては、同時蓋し能く相若く莫かりし也。同門に岸本由豆流あり、亦多く珍器異書を藏す、狩谷棭齋と姻婭の好ありて交り善くし、儲藏の奇に相誇れり、其の著書は大抵亦考證類纂に屬する者たり。夫れ本居宣長の國學を爲す者を指導するや、古書の註釋を作るを以て喫緊の科目と爲す、關東古學者は則ち天明侈靡の風を承け、重ぬるに文恭院時代繁華の習を以てす、儒風の文酒徵逐に染みて、稠人廣座、應酬の際に勝を求め、刻苦焠礪、力學必傳を期する者甚だ罕な

輕浮一流

り、春海、千蔭等、實に此の輕浮一流の主盟たり。然るに春海の門、小山田岸本二子の若

大石千引（天保五年歿年六十五）

きを出し、千蔭の門、大石千引の若き、亦頗る力を「榮華」「三鏡」の類、物語の外に在りて、前人未だ手を下さゞる者に殫精す、同時國學の徒、力苟くも企つべくば、注釋を以て其の蘊蓄を見さんことを欲せざるなく、千蔭の門、岡田眞澄の若き、其の師の儀表たる筆札に於て得る所あるすら、乃ち「書話」の著、假字の源流を繹ねて、考證の力を示すに至る、亦以て一時の風潮を見るべし、但だ其の志向は竟に博を衒ひ奇を好むの弊を免れず、殊に親切着實の風少し、是は則ち時習方俗の遽かに脱し易からざる也。

京攝の博覽家

尾崎雅嘉（文政十一年歿年七十三）橋本稻彥（文化六年歿）伴信友（弘化三年歿年七十四）平田篤胤（天保十四年歿年六

塙氏の業、覇府の資を仰ぐは、關西學者の固より望むことを得ざる所、然るに其の專門の業として博洽の實力を見せし者は、京攝の間、決して其人なしとせず、浪華の尾崎雅嘉、和漢の群籍、渉獵せざるなしと稱す、而して其の當時學者異を立て名を求むるの弊を懲し、著述する所皆親切後學に便せしが若き、用意の甚だ篤きを見る。鈴屋の門、橋本稻彥、中道にして夭折すと雖も、其の篤學精敏は、明らかに庸流に非ず、伴信友は百年考證の大家、亦本居氏に私淑せる者、平田篤胤が其の相善かりし日に稱して、校訂の才、當世無雙と爲せし所、皇室神祇より古文古歌の解釋、雜攷隨筆の類に至るまで、旁證して而して能

十八

榎並隆璉 弘化元年歿年七十

足代弘訓 安政四年歿年七十三

河村益根 文政三年歿年六十四

穗井田忠友 弘化四年歿年五十六

博涉派中心と關東

國學の三大變

く其の要を得、精核周緻、一絲の滲漏なきに至らざれば敢て安ぜず、宜なり後の學者、其斷篇零冊と雖も、珍として之を傳ふるや。北邊氏の門に榎並隆璉あり、「國史類函」二百五十卷、「源氏物語廠袋」五十卷の著、其の精力過絶を知るに足る。尾參勢濃の間に在ては、本居氏の學再傳して足代弘訓を生ず、江戸に出でゝ塙、狩谷、北、屋代諸子の間に交遊し、「國史人名部類」以下考證類書の著編、千卷に餘れり、河村秀根の子に益根ありて、國史制度、家學に關する著述、頗る亦之れ有り。桂園の門に出でゝ一種出色の才調たる穗井田忠友、其の制度地理古器の考覈に於て、南都の秘藏を發し、精確なること藤貞幹の上に在りと稱せらる。其の浮夸衿持の態なく、實際實用と親しむより之を言へば、此等諸子の業、豈に必ず關東諸子の後に在る者ならんや、抑も塙氏の大幹たるは殆ど動かすべからざれば、則ち博涉一途、竟に關東以て中心と爲さゞるを得ず、亦儒學と跡實に相似る也。

夫れ春滿の前に在ては、神道者流、詠歌の徒、有職の家、各別に家を成して必ずしも相涉らず、貞德、惟足、鶴翁の徒、縉紳家の業を移して、草野の士を以て之を唱ふ、一變なり、而かも未だ混一して相通ずるに至らず。春滿其の卓絶の見を振ひ、長流、契沖が語釋

の說に鑒みて、盡く之を神道、有職の學に施し、直ちに其の源に溯り、其の歸一する所を求めて以て之を澄清し、而して其の流委岐派する者をして、亦皆泥濁に免かれしめんとす、眞淵之を承け、一生の成就する所、亦語釋詠歌を出でず、間々論著する所は、則ち麁にして未だ備はらざる者多し。而かも古學の旨、章然として已に一代に申ぶ、其の門に及ばざる者と雖も、學を爲すの方嚮、宜しく改めざるべからざるを知り、復た從前消習杜撰の說に安ぜず、是れ春滿眞淵、其の手に於て親しく神道、詠歌、有職の學を該ねて而して之を一にする能はずと雖も、而かも神道、詠歌、有職の學、皆二子の古學を倡ふるに因て而して其面目を改めたり、二變なり。此より其後、苟しくも國學を爲す者、異を立て新を標する、一にして足らず、而して多少古學の矩度に出入せざる者なし、但だ夫れ混一の運は、特に大變態の際に在りて大に人に拔くの才有り、乃ち能く時に乘じて行く、其機一たび去り、其人一たび逝けば、則ち亦分離の勢踵で至る、眞淵の門、已に宣長の古典に長じ、千蔭、春海等の詞章に專らなる、岐して而して二と爲り、往々相容れず、其の旁出する者、明阿と爲り、保己一と爲り、紀傳律令の學、亦派生す、春海の門、與淸、弓技等は博覽を

清水濱臣 文政七年歿年四十九
本間游清 嘉永三年歿年七十
片岡寛光 天保九年歿
春庭 文政十一年歿年六十六
大平 天保四年歿年七十八
藤井高尙 天保十一年歿年七十七
村田春門 天保七年歿
香川景樹 天保十四年歿年七十四

主とし、清水濱臣、本間游清、片岡寛光等は、仍ほ文雅詞章を以て家を成せり、宣長の子春庭、其の門人石塚龍麿、其の義子大平の門人、僧義門等は語言の學に精しく、門人藤井高尙、村田春門等は文詞和歌を攻め、服部中庸等は古道の發揮に勉め、而して其私淑せる二英物、平田篤胤の神典に於ける、伴信友の考證に於ける、亦皆其の趨嚮を一にせず、此を第三變とす。亦猶ほ儒の寶暦明和の後、學風蘐氏の彀中に落ちざるなきも、而かも百家競ひ起り、各々軌途を異にし、能く相統一することなく、宋學の再興、異學の禁制も、以て之を遏むるに足らざるがごとき歟、而して其の間に在て、踔厲風發、一代を振盪し、天下の耳目を聳動せし者を、神道の平田篤胤、詠歌の香川景樹とす。

平田氏の神道

篤胤東偏に生れて江戸に出で、鷙悍の姿、辯博の才、困頓轗軻の際に發奮して、傲岸凌厲の氣を鼓舞す、宣長の書を讀で、其の說に服し、自ら稱して門人と曰ふと雖も、其の學術人物、夐然同じからず、宣長が平正にして篤學、古を好で今俗に逆らはざると撰を異にし、古道を振興して之を當世に施し、神典を以て萬邦經緯の憲章と爲さんとす。服部中庸が「三大考」の說を擴めて「靈の眞柱」を著はし、益々天地泉開闢の說を主張し、日月大

地を以て幽明の理に傅會す、紀記以下有る所の古書を蒐萃して、彼此綴輯、其の意を以て捏合し「古史成文」を著はし、更に其の傳を作りて其の道とする所を表章し、定めて百代の大經と爲さんと欲す、亦已に宣長が諸古典に擇で「古事記」の最も古にして眞たるを取り、循々として之を釋して、以て古俗古道を繹ぬるの類に非す。其の力を用ゐる所は、又特に外邦の典籍に在り、是を以て支那に於ては、道教讖緯の書を究め、星暦、卜筮、醫巫、妖魅の説を求め、皇天鬼神を畏れ、祭祀郊禘を虔しむ古風を鑑として、後世儒教が人を以て天を換り、理を以て道を解するの虚僞を謗り、其の天竺に於ては、大藏の遺す所に由りて、摸索探究、梵天の古説を取り、外道の説雜出して、梵志の徒衰へ、佛陀の教、理義玄排、外道の上に加へて、而して古傳の眞脈を紊亂するを論じ、外道佛教を斥けて、之を梵志の古に復せんとし、而る後盡く之を我が神道に牽合し、斷じて曰く、海外萬邦の古傳は皆我が古傳の訛れる也と、又其の蘭學者の言を聞き、當時理學宗教抗爭の勢、未だ判明せず、而して其の我に傳ふるや、亦未だ詳悉たらざるを以て、造物の教を得て、便ち之を悅び、地動の説を得て、便ち之を取り、并せ援て以て古傳の旨を得ると爲せり、若し篤胤を

して新舊約の別を知らしめば、或は亦將さに「舊約」を助けて而して基督の教を斥けんとする也。其の佛教を研究するの餘、禪定治心の義を得て、之を翻して以て神道の實用を補はんとするや、情慾を離れ、親眷を棄て、汚穢貧窮に處して、以て見性成佛を求むるを排し、皇產靈神が人に賦せる眞心、善美を好むの性を存するを以て道と爲す、蓋し其の儒學を論ずる、漢儒五行讖緯の說を本とし、當時儒の古學に得る所少からず、佛教を論ずる、富永、服部等の說を祖述して、更に精微を析きしが如く、其の治心の說も亦當時儒者の間に漸やく將さに淡洽せんとする餘姚氏の旨と默契するあるを見る、洵に時運の致す所、自然に此の如き者あるか。論者或は謂ふ、其の空海が兩部神道を痛擊し、更に惟一神道、垂加神道を詆刺し、道海潮音を怒罵するや、反て敵の謀に資して、空海が本地垂跡の說、潮音が佛教統治の策を翻し、彼此を轉倒して、以て其の閎博玄遠の神道經綸を大成せんと欲すと、是も亦或は然る也。

要するに其の雄傑悍驁の才、百部千餘卷の著書、横說竪說、同を撥き異を排すること、餘力を遺さず、怒罵抵擊、回避する所なし、是を以て其の同門の士、早く已に嫌惡する者

あり、大平宣長の嗣子を以て、篤く師說を信ずと稱す、而して後相交親せしと雖も、初め最も相合せず、城戸千楯は評して以て大に山氣ある人物なりとし、殿村安守は以て鈴門の猛虎、惜いかな之を服する人なし、藤垣內翁、春庭翁などの手にあひ難しと爲し、伴信友も亦た初め親しくして後に相惡し、其餘毀譽紛々、概ね皆其の說は信ずべからざるも、其人英雄、服すべしと爲せり、獨り服部中庸、齋藤彥麿等、終始之を扶くるある耳。意ふに篤胤溫藉雍容の風なくして、而して又機變縱横の術を逞しうす、其の京師に入るや、著書を天闕に獻じ、謁を公卿に通じ、白川家神祇伯を以て、囑するに神祇道の教授を以てし、其の怒罵を被れる吉田家も亦其の聲望を利とし、託するに學頭の任を以てす、篤胤も亦受けて辭せず、藉りて其道を弘め、以て俗神道を變ぜんと欲す、永平の禹疇、居士號を贈れば、則ち亦喜で之を受く、其の門下を導く、星曆卜筮、問ふがまゝに之を授け、博蒐多方、醇駁兼ね有し、業を受くる者五百餘人に及び、大國侯伯、島津、前田、細川諸氏、皆歲時贈遺する所あり、晚年其の故主佐竹氏の徵に應ず、門戶の大に張れるは、則ち毀譽の百端なる所以。之を終ふるに「大扶桑國考」の獻、「天朝無窮曆」の著、水藩及幕府有司の嫌忌

城戸千楯 弘化二年殁 年六十八

齋藤彥麿 安政元年殁 年八十七

生田道滿 天保八年歿

佐藤信淵 嘉永三年歿 年八十二

篤胤以外の神道

橘守部 嘉永二年歿 年七十 荒木田久老 文化元年歿 年五十九

に觸れて著述の禁を被り、竄逐せられて故土に歸り、僅かに二年にして歿し、而して是より先き其の高足弟子、越後の生田道滿は、大鹽の亂に感憤して、又身を土寇の徇に殞し、其の同國の奇傑にして、又嘗て業を問ひ、「鎔造化育論」「天柱記」の著、益々西說を以て神道に渾融し、蘭學者中に在りて、識力挺拔、構思潤大に、空想の經綸、一代を推倒したる佐藤信淵は、神道方吉川氏の門に學頭として罪を被りて追放せらる、世運動盪の機已に兆するの致す所と雖も、又篤胤等の性之を招く者なくんばあらざる也。

篤胤の神道、宣長の意に合すると否とを問はず、自ら稱して鈴門末弟と爲す、其の門戶を張大して、天下を震駭するに當り、固に亦以て鈴氏の勢焰を揚ぐるに足らずんばあらず、獨り橘守部此際に當りて、斷々として本居氏の爲す所に反して、別に一家の言を立つ、其れ亦一時の雄なるかな。蓋し荒木田久老、內宮の神官を以て縣門の巨擘たり、豪邁卓越の資、律令祝詞に精しく、最も「萬葉集」に通ず、當時宣長と幷び稱せらる、然るに晩年其の家傳を主張して、縣鈴二氏と頗る趨嚮を異にする者あり、守部の學は則ち此に得る所あり、概ね神宮傳說を祖述すと云ふ。守部は伊勢の人にして、江戶に出でゝ家を成す、當時

古學者「古事記」を以て唯一の經典と爲し、方さに且つ崇奉を極む、守部は則ち之に反し、盛んに「書紀」を揚げ、盡敬王の撰述、盡く古傳を存して、敢て一毫私意を其の間に加へて、取捨する所あらず、其の漢習ある者は、孝徳天智の際、彼土の文物を浮慕すること甚しき日、文人學士、記する所の遺に係り、一切刪去して其の眞を并せ失ふことを能はざるに由るとし、舊辭本辭の差、稚言談辭（コサナゴトカタノゴト）の辯、略語合言の說を根據とし、以て縷解著析、頗る精義を發揮せり、而して收むる所古傳は、各皆據る所ありて、上古口々傳誦、以て舊聞を存せる者、其の稚言談辭の錯出疊見して、屢々人の理會を誤る所以は、實に此が爲にして、此れ適往時に在りて其の誦習を助くる所以たり、當時人皆古傳の義を闡知して、曾て惑ふ所なかりしも、大同弘仁の後、漢學の横流するに及び、乃ち全く之を失ひ、古言斯に荒むで、荊棘永へに拔くべからざるに至るといひ、又天、泉、國、現、顯露の義を解するに、之を有形實物に着せずして、之を無形神界に歸す、謂ふ、天也、黃泉也、皆幽冥の一界也、其の處に約すれば、此の世の外に出です、近く身體を包みて、而して膚に觸れず、遠く六合に彌りて而して眼に遮らず、神には則ち天と曰ひ、鬼には則ち黃泉と曰ひ、二者

を相攝ねて幽と曰ふ、世事萬彙、咸く神之を幽冥の間より治し、興廢禍福、感ずること影響の如し、敬すべく畏るべきの至り也と、素盞雄尊の忍穗耳尊と、大巳貴尊の瓊々杵尊と、幽顯相代治するの說ありて、大抵古史の跡を以て、之を地理より觀ずして、之を神話の假託に察す。其の他「舊事紀」が痛く從前學者に斥けられたるを寃として、寧樂の季世に抄錄せる古記典に、平安京の中世、僞りて被らすに聖德太子撰の「舊事本紀」の名を以てしたる者と斷じ、其の錄する所は所謂本辭體の殘篇多く、珍重すべきものと爲し、又濱成の天書、神宮の「倭姬命世紀」に於て皆取る所ある等、是れ其の本居一派と趣舍を異にする所とす。世に天保四大家を數ふる者あり、篤胤、信友、景樹、守部即ち此れなり、其の時名ありしを見るべし。久老の子久守、靑木永弘の後永章等、亦其の說を贊くれば、則ち古學の反動、將さに大に至らんとするの勢、守部未だ必ずしも其の關捩たるに足らずんばあらず、顧ふに其の死後二十年ならずして、國情の大變に遭ひ、國學の氣焰熄む、故に其の變態、竟に之を見るに及ばざる耳。

荒木田久守安政五年歿年七十一

京師神道の瑣尾

是時に當りて、京師神道、瑣尾極まれり、備中の小寺淸之、卜部氏に學び、並葭頴敏の

小寺清之文政三年歿年八十

松岡歸厚嘉永三年歿

平田神道の餘流

野々口隆正明治四年歿年八十

六人部是香慶應元年歿年六十

鶴峯戊申安政六年歿年七十二

稱あり、寛政文化の間、其の地に鳴る、其の國史註疏に於ける、講究せざるなしと雖も、猶ほ山崎氏の軌轍を出づる能はず、谷川士清の「通證」甚だ備はれるを稱し、其の旨未た盡さゞる所有りとして「本教闡明」以下、述作頗る多し、吉田氏の家司松岡仲良、歸厚等相繼で家學を傳ふるも、亦舊説を沿襲するに過ぎず、故に篤胤が其の叫囂跳擲を極むるに當りて、吉田氏の家司江戸に在る者、屈して其の門に入り、而して京師に報するに、斯人に頼らずんば頽勢支へ難きを以てし、京師家司故老の輩、舊義を株守する者、往々違言あるも、竟に古學の猛將を延て、而して其の殘壘を保つの計を爲さざる能はざりき、其の衰颯の狀知るべし。然るに伊吹迺舍の門に出でゝ、盛んに其の學を主張せし者、野々口隆正、六人部是香等は、則ち皆京師に在りて家を成し、鶴峯戊申も亦鎭西の材を以て、水府烈公に用ゐらる、蓋し此等諸人に至りて、而して蘭學習合の風甚しく、乃ちゴツトを以て産靈神と爲して憚らざる者ありと云ふ、而して其の一種臆造の理論を推衍して、直に遡りて天人の宗源を解釋せんと務むるに至りては、淺易の言、心學の徒に類し、獨斷の論、大膽後素等の風ある者か。夫れ儒者に在て物理を明らめ、

遂に釋老の言、西洋窮理の說に涉る者、三浦攀山、帆足萬里の若きあり、二人皆鎭西に出づ、而して篤胤、信淵の徒は則ち東部に生ず、時は則ち粗ぼ相前後す、地は則ち相距る五百里、斯に亦奇なり、而して篤胤の學、殆ど海內に洽く、攀山、萬里の澤、鄉閭の間を出でず、豈に亦東に發する者、毎に彌蔓の性あり、而して西に生ずる者、皆孤立の風ある歟。

桂園派の和歌

香川宣阿享保二十年歿年九十

清水谷實業寶永六年薨年六十二

景新元文四年歿

景平寬政元年歿年六十八

香川氏の詠歌を以て家を爲すや久し、梅月堂宣阿、周防の人を以て京師に入り、淸水谷實業に從て二條家の風を學び、一條の今西行と稱せらる、享保の末に歿す、其子景新、孫景平、曾孫黃中、皆克く箕裘を繼ぎ、家聲を墜さず、景樹は即ち黃中が螟蛉子、因幡の人、幼より俊慧、十五歲にして「百首異見」を著はす、京師に出で黃中に養はるゝに及で、其の識力益々進み、漸やく古學家の言に浸淫し、又獨造の說あり、頗る家學を變ぜんと欲す、終に黃中と合せず、加ふるに他故を以てし、乃ち梅月堂を辭して、別に自から家を成す、而かも師弟の義を存し、猶ほ香川氏を稱せり、享和文化の交に當り、蘆庵蒿蹊等、たゞごと一派の巨擘、衰殘相踵ぎ、而して吐屑庵慈延、及び蘆門の名家、默軒、萍流等、猶ほ時に鳴る、景樹方壯の後進を以て、已に嶄然として頭角を其間に露はし、諸老と相抗衡し、

熊谷直好　文久二年歿、年八十一
木下幸文　文政四年歿、年四十三
桃澤夢宅　文政八年歿、年七十四

毀譽並に至る、獨り北邊一派、御杖、除璉等、之と交り善し、門人には周防の熊谷直好、備中の木下幸文等、僅かに之を羽翼するあり、桃澤夢宅、澄月の後を承けて垂雲軒に主たり、而して亦景樹に心折し、遂に其の社中に入る。蓋し此時よりして早く已に貫之躬恒を主とし、風調を尙び、識見頗る時流に拔く者あり、既にして古學の風大に世に流行するに及び、景樹は則ち其の詠歌の正路に非ざるを見るや、「新學異見」を著はして眞淵の說を駁し、古今代を異にすれば、風體の同じからざるを致すは、自然の理、一誠の發する所、乃ち天地の調たり、風の物に賦して聲を成すが若し、若し其の世の體を體とせずば、何の體に取る所あらん、徒に古風を主とし、古調を踏襲し、古言を割裂するは、反て僞飾に墮つと爲す、歌は調ぶる者にして、理はる者にあらずとは、其の常に主張する所なり、「古今集正義」は其の畢生の精力を注ぐ所、前人の未發を啓き、歌道の蘊奧を盡す、意ふに古より歌を說くの精、能く其の右に出づる者罕なり、其の自ら運する所も亦清麗秀雅、意韻先に在り、紛々たる咳唾、玉屑と爲る、之を眞淵に比するに、彼は怪偉夭矯、音なくして老硬なるが若く、此は明珠瑩徹、水に入りて見えざるが若く、彼は乾肉を嚼むが若く、自

赤尾可官　寶永五年歿、年八十九
中川自休　天保十二年歿、年六十四
朝山常清　弘化三年歿、年六十四
高橋殘夢　嘉永四年歿、年八十

七
渡忠秋明治十四年歿年七十一
山田清安嘉永元年歿年五十六
村山松根明治十五年歿年六十一
八田知紀明治六年歿年七十五
氷室豊長文久三年歿年八十
内山眞弓嘉永五年歿年六十七
兒山紀成嘉永四年歿
菅沼斐雄天保五年歿年四十

決咬嚼、滋味方に生じ、此は哀家梨を食ふが若く、吻に觸れ咽に下り、快爽言ひ難し、其の上乘なる者に至りては、鏡花水月、妙に幽微に入り、逌然として性情の玄機に觸るゝ者あり、賛する者以て紀記萬葉を祖述し「三代集」を憲章し、意を古に取り、詞を今に擇び、貫之躬恒の神髓を得て、其の面貌を襲はず、姿華にして靈活するも、草庵漫吟の口氣なく、意工にして新奇なるも、新古今徹書記の牙後に落ちずと爲す、其の才の流利に過ぐるを以て、動もすれば諸體に流れ易く、鄙近に陷るを譏る者ありと雖も、超詣妙悟、企及し易きに匪ず。文政天保の際、門人大に進み、海内を風靡す、熊谷、木下の外、赤尾可官、中川自休、朝山常清、高橋殘夢、渡忠秋等を近畿以西の材とし、又特に西偏の材、其の手に開拓せらるゝあり、山田清安、村山松根、八田知紀等薩南より出でゝ、而して明治歌運の隆興、實に此の數老の澤に賴ること多し、海道の材には穂井田忠友、氷室豊長の若きあり、山道には内山眞弓の若きあり、而して兒山紀成、菅沼斐雄等は、則ち之を關東に擴めたり。

是時に當りて、關東には千蔭、春海等已に凋謝して、春海の徒、清水濱臣は其の才ありて而して其の壽を永くせず。片岡寛光、本間游清等、錦門の後勁たり、足代弘訓、博覽の

九

景樹同時關東の歌人

加茂季鷹天保十三年卒年九十一

安田躬弦文化十三年歿

垣本雪臣天保十年歿年六十三

和歌と詩文

桂園柿園と賴梁二家

餘を以て、詠歌も亦工に、景樹が稱して古學者詠歌の最と爲す所と雖も、桂園氏の其の業に篤くして且つ深きが若きは、則ち未だ企つべからざる者あり。加茂季鷹、京師の人を以て、江戸に移りて業大に行はれ、其の狂歌を兼善くし、能俗に投ずるに宜しきを以て、一時名海內に振ひ、王侯貴人、以て俳優市豎に至るまで、其門に出入せざるなく、其の徒も亦安田躬弦、垣本雪臣の若きあり、而かも景桑楡に薄り、門下凋零す、是を以て桂園の業海內に獨步し、文學地下に遷りてより、關西の歌人、未だ斯の若きの盛なるあらざる也。

夫れ眞淵を以て徂徠と爲さば、美樹、魚彥が古調を以て之を羽翼するに、服部南郭、安藤東野、山縣周南の類に非ずや、然るに千蔭、春海の輩、眞淵晩年の弟子として、必ずしも「萬葉」を奉ぜざれば、則ち眞淵の古風に於けるは、徂徠が古文辭に於て一往還にさると同じからざる者あり、故に千蔭、春海が風流相高ふること江湖社諸人に類するあり、而して其の縣居氏を崇奉すること、江湖社諸人が宋詩を主として、古文辭を罵ると同じからざるも、亦由る所なしとせず。通蓮、澄月、或は六如に比すべく、蘆庵は其れ菅茶山か、賴山陽は詩を以て專家たるに非ず、其の作る所亦力を以て局面を壓倒する者多しと雖も、

加納諸平
安政四年
歿年五十
二

千種有功
安政元年
歿年五十
八

萩原廣道
文久三年
歿年五十
一

蓮月尼明
治十八年
歿年八十
五

井上文雄
明治四年
歿年七十
二

其の才識靈慧透朗、而して眞を以て一字訣とし、唯眞故新を以て四字訣とするが若き、之を景樹に比して全く不倫とせざる者あり、然らば即ち梁星巖の地に擬すべき者は、其れ加納諸平か。諸平は遠州に出づと雖も、而かも和歌山に長ず、夏目甕麿の子にして、本居大平の弟子たり、故に其の傳は古學氏に出るも、本居氏の詠歌に於ける、宣長より已に「新古今」を主とす、諸平は又眞淵以來の風に鑑み、古に拘せず、今に徇へず、骨氣の蒼老を裏にして、而して詞釆の煥發を求む、亦星巖が唐賢を祟尙して、而して清人の風貌に取るが若き者あり、「鰒玉集」を選して同時の歌人を品隲し、門下又古學の徒多く、其の風近畿以西に波及して、桂園一派と幷び行はれたり、堂上に在りては千種有功、亦二條家の窠臼に墮ちず、而して名手の稱あり。此より其後、浪華に萩原廣道あり、其の名著「源氏評釋」は、當時儒の文章專家、評文の法に倣ひて、之を國文に應用せし者、頗る微旨を發揮して、眉目瞭然たるを致し、京師蓮月尼の歌、亦一家の風あり、風流の名時に噪し。江戶の井上文雄は岸本由豆流、一柳千古に學び、其の古を論ずるに、選集を斥けて家集を主とするが若き、尤も適正の見たり、其の自ら爲すや、辭を「新古今」以前、寛治の頃に采り

東西歌道考據學の一昂一低

內藤廣前慶應二年歿年七十六

黑川春村慶應二年歿年六十八

前田夏蔭元治元年歿年七十二

攷據の餘流

海野游翁嘉永元年歿年六十

太田全齋文政中人

山本淸溪文政六年歿年七十

細井昌阿文政六年歿年五十二

て、巧に之を剪裁し、景樹以後に在りて、異曲同工の歌才と稱せらる、其餘時に名家なきに非ず、而かも詠歌一道、東は終に西の盛に及ばず。然るに信友歿して後、西博洽攷據の家に匱しく、而して東は則ち「丹鶴叢書」の編者、內藤廣前の若きあり、狂歌の點者淺草庵より出でし黑川春村の若きあり、濱臣の門人前田夏蔭の若きあり、蓋し武治の季運、時勢の轉變、已に中に蘊する者ありて、東は奢華の勢積重し、而して西は用世の學流行すると相感ずるあり、かの儒學に在りても、淸人攷據の風、徐々東に盛んに、而して伴蒿蹊の學、特に西に喜ばれしと相發明して、以て其の偶然に非ざるを知るべし。

攷據の餘派、語言の學、漸やく盛んにして、本居氏春庭、義門大德が大に力を此に用ゐし外、東に在ては、海野游翁が「天言活用圖」「五十音口訣」の著あり、太田全齋が「漢呉音圖」に至りては、字音の研覈に於て、從前未だ有らざるの創見を出し、黑河春村亦「音韻考證」三十卷を著せり、此等の學は亦文字を戲弄する東人に宜しき所とす。有職の學、亦漸やく博洽を衒ふの資と爲り、山本淸溪、大炊御門家の諸大夫に出でゝ、晩に江戶に遊び、制度に通ず、細井昌阿は其の門に出でゝ、姓氏に精し、荷田惟德、御風の養子を以て、亦家

學に名あり、京師には則ち吉田家の士、山田錦所、藤井貞幹の門に出で、小野重賢は薦門の巨擘たり、又谷口胤祿あり、皆縉紳家に仕ふる者、堂上には竹屋光棣あり、皆文政天保間の人に係る、而して有栖川宮の臣、飯田忠彥が「野史」は、文辭の稱すべきにあらざるも、其の獨力四百餘年を網羅せる精力、其の人慷慨忠誠の性と、並びに傳ふべき也、此を國學變移の梗概と爲す。

荷田惟德
文政十年歿、六十年

山田錦所
天保六年卒、七十年

小野重賢
天保五年卒、九十五年

谷口胤祿
文政五年卒、七十年

飯田忠彥
萬延元年歿、六十年

餘論

學庶人に及ばず

三百年の武治、階級制を爲し、士庶の間、嚴に鴻溝を劃し、漫りに踰越することを得ず、東照公以來、右文の政、頗る儒術を崇尚すと稱すと雖も、未だ始より此を以て勸て庶民に及ぶこと有らざりき。然るに世運の趨く所は、必ずしも制度の局する所に止まること能はず、

實力中心の遷降

且つ士人以上に在りても、實力中心の存する所、世を逐て遷降するものあるを見る、慶元の間、偃武の勢僅かに成るや、戰國の風を承けて、侯伯の文學技藝ある者、猶ほ甚だ僅し

諸侯の學

からず、蒲生氏鄕、伊達政宗等、鈐韜の餘緒に出づと雖も、作る所往々誦すべき者あり、細川幽齋父子、木下長嘯の若きは、則ち稱して專家と爲す、小堀遠州の諸技を兼綜せるが

卿大夫の學

若き、亦以て當時の狀を見るべし。寬永以後に及で、學漸やく卿大夫に遷る、是故に土佐の小倉、野中の若き、備前の熊澤の若き、皆身執政の位に在りて、而して學ぶ所之を其の國に行ふことを得、苟くも學術を以て仕を求むる者、皆千石二千石を望み、未だ嘗て此を

以て自ら過ぎたりと爲さゞりき、其兵學の徒の若き、往々五千石、一萬石を以て擬せらる者あり、山井正雪、山鹿素行の若き、自ら居る所人の許す所、同じく然らざる莫し、蓋し學者仕ふれば則ち卿大夫、以て之を國政に實にするに非ざれば、苟くも仕へざる也、寛文延寶、以て貞享元祿の際に至るまで、此風猶ほ存す。此時に當りて、賢諸侯の學に篤き、備前芳烈公、會津土津公、水府西山公、加賀松雲公の若き、猶ほ之れなきに非ず、然れども天下侯伯、其の百戰の勞を以て茅土の封を受けしより、既に皆三四傳せり、深宮の中に生れ、婦人の手に長じ、放恣にして檢束せらるゝ所なく、詔佞四周して壅蔽極めて多し、所謂安本丹と做り了せざる者幾くもなき也。夫れ戰國儉嗇の風に習ふ者、一たび無事の日に際す、入る者餘あり、出づる者途なし、鞬櫜の始め、大國侯伯が富實を以て覇府に忌まれしに異しむことなき也、是に於て屢大役を土木に課され、遂に參覲を常例と定めらる、其の太だ困しまざりし者は、かの百戰の將士、行陣に慣れ、糲食を甘しとせる者猶ほ存せる日のみ、一再傳の後、驕奢を以て封を失ひ、淫佚を以て國を危くせざる者希れに、其の勤儉にして精勵なる者、亦往々にして改封の禍に罹らんことを恐る、故に愚者は自ら學を

諸侯富實の時

作り、賢者も亦自ら晦ますの利たるを知る、德川氏三四世の間、侯伯が奢靡に沈溺するの風、遏むべからざるの勢ありし者此が爲なり、諸侯自ら用ゐるの才ある者少くして、而して能者卿大夫に出づ、學術の變移も亦此の勢と相表裏す。元祿以後、諸侯既に窮して、而して貨權商賈に移る、幕府も亦五世豐亨の運、大に其の盛美を縱にして、而して實力漸く細し、功利の臣用ゐられ、貨幣改鑄の議興る。夫れ儒者の經濟を談ずるもの、大抵貴を貴で而して商を賤しむ、又貨權の治者を離れて而して商賈に歸するを以て憂と爲さゞるなし、故に其の學術の歸宿する所に於けるも、亦下るも士人以下に在らしむることを欲せざるは、古今議者の其の軌を一にする所なり。學術漸やく卿大夫を離れて、而して士に歸すれば、學者の仕ふる者も亦士を以て自ら甘ぜざるを得ず、徂徠の大才、五百石に過る能はず、春臺は則ち二百石に非ざれば仕ふべからずと曰ふ、其の價遂下る、學者既に諸侯卿大夫の厚禮を受る能はざるを患ふ、其學ぶ所を以て國政に施す能はざるに飽たき也、紀平洲の米澤鷹山公に於るが若きは、則ち優曇華の華さくが若き耳。是に於て、學を爲す所以の者、歧して二と爲る、祿仕を求むる者と、市井に活を求むる者と也、かの市井の儒の大に張りし

貨權商賈に移る

士の學

祿仕の學
市井の學

は、護苑の學の流行と相因縁す、何となれば士人以上の學は、其主とする所、猶道を以て自ら任ずるに在り、若し夫れ庶民に在ては、たとひ學ぶ所あるも、以て戯玩の一種を爲すに過ぎず、香道茶式と以て擇ぶ所あるなし、故に文字を弄するの學は、其の就き易き所、徂徠其人は經世の志なきに非ざるも、聖人の道を說くに功利の術を以てす、是れ一は我が民種の特性、實際に着して空理を喜ばざると、一は其人冥々の間、時運に影響せられて自ら知らざるとの致す所にして、其の徒從文辭を夸張するに及で、市井の儒、士民を雜へて而して授くる者、皆其の矩矱に從て而して生を爲し易きを便とせり。抑も元祿の際、西に在りて仁齋已に身を賈人に起す、仁齋の生を爲すや、以て售れんことを賈人に求めしに非ず、而して其の身を起す所以と、其の學の理を斥けて氣を主とする、漸やく功利の風を開くと、皆偶然に非ざるが若き者あり、此も亦由あり、京儒が口を講說に糊して、祿仕する者少きは、從來皆然り、講筵に參する者士庶に擇ぶなければ、即ち其の松永、朝山輩、天子の禮遇を蒙り、山崎の徒、貧困に甘じて、道を行ふの意氣を喪はざるの外、大抵流れて徇俗の弊に入らざるを得ず、仁齋の人と爲り、俗に媚ぶる者に非ず、徐軒、東涯の博物亦

戯玩の學術

東西遞に及ぶ

必ずしも賈人に售ろを求むるに非ざるも、一世の趨く所は、則ち免るゝ能はず。此風京師より開けて、而して江戸浪華に大成せり、若し刻實に論ずれば、水府の修史を以て文士を徵するが若き、已に問道の故に非ず、山崎の徒、此に趨くを以て師弟の義を相絕つ者あるに至る、此も亦蘐園の前に在りて、文士一派の泉源を開ける者なり、然るに江戸の文辭派、方さに滔天の勢あるに當り、浪華懷德書院の興る、尙ほ前輩守道の風ある者は、其の曉く開けて、而して激する所あるに由る、中井氏、竹山、履軒より、已に其の文の風に異なる者あり、同時諸儒に至りては、皆賈人に售ろゝの學を勸むるのみ。白石の仕途、一たび大用の機を得、其人亦禮文を好む、故に學士人に在るの時に際すと雖も、猶ほ卿大夫氣象を失はず、幕府八世有德將軍の時に及び、將軍已に有司の政を好み、武健の風を愛し、儒士經世の空談を喜ばず、九世十世、庸暗相踵ぎ、儒人益々用ゐられず、而して市井の學益々盛なり。白川樂翁の新政は、當時一息纔かに存せる士人の學を復興し、而して市井の學を禁壓せんとせる者、其の成就する所の績と、其の東西の輕重を爲せる所とは、前已に之を論ず、其の後五十年間、時に一昂一低あり、大御所時代に縱たれて、而して水越時代に擒

（欄外見出し）水府修史問道の故に非ず

（欄外見出し）八世以後

せらる、要するに寛政新政の餘波に過ぎざる也。

儒學は竟に戲玩に適せず

夫れ市井の學、彼れが如く其れ盛に、以て實力賈人に存する時勢に順應すと雖も、儒學の以て賈人の戲玩に供するに便ならざるは、竟に易ふべからず、故に修辭、考據、以て玩弄學術の漸やく盛なるを致せるも、儒士の議、士庶の別を泯滅するを得る者あらず、而して其の經世の志ある者は、毎にかの市井の學を抑へて、之を士人以上に局らんと欲するの勢あること、白川氏、水越氏等の若し。武治の政を革めて、王政の古に復するの日、其の一革變以往、士族の勢力大に衰颯に就き、賈人の跋扈益々甚しきを見るを以てすら、かの革變の功は、則ち儒籍國學に養はれし最下級の士に成りて、竟に賈人の手に成らざりき。故に市井の學は、經世を主とせる儒學とは、其の盛衰の勢、毎に相反す、天下苟くも事あれば、則ち市井玩物の學熸す、而して無事恬安の日、賈人が其の利權を占めて富盛を極むるに當りては、其の戲玩に供する所以、固より儒學が派生せる修辭考據を以て足れりとすること能はず。國學ありと雖も、其の神道者流は、儒の守道經世の徒の類なり、其の詠歌

國學も亦儒學の類

者流は、儒の文辭派の類なり、其の有職徵古の學は、儒の攷據派の類なり。賈人は上流と

異なり、禮法檢束に堪ふる能はず、而して其の富盛は則ち益々其の淫靡の嗜好を長じ、以て之に應ずる所以の者、必ず新たに生ぜざる能はざるを致す、狹邪遊倡、劇部歌曲の盛なる、奢華輕薄、淫奔情死の行はるゝ、斯に戲曲脚本、稗官小說の作出でゝ、以て之を寫すなかるべからず。故に三百年の文學、上行する者あり、儒學、國學の若き是なり、下行する者あり、戲作の若き是なり、上下に通ずる者あり、美術、工藝の若き是なり、而して宗敎は之を前代に視るに、極めて力なきの時とすと雖も、其の世運と相關係する者、亦度外に付すべからず。

上行の學　下行の學

夫れ上行する者は、立制を以て主と爲し、而して世運の趨く所に放任することを欲せず、若し此を以て順勢と爲さば、則ち下行する者は專ら世態人情、自然の趨勢に率ひ、動もすれば立制の旨と相撞突するは、以て逆勢と爲すべき歟、而して上下に通ずる者は、亦かの順逆の勢と相感じて、各々時に變移あり、此の數者を備論するに非ざれば、三百年文運、未だ其の全觀を盡すと謂ふべからざる也。

順勢逆勢

今已に略ぼ其の上行する者を論次す、當に次で而して論ずべきは、其れ下行する者か、其れ上下に通ずる者か、嘗て試みに論じて曰へらく、

蓋し德川氏の府を江戶に開きしより、凡そ百餘年、元祿寶永正德の間に至るまでは、覇都の繁華、猶京都浪華に過ぐる能はず、其の文化の若きも、東に在て林家一門、學柄を獨占せるの日、西には則ち山崎伊藤諸人、盛に門戶を張り、彬々として多士なりき、水戶府、加賀氏が人材を收納せしが若きは、特に人作に出でゝ、自然に非ざる者あり、國學に於ては、隱家茂睡、覺束なき古調を口吟み、季吟湖春父子、召されて東下するの際、長流契沖、既に復古の氣焰を西に揚げたり、其の庶民に流通する者に至ては、更に甚しき者あり、西鶴、巢林、之を浪華に創め、自笑、其磧、之を京都に繼ぐに當りて、東都は僅かに岡淸兵衞の金平物語、近藤淸春の赤本を生出せしに過ぎざりき。然るに儒學は享保以後、國學は寶曆以後、庶民文學は明和安永以後に至り、江府の繁華、方さに成熟せるの期と相先後して、文物盡く東に徙り、天明寬政文化文政の際に於て、其の燦爛たる偉觀を極めたり。是時に當り、天下方さに江戶を以て風尙の標準とし、輕靡なる文學の潮流、華奢なる習俗の嗜好は、一に範を江戶に取り、留守居の豪奢、札差の侈靡、始めに芙蕖社、後に江湖社の詩文、京傳、一九、馬琴、種

彥の戲作、一代の嚮ふ所は、實に此等に在り、列藩士庶、大都の風尚に倣ふに後るゝを耻とし、讀書の士、江戶に學ばざれば、以て文士に齒列するを得ず、僅かに京阪の儒士と、崎嶼傍近の學者と、稍々其の下風に趨らざるありしのみ。

又嘗て書を論ずる中に言ふことあり、

此論具に附錄に出す

德川氏の文物は岐して兩派と爲り、一は上行し、一は下行す、下行する者は、淨瑠璃、歌舞伎、洒落本、草双紙、讀本と爲り、上行する者は、儒學の流行、國學の復興となり、俳諧、狂歌は上下の間に出入す、畫風の變遷を觀るに、又其の跡を同じうする者あり、又兵衛、一蝶、師宣、祐信等は、其の下行の運に應じ、土佐狩野の筆より出て、而して題目を當代の風俗に取る、是れ已に一變態に屬す、沈銓伊海等の諸家、大雅蕪村等の雅人、其の上行の運に乘じ、南畫の風格を傳へて、新たに海外の趣味を插す、光悅、宗達、光琳等は別格を創意して、更に一轍を建てたり、而して大勢遂に圓山氏に定まれり。是れ猶ほ土佐氏が中世の畫柄を握りしがごとく、爾來百年、百家並び興ると雖も、能く與に盛を競ふことなし。亦實に德川氏文物が寶曆より以て寬政に至る

の際に於て一變し、蘐園修辭は、八家宋詩と爲り、縣居の古調は、桂園の新派と爲り、淨瑠璃八文字屋本は、洒落本、草艸紙と爲り、荒事丹前は、所作事世話物と爲り、上佐江戸節は豐後節と爲るの時會に膺り、應擧氏卓出の材を以て、寫生の新派を開き、當時の耳目を一洗せしの功なり。

是れ實に語て未だ詳ならず、反て人の視聽を惑はす者あらん、請ふ異日更に此論を續で而して其大綱を提擧するを待たんか。

附録

地勢臆説

地勢と人文

地勢の人文と相關るや、或は地勢因たり、而して人文果たり、或は人文因たり、而して地勢果たり、小にしては都邑の盛衰を致し、大にしては邦國の興廢を致す、民物の豐嗇、文化の隆汚、其の往に徴して而して其の來を推すに、龜卜數計よりも著き者ある也。

本邦の地勢と人文

神武の都を大和に奠め給ふや、路内海に緣る、其後版圖、西は則ち遠く韓地に跨るに至りて、舟船往來年々絶えず、文化の輸入、以て近畿の風氣漸やく開くるを致す、東は即ち經略已に奧越に及ぶも、重山層嶺、東漸の文化を梗し、平城の文物、蔚乎として其れ盛なるに至りて、王化猶ほ未だ邊陲に洽きこと能はざりき、蓋し此際以て風氣遷移の關鍵とする歟、西は已に内附の韓地を棄て、而して内漸くに成熟に向ふの文明を以て、唐土の輸來、又歳

月新を加ふ、近畿掌大の地、以て之を受容するに足らず、是に於て文化、威力と俱に漸やくにして東に流溢す。阪將軍邊功を建てゝ後、夷種の叛亂、一たび之を元慶の際に見ると雖も、小野春風に秦王郭令公の威望あるにあらずして、單騎賊巢に投じ、以て之を定むるに足る、王化の光被、勢已に成れるを見るべし。然れども東徼の領土、已に京を距ること二千里に及び、而して西は則ち筑紫を極めて其半に過ぎず、尾大不振の勢も亦此より萌す。故に西海海賊の患を絕たざるも、隨て起れば隨て滅し、剿誅毎々旦夕にして辨ず、東國は則ち天慶の將門、已に天下を擾動するに足り、其の敗るゝも亦下野押領使の手に斃れて、征東將軍の誅に死せず、前九年の戰、淸原氏の援あらずんば、源將軍父子を以てするも、之を奈何ともすること無からんとせし也、武衞家衞何物ぞ、能く八幡太郞を支へて三年たることを得。但だ奧羽美地と雖も、其の太だ僻在するを以て、亦關西を控制するに足らざるは、平泉の繁華をして、徒らに衣川と共に水逝せしめし所以、其れ唯關東か、地形雄偉、覇圖を建つるに足る、保元平治の亂を經て、平安の王氣、頓に衰颯を致し、而して鎌倉山の雄風、海內草の如く偃せる所以なり。畿內は帝王の居する所たるを以て、往々、猶群瞻

視の繫ふ所たりと雖も、北條陪臣を以て源氏の故地に據り、源氏の故業を承くる、室町氏の關東を得て興り、關東を失て衰ふる、德川氏の江戸三百年の昌業を致せる、毎々東強うして西弱きは、大局已に定まる、小田原氏の獨り豐公に滅さるゝは、人物の懸絶と、創業守成の勢を異にするとに由るのみ。江戸の中葉よりして、京阪の人文、盡く關東に移り、以て明治維新に及て、北方の經略、更に宏謨を增し、而して神器遂に關東に負まれり。

此理を以て之を坤輿大勢の遷移に視るに、之くとして當らざるなし、儒者鹽谷世弘嘗て地氣の說あり、論空疎に近きも、亦旁觸を得る者也。是より先清人趙翼、已に其の國勢に視て地氣の變を論ず、曰く

趙翼が地氣說

地氣之盛衰。久則必變。唐開元天寶間。地氣自西北轉東北之大變局也。秦中自古爲帝王州。周秦西漢遞都之。苻秦姚秦西魏後周。相間割據。隋文帝遷都於龍首山下。距故城僅二十餘里。仍秦地也。自是混一天下。成大一統。唐因之。至開元天寶。而長安之盛極矣。盛極必變。理固然也。是時地氣將自西趨東北。故突生安史。以兆其端。自後河朔三鎭。名雖屬唐。僅同化外羈縻。不復能臂指

相使。蓋東北之氣將興。西方之氣。已不能包擧而收攝之也。東北之氣始興而未盛。故雖不爲西所制。尚不能制西。西之氣漸衰而未竭。故雖不能制東北。尚不爲東北所制。而無如氣已日薄一日。帝居遂不能安。於是元宗避祿山。有成都之行。代宗避吐蕃。有陝州之行。德宗避涇師。有奉天梁洋之行。地之氣[illegible]不安。知氣之消耗漸散。迨僖宗走成都。再走興元。走鳳翔。昭宗走莎城。走華州。又被劫於鳳翔。被遷於洛。而長安自此夷爲郡縣矣。當長安夷爲郡縣之時。契丹安巴堅已起于遼。此正地氣自西趨東北之眞消息。特以氣雖東北趨。而尚未盡結。故僅有幽薊。而不能統一中原。而氣之東北趨者。則有洛陽汴梁。爲之遞遭潛引。如堪輿家所謂過峽者。至一二百年。而東北之氣積而益固。於是金源遂有天下之半。元明遂有天下之全。至我朝。不惟有天下之全。且又擴西北塞外數萬里。皆控制于東北。此王氣全結于東北之明證也。而抑知轉移關鍵。乃在開元天寶時哉。

頗る斬新の論と爲す、鹽谷豈に此に淵源して而して之を坤輿に推せるか、今や支那存亡、

將さに坤輿一大問題たらんとす、而して其の地勢の利用、實に之をして存せしめ、之をして亡せしむるに足る、趙氏の言、現勢に拘はりて未だ盡さゞる者あれば、則ち更に其の案を覆して、來日の形勢を推想す、是れ亦文明の大勢に着眼する者の必ず無用とせざる所也、

趙氏の言未だ盡さず

趙氏獨り長安を論じ、而して長安の前、又洛あるを說かず、禹貢九州、其の開化の源泉、冀豫兩州の間より發す、蓋し黄河の利に資ると云ふ。堯平陽に都し、舜蒲阪に都し、禹安邑に都す、皆冀州の地、殷亳に都す、豫州の地なり、水患を避けて、相に遷り、耿に遷り、亳に復歸す、要するに二州を出でず、周は西鄙鎬に興ると雖も、其天下の中たるを以て洛に營み、諸侯を朝會す、二州の生ずる所文物、郁々乎として大成を告げたり、後世稱して四戰の地、德あれば興り易く、德を失へば亡び易しと謂ふ、亦地勢の中たるのみならず、併せて人文の中たればなり。春秋の時に及んで、齊魯の文物、永く澤を後昆に流すと雖も、是れ寧ろ風化晚く開けて、周道を保存せるが爲のみ、其の巧詐早く進める者は、則ち晉の地を最とす、五伯の最も長く其の業を保てる者も、亦晉なり、戰國の際、縱横の策を抱き、諸雄の間に談說して、人國の興衰を脣舌に弄せし者、皆衞晉の士たり、齊魯は則ち淳于の

長安の前洛あり

滑稽、孟軻の仁義、魯連の解紛、猶ほ忠孝の俗を存す。蓋し此時にして二州の地氣索き、人力衰へたり、西漢の際、潁川南陽、人材輩出し、東漢魏晋、再び此に都すと雖も、猶ほ我が王室中ごろ衰へて後、室町氏復た平安に居り、豐臣氏大阪に城くが若きのみ、其の繁華は以て貨利通貫の要衢たるべきも、復た天下を控制するの根據たる能はず、拓跋魏復た此に居り、宋の汴に都するが若き、豈に更に言ふに足らんや。

長安の地氣洛に代りて興る

長安の地氣は、則ち洛陽に代りて、雍州の人力を興す者たり、其の西周以來、以て唐に及び、極盛の運に達せしは、趙氏言ふ所の如し、李世民實に隴西に起る、其の土着の族たること、始めの姬氏と同じき也。趙氏は唐末衰殘、以て其の王氣此に歇むと爲せども、趙宋の起るや、藝祖實に長安に都して形勝に據るに志あり、太宗の諫に因り、明らかに後患を知りて而かも汴に都せり、此時長安の地氣、未だ全く索きたりと謂ふべからざる也。其の燕京の若きは、趙氏以て東北の氣積で而して生ずる所と爲せども、是れ特に地勢然る者あり、其人文に至りては、未だ然る能はざる也。夫れ燕京の建つは遼に始まり、而して金、元、明、淸、皆此に都す、然るに明の顧祖禹は則ち言ふあり、

燕京は人文の中に非ず

顧祖禹が燕京論

遼起于臨潢。南有燕雲。常慮中原之復取之也。故舉國以爭之。置南京于燕。西京於大同。以爲久假不歸之計。女直自會寧而西擴有中夏。仍遼之舊。建爲都邑。內固根本。外臨河濟。亦其所也。蒙古自和林而南混一區宇。其創起之地。僻在西北。而仍都燕京者。蓋以開平近在漠南。而幽燕與開平形援相屬。居表裏之間。爲維繫之勢。由西北而臨東南。燕京其都會矣。

朱明の此に居するは、燕棣位を簒ふの後に於てし、太祖の舊に非す、顧氏の若きは其の失計たるを論じ、

以燕都僻處一隅。關塞之防。日不暇給。卒旅奔命。輓輸懸遠。脫外潰肩背之虞。內啓門庭之寇。左支右吾。倉皇四顧。下尺一之符。徵兵於四方。恐救未至而國先亡也。撤關門之勢。以爲內援之師。又恐軍未離而險先失也。

と曰ふに至る、故に所謂東北の氣積むと云ふ者、若しかの權力の托する所、形勝を言はゞ則ち可なり、若し其の人文を以てすれば則ち嚮往集中する所、別に在る有る也。

江南の地氣

明祖の起るや、馮國用策を獻じて曰く、金陵は龍蟠虎踞、帝王の都なり、先づ鼎を此に

定めんと、江南の地氣蔚興、一日の故に非ざる也、周の時楚子最も先に王を僭す、郢の地の文物、戰國の時、優に上國に抗衡す、學は則ち老莊、辭は則ち屈宋、其の呉に敗るゝ者、猶ほ晉地の秦に侵さるゝがごとし、洛陽の文化、長安を援て而して之を起すを知らば、以て呉の風氣、楚に由りて而して開くるを知るべし、伍員が怨を本國に報ずる、實に楚人を以て而して呉國を用ゐたり、衞鞅、張儀の徒、西の方秦の用を爲すも、情相似る也、顧氏曰く、越の故微せば、呉且さに天下に覇たらんとすと。項羽江東の子弟を率ゐて、而して中原に雄長し、虎狼の秦を亡す、山東の豪傑、能く與に先たるなし、呉楚雖に首として、西漢殆ど危く、三國に及では、三分の天下、呉長江を劃して、中原の外に一帝國を建てたり、其の都は建康、是れ實に六朝の繁華を極盡せし所の處。此時に當りて、神州陸沈、胡馬に蹂躪せられ、三代漢魏の文物、盡く遷りて而して南に歸す、故に隋唐以後、帝都此に在らずと雖も、其の人文未だ甞て少しくも衰へず、建炎南渡、又唐宋の文物を將來して、化澤浸潤、愈々深厚を致し、以て明氏の起るに及て、擇で而して此に都せしむるに至れる也、成祖北遷の後、猶ほ南京の官職を置き、改めて郡縣と爲さず、王氣の結集する所日に

固きを見はす所以に非ざらんや。呉楚の方言、古より已に雅音に異なり、僅に今日南北官話の差あるのみならず、其の人種相好も亦復同じからず、遂に禪家儒家をして南北の派別あらしめ、閩姚の學をして漢唐訓詁と趣向を異にせしむるを致す、平原千里、長江の天塹あり、興衰の運を遮ぎる能はず、故に屢々分れて而して屢々合すと雖も、大勢の趨く所、遂に支ふべからず、江浙四近、方に天下文物の中と爲りて、狀元進士、風流詞客、常に此間に出て、陝西河南、寥々として聞ゆるなく、乃ち近時の若き直隸の地に貫つる將相、盡く呉楚徐淮の材なり、太平王か十數省の地を擾りや、亦金陵に據有すること十餘年、偶然に非ざる耳、計東が籌南論に曰く、

計東が籌南論

兵以衞民、而川浙呉楚之兵、爲天下勁兵、虜食以養兵、而東南財賦、自唐宋以來、無不倍出於西北、昔項籍以江東子弟、横行而西、李陵以荊楚勁卒、轉鬪塞北、及我明戚繼光必須以義烏三千人、立威薊鎭、四川石柱司秦良玉以一婦人、將三千人、斬敵兵萬餘、則南兵之强可知也、東南財賦之稱、見諸各史者自唐肅宗始、至汴梁而三倍其數、至南宋而加增數十倍、

章潢が南北强弱論

章潢が南北强弱を總論するや、亦言ふあり、西北の兵、持久に便にして速戰に便ならず、東南の兵、亟かに戰ふに利にして、持久に利ならず、張良賈充鄧艾の徒、皆南兵剽鋭の言あり、而して北の勝を制する守成不戰の功を以てする者、蓋し其鋒を畏れて而して敢て爭ふこと莫き也。古より惟だ北人の南を畏るゝを聞く、未だ南人の北を憚かるを聞かずと。

顧氏が揚州形勝論

顧祖禹曰く、

揚州富庶。常甲天下。自唐及五季。稱爲揚一益二。今魚鹽穀粟布帛絲枲之饒。商賈百工技藝之衆。及陂塘隄堰畊屯種植之宜。于古未有改也。用以聚糧糗。厚資儲。則奔走天下。不患無其資。

且つ夫れ北直の地瘠薄、其の民の食、東南の轉輸に須たざれば、則ち給足することを得ず、故に計東、明祖北伐の略を論じて云ふ、

既據金陵十六年。截淮而取之。則東南之財賦。分毫不得入北。而元人坐困。故一旦北討。而有取無戰。

見るべし、趙氏が現局に拘はりて、東南を略して、而して東北王氣の積聚を説く、殊に皮

滿洲の將來

相見たることを。但だ滿洲の地、頗る膏腴と稱す。其の百年の後、地力の開發、未だ必ずしも期し難からず、則ち燕京が此の新興の土を負て南に俯すや、王氣の旺盛、此に於て其の實を得、以て南方の文物に頡頏するに至るも亦未だ知るべからず。然れども滿洲の河水、其の大なる者は、南に背て而して北に漑ふ、其の地力人文、果して燕京に集中すると否と、猶ほ鐵路交通の後を待て之を論ぜざるべからざる者あり、且つ其の風化漸やくに開け、地氣益々東北に傾かば、燕京の力、以て南方を控制すべからざるや益疑しからん、

支那勢力の兩分

支那の勢力其れ竟に兩分せんか。

地氣の東偏

抑も是れ特に浩海の地を以て之を言ふのみ、中世以來、地氣漸やくにして東偏し、南北京皆海に逼近す、其の勢極まるや、亦竟に兩方を制するの力、強弩の末たるを免かれざるに至らん、顧祖禹は固より燕京帝都の非を主とする者、而かも其の金陵を論ずる亦云ふ、東南に局促して中に宅し大を圖るの業に非ずと、三國の時、吳の力蜀を役すること能はざる、豈に此に由らずや。

蜀地の形勝

夫の蜀の地も亦輕視すべからざる者あり、地理を志す者謂ふ、重山疊嶺、深溪大川、境内を環繞し、自から相藩籬し、古より險塞と稱す、周鐘以て數千里石穴

なりと爲す。故に云く蜀民外寇を苦まず、然るに姦雄内に作れば、懸車束馬、勢相及ばず、猝かに定め難き者あり、是れ適に其の重險たる所以なりと、西漢の時、相如子雲以下已に人文の觀るべきあり、陳壽、子昂、眉山の蘇、皆中原を動かせり、王莽の末、公孫述此に據りて一方に雄視す、諸葛又此に據りて炎漢の祚を延べたり、天下亂るゝ毎に、僭僞の主必ず起る、晉の惠帝以後李特此に據り、義熙の初、譙縱の據る所と爲り、唐末には王建あり、既にして又孟知祥あり、元末には明玉珍あり、其の太だ僻在するを以て中原一統すれば、輙ち幷呑せらるゝを免かれずと雖も、地氣太だ東偏すること、今日の勢の若きに及では蜀中復た之が控制を受けざるに至らんこと必せり、況んや錦官城の繁華は、巨曡金縷、技作工巧、而して中原の兵亂に罹ること少く、別に一區を爲すに於てをや。意ふに諸葛の益州を治するや、瘴癘を侵して南中を夷らぐ、若し四川の饒沃、連ぬるに黔滇の險固を以てし、而して之を濱海の地に通せば、蓋し亦居然たる一帝王國なり、清初三藩の叛く、吳三桂の老悖を以てするも、猶ほ雲南の地を以て、天下を擾動するに足る、西南の地氣、亦決して侮るべからず、佛人の染顧、豈に以なしとせんや。

兩廣の形勝

更に一區あり、兩廣是れなり。嶺南の地、風氣最も早く開く、而かも其の西洋と交通するや、其の文化に感染すること最も早し、其の人怜利、交易に巧に、支那人中に在りて別に一生面を開く者、地理家廣東を謂ふ、地嶺海に介し、北は以て吳楚に臨むに足り、東は以て甌閩を制すべく、西交邕の咽吭を扼し、南黎夷の門戸を控ふ、廣州一都、乾として中樞たり、山川綿邈、環拱千里、都會と爲すに足ると、故に昔は偏隅たり、今は樂土たり、其の廣西は則ち風壤氣習、廣東と異なり、猺獞多くして、而して編氓少し、要するに猜倔促を免かれざるも、其の山海の利、土産の饒、香貨の聚、亦中原に背て而して自ら治むるに足る者あり、而して今は即ち英人實に其の咽吭を扼せり。若し夫れ陝西より西北、東漢の地、長安すら既に其の盛を復すべからざれば、其の王氣の興隆、今日の論するを要せざる所たる也。

嗚呼支那の存亡、方さに坤輿の一大問題たれば、則ち其分合の形勢、地力人文の中たる處所、往に徵し來を推して、之を今日に概論し、以て文明の大勢轉移の方嚮を攷ふるは、必ずしも沒趣味の事にあらざるを知る、願はくば更に同好の士と之を詳論せん。（明治二十

七年十一月稿、二十九年十二月訂正）

日本の天職と學者

日本が將さに大に命ぜらるゝ所あらんとするや、識者久しく之を審かにす。

夫れ神聖業を創め統を垂る、宏猷深謨、妄漫臆測を逞しうすべからざるのみ。西蕃交通の事、史に見えしより茲に二千年、神功征韓の後、未だ百年に滿たず、王仁「論語」「千字文」を獻じてより、十有三年のみ、而して已に高麗の表文を毀つの稚郞子あり、而して後三百年、乃ち一海島の主を以て、三百年亂離の日沒處を統一して、意滿ち心驕れる隋煬に書を贈り、抗禮相下らざるの厩戸皇子あり、其の選に係る憲法、文字整然見るべく、冠位の階、典禮の基を啓けり、而して後五十年、弘文始めて詩詞の作あり、是よりして詩は即ち「懷風藻」「經國」「凌雲」諸集の載する所、漢魏の遺響あり、文は則ち諸々詔勅願の文、太安萬侶が「古事記」序等、駢體の妙域に臻る者あり。既に學んで而して異邦の辭に

我邦文物の變遷

媚ふ、豈に其國語を以て自ら述ろ能はざらんや、是故に「萬葉」の歌たろ、祝詞宣命の文たる、以て三百篇尚書と光を爭ふべし。平安の初、中興の英主、又盛に唐の文物に資り、文儒輩出し、而して其の延喜以後は則ち守文の世、八代集の歌、物語草紙の文、國語の英華を揚げたり。此時に當り、疆域大に東北に拓けて、而して化澤漸く京畿に竭きんとす、是に於て鎌倉府の勃興、乃ち「金槐」の雄風を生ず。其後干戈相踵き、文運中ごろ絶すと雖も、割據の末や、又群雄競うて文藝の僧徒を延き、慶元偃武の後に至りては、覇府頗る右文の圖に傾きしより、列藩規倣、唯だ後れんことを之れ恐れ、儒師の聘請、一種流行の觀あり、其の中葉以後は、獨立の識力ある者、往々門戸を張りて仕進を求めず、以て所謂「海内文章落布衣」を致し、國語國學の復興、又之が爲めに激せられ、國家性格の發揮、頗る爲めに面目を一新し、かの小說戯曲の流布の如きは、文字ありしより來た、久しく上流に沈滯せし文學をして、一般社會に浹洽せしめたり。蓋し王代の隆治は、唐の文物を受けて、而して之を融化し、江戸の盛世は、宋明の學術を傳へて、而して之を合叫し、皆因て以て國家特色の文華を振起し、各其美觀を極めたり。其敎義の世道人心を綱紀する者、

王代と江戸

王代は則ち佛教ありて、傳來十宗の外、法然の專修念佛、日蓮の題目、新たに機軸を出し、江都は則ち儒學ありて、尊王攘夷の論、忠孝仁義の談、自ら王政中興の基を成し、其の美術の國民の品位を崇うする者、寧樂の彫像、印度に非ず、希臘に非ず、隋唐に非ず、清秀溫雅、別に所長を見し、巨勢氏、土佐氏の唐畫を變じ、狩野氏、雲谷氏の宋元畫を承くる、光琳氏、圓山氏の新手法を開ける、髹漆の東山に盛んに、陶磁の德川に進める、乃ち伎樂雅樂の隋唐の舊を存して、寧樂平安の間、金聲して而して之を玉振せる、平話謠曲の足利氏に出でゝ、小唄淨瑠璃の德川氏に發達せるに至るまで、衆伎雜流、凡そ所謂開明せる社會の當さに有るべき所、殆んど有らざることなし。

文明國家の興衰

かの國家社會替る〴〵興り交々衰ふるの跡を觀るに、其の獉狉蒙昧の世よりして、一たび進んで文化開明の域に入るや、則衰兆此に萌し、漸くに澌滅に就かざることなし。希臘のペリクレスの時に盛なる、後に歷山王ありと曰ふと雖も、固より純正の希臘人に非ず、其の事業又攻伐に止まる、羅馬の神聖帝國一たび破壞して、意太利の人力、復た歐洲文明の中心たるに足らず、阿輸迦王佛教の保護者たりし後、印度再び轉輪王を出さず、自隋、

墨西哥の如きは、其の生熟盛衰、自ら一地疆に在りて一元を終始して、全く壞空に歸せり。乃ち支那に至りても、三代の兩漢と唐宋明清と、文化一たび斷えて而して再び盛んに、三たび興るに似たりと雖も、河洛の開化は關中の文明にあらず、江北の休治は江南の人文にあらず、代る〳〵相推移して、必ずしも復た興らざる也。唯だ江南の人文、久うして益隆に、治者世を更ふるも、曾て之と盛衰せず、意ふに其れ民種の潜勢力厚き者、一再文明の域を經て而して發揮し了せざる也。かの歐洲の如きは、其文明の域に入りしより四五百年のみ、其成就する所を以て、之を古來有る所文明諸邦に較視するに、固より大に誇るに足るものあり、然りと雖も地勢時運、天幸の存するあり、未だ此を以て其潜勢力の厚薄を定むべからず、若し近時其の盛運既に窮まり、弊患既に萌し、復た支持し難きに至りては、彼の間の明者、自ら之を見る者あり、其素藉に竟らんこと蓋し遠くもなし。松柏凋むに後る、國家社會も亦潜勢力最も厚き者最も後に存す、現在の支那、帝系は瀋陽の胡種に出づと雖も、其實權は多く江岸人に歸す、歐人が來日に於て支那人の勃興に寒心する者、故なしとせず。

江南の人文

二千年再び文化を闕せし民族

江南人の來日に興起せんこと、無稽の想像に非ずとせば、かの二千年、二たび至盛の文化を闕して、後者は寧ろ前者より美に、而して其人力綽々然として餘裕ある民族、是の如きは尤も當さに國家壽數に於て春秋鼎盛の域に在る者と謂ふべからざらんや。

稚弱民族

牛馬は鼠𪊳を餌せず、獅虎は荳蔻を茹はず、人は之を兼ぬと雖も、猶素食を愛する者は、脂多きの物を取れば必ず嘔し、肉食を好む者、單に菜蔬を供せらるれば必ず癰す、唯だ脾胃強壯にして消化力盛なる者、此を取り彼を茹ひ、未だ甞て其の體を傷らざるなり、然れども是れ特に少壯にして嗜好未だ定まらざるの際のみ、老境一たび至れば、則嗜好偏に定まり、或は其の以て元氣を損すべきものにして、或は其の以て滋養に資くべきものにして、而して竟に取ることを欲せず、漸く衰殺に之て、克く之を支ふることなし。國家社會も亦之に類する者あり、其最も稚弱にして單純なるものに至りては、一たび之に壯強者の食を與ふれば、則ち食傷す、布哇が白人と交通してより僅かに數十年にして、其生口を減ずること十の八九なる、北海道アイヌ人が方さに漸く滅盡に赴くが若き、皆是れ。蓋し社交の複雜、思慮の紛錯、壯強國民の容與として處する所、稚弱

民種堪へざるなり、疾疫の劇、魔醉劑喫飲の毒、壯强國民の慣れて而して中てられざる者、稚弱民種堪へざるなり。乃ち壯强の國民と雖も、其性格の宜しき所、各相同じからざれば則ち近日歐土諸國、鳧脛鶴脛、長短自ら守りて、相易ふること能はず、亦猶ほ希臘堂大の國にありて、雅典の華美、斯巴爾達の健朴、風尚相反し、晏嬰が魯人儒雅の習、齊國倹嗇の風を變ぜんことを恐れて、孔子を拒むが如き者あり。且つ其の全土風氣、漸やく叔季に屬し、其の自ら成就せる物質的文明に矜夸するの餘、其異種の文明に於て、概して斥けて未開の習となし、取りて之を咀嚼することと少なく、偶々取ることとあれば、則ち亦其澆漓の思想に近似せる古印度の思想の若きに過ぎず、其の老境將さに至らんとして、嗜好の偏傾日に甚しきの狀見るべし。かの支那の自尊にして頑固なる如きに、特に歐土と度に於て差あるのみ、性異なるに非ざる也。夫我邦に至りては、唐と西域との開化を咀嚼して、王代の盛あり、宋明の開化を咀嚼して、江都の盛あり、而して味興未だ減せず、江戸の中葉よりして、密障蔽の隙、纔かに歐土の珍膳を窺うて、早く已に垂涎の思あり、一旦禁弛むや、大に饕餮を縱にし、而かも其食傷の患あらんとするに際して、又國粹主義の論ありて、節

民族の特長相易ふる能はず

支那と歐土と度異なる耳

我邦文明の消化力

制滋養の度を過らしめず、彼れ將さに其消化力を節用して、歐土有る所精汁、噏收して盡さんとす、脾胃の强壯斯の如く、曾て老衰の態なし、其の體力行々將さに軀殼の外に溢れんとすれば、則ち將た何くにか之を洩さん。

人道文明の大任時を以て命ぜらる

將さに重きを負はしめんとすれば、則ち牛を命ず、將さに疾きを爭はんとすれば、則ち馬を命ず、鼎を扛ぐる烏獲に須つことあり、禽を射る養由基に須つことあり、かの人道と文明とを生民に光被せしむる、豈に健强國民に須つこと莫からんや。人道の文明と、生民以て一日も離るべからず、故にかの國民に命ずること、世々にして其任に堪ふる者を選て而して之に命ぜざるなし。天の歴數爾の躬にあり、允に其の中を執れとは、堯の以て舜に命じ、舜の以て禹に命ずる所、亦未だ甞てかの大命に愼しむ所以に非ずんばあらず、然れども其の誤りて予一人の事と爲すや、則ち放伐の不德を犯すを免れず。夫れ河洛の澤盡きて、而して關內の化盛んに、北方の文物枯れて、而して南方の人文榮ふ、亦時を以て而して命ぜらるゝ所あるなり、埃及、亞西利亞、印度、波斯、菲尼斯亞、希臘、羅馬、相踵で遞に起る、亦各時を以て而して命ぜらる。彼れ皆其の時に於て、人道と文明との宣布に最

もカあるべき者、而して又其の跡に於て、各克く其任を盡せる者あるを見る。文明の中心、時と移動する所以の者、其由此に存す、今又將さに大に移らんとす、識者は實に久しく此の間の肯綮を了知して、我の將さに大に命ぜらるゝ所あらんとするを審にする也。

文明中心前後の因習

殷は夏の禮に因り、周は殷の禮に因り、而して損益する所あり、夷狄殘暴の侵襲を被るにあらざるよりは、大抵後に出る者漸くにして整美に趨く、故に周は二代に鑑みて、郁々乎として文なることを得、三代の所謂禮は、後世の制度法令に同じ。唐の制度は隋に因り、又實に宇文周に原す、其の祖孝孫が雅樂を定むるや、梁陳の音は吳楚多く、周齊の音は胡夷多きを以て、古聲を考へて唐の雅樂を作ると云ふ、亦因習する所あるを見る也、希臘哲學の祖は多く埃及、菲尼斯亞の間に學び、羅馬の學者、制法家、概ね希臘に遊學す、唐の文明は、半ば西域、印度の傳來に係る、南北の際よりして、渡天の僧、西來の僧、項背相望む者、以て之を致すこと有るなり。此を以て之を觀るに、文明中心の移動するや、後の

特色得失相代る

中心、必ず前の中心に因ることあり、而して損益する所あり、前者の特色或は失ふは、後者の特色の新たに之に代る所以、而して各其時に宜しうす、以て人道と文明との系統を萬

學者の任

世に維持す。譬へば猶ほ商那和修が龍奮迅定、優婆毱多が曉了すること能はざる所、如來の三昧は諸の辟支佛其名を識らず、緣覺の三昧、一切聲聞、解了すること能はず、大目犍連、舍利弗等所入の三昧、其の餘の羅漢測度すること能はずといふがごとく、前聖後聖、其の揆を一にせずと雖も、其の各極致を成就するは則ち同じ。前の文明の中心が成就する所、後の文明の中心が成就する所にあらずと雖も、其の自然の神秘を發して、人道と文明とに裨益するあるは則ち同じ、或は禮文を以てす、周の若し、或は幻技を以てす、印度の若し、或は哲學美術を以てす、希臘の若し、或は法律を以てす、羅馬の如し、而して其の前後文明の中心を鏈繫する者は、則ち學術の士、古を稽へ今を揆り、以て新思想を創するに須つことある也。

世人の大學に對する希望

西洋學術の輸入せられしより二十餘年、世人旣に往々我が大學に望むに、徒らに彼に傳ふる所、生吞活剝、以て之を轉傳するに止まらずして、其の新理論を發揮し、新學說を創立し、以て東方學術の特色を表見すべきを以てす、其の彼の地に留學せるより歸り、未だ十年を經ず、而して其の年齡皆五十に滿たざる博士を捉て、便ち强ふるに刱新の學說を以

在野學者の發奮

我の成就すべき極致

てするは、酷なるに似たりと雖も、國民の情既に新文明の創立を翹企するを見るべく、古より民の聲に畏るゝ所の者、國民の希望は毎に無作に出でゝ、之を克く遏むることなきを以てすれば、我が學術の早晩一新生面を開くに疑を容れざる所なり。且つ其在野學者の若きは、早く亞細亞大陸を探檢して、學術の新資料を蒐集するの已むべからざるを倡道し、其學理に於ても、奮て新説の創興を試みる者あり、其の意に謂らく、四海事無し、鷹揚らず、其の實力を以て、歐洲列國に示すべき者、武に由ることを得難ければ、則ち清平の臣民、以て國光を耀かすべき者、學術に若くはなしと。夫れ歐洲近代の文明は、誠に格物致知を以て特色とせり、然れども代りて而して文明の中心たる者、復た其の故路を履で、必ず理學に奮ふべきは、未だ知るべからざる所、或は我の極致を成就すべき者、決して此に在らじ。但だ前の文明を承て、之に超上せんとするの氣力は、一轉して特色の極致に至る所以、英邁卓絶の士一たび起らば、此の間の斡旋、擧手投足の勞のみなりと雖も、かの其の人の起るや、空しく其の生ずるを待つは、學者の本分に非ず、今の時に當りて、學術を專攻するの士、豈に徒爾にして已むべけんや。

天下一日事無きに安ずべからず、清平無事、力の以て伸ぶべきなしとせる者、數月の前、誰れか然らずと謂はん、而して今は則ち變意外に起り、難干戈に及ぶ、國民の意氣、勃然として颺擧、幾ど歐洲諸强國を藐視す、當局の人、其の謨を失らず、局を收むるに便宜を占めば、則ち我の威力日に以て伸暢、南は原田孫七郎、山田仁左衛門が經略せる地より、北は間宮林藏が跋渉せる處を極め、西豐公が指畫せし大陸に及ぶ、我が風化を光被せしめんこと、蓋し十數年内の事たらん。東方の新極致を成就し、以て歐洲に代興して、新たに坤輿文明の中心たらんこと、反掌の間に在らざらんや、而して網口、實力の以て歐洲に示すなく、已むを得ずして學術に奮ひ、聊か驕嫚なる白人をして一顧を我に垂れしめんとせるの太だ膽小なりしを自ら哂ふべき也。

時態の變

東方の新極致

學者と國運

且つ學者の國運に於ける關係、更に是より大なる者あり。夫れソクラテス、プラトあり、而して亞歴山あり、瞿曇（ゴータマ）あり、而して阿輸迦あり、ヴォルテーヤ、ルーソーあり、而してボナパルトあり、孔丘あり、而して嬴政劉徹あり、王通、智顗あり、而して李世民あり、プラトの弟子は、亞歴山の師たり、瞿曇の法は、阿輸迦の保護に弘まり、ヴォルテーヤ、

ルーソーの思想は、ボナパルト暴興の運を啓き、儒者荀卿の弟子秦氏を助けて、千古の變局を成し、儒者董仲舒漢氏の學術を大一統し、王通の門生、世民の股肱たり、玄齡、杜闇、慧能、皆智顗の風を開て起る者、學者の取れる天下なしと謂て之を輕すべからざる也、而して學者の與る、時運と相感ずるあること、孔子が儒師の職を離れて、儒家者流を立つる、齊桓晉文が流離の餘、天子を挾むに似、ソクラテス、プラトーの起る、實にペリクレスの政治に催さる、ヴォルテーヤ、ルーソーの前、リシエリユーの覇業あり、蘇綽の宇文氏を助くる、混一の芽既に抽く、釋迦の前後、轉輪聖王の當さに出づべきこと、久しく國民の信望する所たりし也。夫れ南には原田孫七郎、山田仁左衛門が經略の跡より、北には間宮林藏が跋渉せる地、西は豐太閤が指畫せる圖を幷せて、風化及ぼざるなし。此の如き時運、以て

文明中心の先聲

新文明中心の先聲たる大學者を感興するに足らずと謂ふか、吾れ今の學者が自ら強めずして其の本分を後生に推諉し、以て斯邦をして其の人道に盡すの天職を奉行するに於て、一日怠慢の咎を犯さしむることを恕する能はず。

（明治廿七年十一月稿）

畫道の一大疑問（上篇）

畫とは何ぞや

人類の技能、能く宇宙活動の玄機に契ふ者、是を美術と謂ふ、繪畫は其の一科に屬す。其の籍りて而して立つ所の物は、平面上に於ける形象と色彩となり、其の極致を成す所以の法は、筆墨傅彩の調和なり、其の興を托する所の題目は、山水花卉翎毛仙佛人物等なり。其の運用に至りては、或は筆に專らにして墨に略し、或は筆墨に假りて、傅彩を去り、或は筆墨傅彩並び備へ兼ね存す、其の題目に至りても、其の托せんと欲する所興趣、既に一なることを得ざれば、則ち其の寫す所も亦擇ぶ所あるを免かれず、苟くも其の玄機に契ひ、其の極致を得る。何れを取り何れを舍つるとしてか可ならざることとあらん。唯だ夫の技を

畫風畫派の岐分

操るの人、性稟に偏あり、而して遭ふ所の時、處る所の地、好尚同じからざれば、則ち畫風に今古の異あり、畫派に諸家の別あるは、理勢の自ら臻る、復何ぞ怪しむに足らんや、抑も彼の後れ出る者、縱に數千年既に存するの蹟を觀て、横に百家美を媲ふるの際に生る、

前人の蹊逕を趁へば、往々疑ふ所なきこと能はず、我より古を作れば、動もすれば、雅尙に入り難きを患ふ、徘徊彷徨として適從する所に迷ふ、蓋し當代の眼には、當代に在て既に喫し盡す、後世之に法らんとするも、殘肴冷炙、舌に上すに堪へず、斯人の美は、斯人に在て始めて發揮すべし、後世之に傚はんとするも、膏芬膸馥、人を飫かすに足らず、是れ作家の屢々筆を投じて其の安心立命の地を得かたきに苦しむ所、而して一代人心が屢々其時を代表するの美術なきに歎焉たる所以なり。

明治時代美術の厄運

夫れ明治の時は、實に開闢而還の一大變態に際會せる者、彼の往昔に在て、其の親しく相交通し、文物相影響せるは、止だ支那ありし者、今や四海比隣、其の國情風尙、最も相睽違せる西洋諸國、思想習俗、相浸潤せざることとなし、内には則ち七百年覇者の治、一旦古に復せるのみならず、新法創制、耳目を一變し、社會の綱紀、人心の秉彝、趨舍また明かならず、簡擇惑ふこととあり、更革の當時、美術が殆んど一大厄運に瀕せしを異しむことなき也。創業の勳臣は多く鄙嗇樸學の徒より出で、所謂實學儒敎と、乾古國學とを本にて、儉の野に陷いるを恤へずして、文の華に流るゝを力排す、故に美術の倫理と相關し、實用

と相渉る所以、又其の人生至靈の活動と相感發する所以に至りては、固より其の見の及ぶ所に非ず、又神佛甄別の論、廢佛毀釋の議、暴風急雨の樹を拔き陵に襄るが若く、寺院祠觀、千餘年間、美術の府庫、殘敗略ぼ盡く。然れども舊物の厄運に際せしは、獨り美術に止まらず、美術は則ち其の復興の最も早くして、而して一切文物復興の氣運に動機たりし者、是れ實に歐洲に在て、博覽會の賞鑑、始めて晦蒙の當路を醒せしに因り、美術に獨立の能力あるを感じ、其の灰燼を收めて、復た殘熠を吹くに至りし也。是に於て繪畫は實に其の首要の一科として、奬勵振作の道、頗る朝野の間に講究せられ、其の鑑賞批評の法、

一大疑問

新たに薦紳の徒に倡道せられ、而して一大疑問は亦隨て世人の口に發して、當家の前に揭げられたり。曰く今日の繪畫を如何すべきと。

疑問未だ釋けず

工部省が美術の生員を養て、西風の技術を傳へたるは、美術獨立思想の勃興と偕に熄みぬ、美術に關する諸協會の踵起、美術學校の設置、國風美術の氣焰再燃に力めざるなし、而してかの一大疑問に至りては、未だ渙然として氷釋すること能はざる也。一時美術の厄運に乘じ跋扈を俗間に極めたろ、一派麁笨の文人畫は屛息せり、而して土佐、狩野、南宗、

四條、容齋等諸派の畫家、日夜に其の技に精を研かざるなし、抑〻かの一大疑問に至りては、未だ其の解を至當の地に得ざる也。橋本雅邦の若き、百年來絶て無くして希に觀るの筆力たり、狩野氏の矩矱を奉じて、間々新意を出す、土佐、南宗の若きも往々名手あり、四條、容齋の若き、人々にして學び易く、而して其の群に抜くの能者に乏しからず、後進の此等諸派に趨き學ぶ者、林々として室に繁し、能く其の技能を振て、此の一大疑問に對ふる者、何人か果して是なる。豈に先輩の技を成すや、猶ほかの革新の前に在りて、未だ其の變態の移す所と爲らず、各々一隅より入りて、其の圖套を出づること能はず、後進の技を學ぶや、先づ氣運變態の動かす所となりて、心に一定の主なく、一隅より入ると雖も、門庭に彷徨して、堂奧に躋ること能はず、我より古を作り、而して能く新時代の雅尚に入り、新風格の極致を得ることは、或は心至りて而して手應ぜず、或は力任ふべくして、而して見足らず、俗間の好尚、之を前に濫り、妄庸の鑑賞、之を後に縛し、跅弛不羈の材、奔逸絶塵の能、因りて頭地を出す所なきに由るに非ずや。

先進後進兩から不可

前蹤の研覈

顧みて前蹤を鑒み、一生面を開き、一流派を成せる大家鉅匠か力を得る所以の者を察す

れば、其の苦心經營の蹟、以て我が前路を燭して、我より古を作るの道、何くより入るべきを覰破するに足る者あり、譬を取るは近きを貴ぶ、之を本朝の變遷に證せんか。上世の名家、指を巨勢氏に屈す、蓋し寧樂の美術は、粹を彫刻に鍾め、往々名畫ありと雖も、大に振ふに至らず、平安の初より、唐の文物沛然として流入し、繪畫も亦大に興る、其の傑作大筆、今に傳ふる者少しと雖も、意ふに其の唐賢に規摹して、自ら機軸を出すに及ばず、

巨勢土佐二氏

巨勢氏乃ち之を大成し、其の兒孫、土佐氏と相繼承して、修飾して之を潤色せり、是よりの後畫風一變、其の筆の眞細は疎逸となり、其の畫題は唐土の資料よりして本邦の景趣に移る、金岡、其の子公望、其の曾孫弘高と、飛鳥部常則等の若きは正に其の關鍵に當り、前蹟を集成して而して後昆を啓發せる也。此時に當り、紀貫之等は其の唐土詩文流行の末運に於て、國文國歌を再興し、菅原道眞は書體を變じて、和様を創意し、佛師定朝は空海時期の佛像を變じて新式を定めたり、畫風の變移、正に此等と相先後す、當時鉅匠、其の必ず畫風の獨立せざるべからざるを認めて、奮て新意を出せると否とは、未だ知るべからざる者ありと雖も、其の能く時情の趨く所に隨て、而して醇雅溫麗の趣を成せる者、其れ

探幽齋

亦良工の苦心を經る者なくばあらざる也。大勢土佐氏に定まり、一たび畫權を操りしより、世々にして名工を出さゞるに非ず、而かも時俗の漸やく變ずる、宋元習風の傳播、先づ佛法よりして、乃ち禪家の興起を見る、如拙周文、北宗の筆意を傳へて、明兆、雪舟の若き大家も亦其の間に崛起せり、此れ實に畫風の再變にして、其の時情が方さに閑雅溫和に飽て、而して豪健沈鬱を愛するの會に當る者、故に狩野氏、脈を土佐氏に通じて、從前畫風を兼修すと雖も、其の勝場は竟に相齋の趣味に歸す。探幽齋は實に當時の金剛なり、室町氏繪畫の骨法風格、集めて之を大成し、融して之を陶化し、北宗の流、此より停滯せり。徳川氏の文物は、岐して兩派となり、一は上行し、一は下行す、下行する者は、淨瑠璃、歌舞伎、洒落本、草艸紙、讀本となり、上行する者は、儒學の流行、國學の復興となり、俳諧は上下の間に出入す、畫風の變遷を觀るに、又其跡を同じうする者あり、又兵衛、一蝶、師宣、祐信等は其の下行の運に應じ、土佐、狩野の筆より出でゝ、而して題目を當代の風俗に取る、此れ已に一變態に屬す、沈詮、伊海等の舶客、大雅、蕪村等の雅人、其の上行の運に應じ、南畫の風格を傳へて、新たに海外の趣味を播す、光悅、宗達、光琳に

別格を創意して、更に一幟を建てたり、是れ正に常則、公望、弘高等が相踵で新意を出せるが若し、而して大勢遂に圓山氏に定まれり、是れ猶ほ土佐氏が中世の畫柄を握りしが如く、爾來百年、百家並び起ると雖も、能く與に盛を競ふことなし。亦實に德川氏文物が寶曆より以て寬政文化に至るの際に於て一變し、蘐園修辭は八家宋詩と爲り、縣居の萬葉は桂園の新派と爲り、淨瑠璃、八文字屋本は洒落本、草艸紙と爲り、荒事丹前は所作事世話物となり、土佐江戸節は豐後節と爲るの時會に膺り、應擧氏卓出の材を以て、寫生の新派を開き、以て當時の耳目を一洗せしの功なり。其の始め狩野氏より入り、而して狩野氏より出でず、其の嘗て南北兩派を參稽して、竟に此に安心の地を求めず、偶然の故に非ずして、苦心の餘に發し、以て其脚を寫生に樹立せるを見るに、蓋し經營慘憺、夷の思ふ所に匪ざる者あらん、何となれば其の既に習ふ所を棄てゝ、其の未だ學ばざる所を創む、成れば則ち其の時好に合するや否やを知る能はず、成らざれば則ち半生の刻苦、泡沫に歸せん、應擧が此際に於けるの情、其の百年の盛名に價して餘ある者、此の如きは豈亦今日の大疑問に對へんとする者の尤も同情を表すべき所にあらずや。

（明治廿八年三月稿）

若し今の世が不平ならば著述といふ者もある世ならずや、之を名山に藏して五百歳の知己を待たんも宜しからずやといふもあるべけれど、既に世に在るが中に生きたる人間に向て感化を及ぼし兼ねながら其身朽ちて其の過失弱點は皆世人に忘れられ、其の不遇のみ世に憐れがらるゝ時に至り、我れ耻かしき空言を垂れし力に籍りて此の名字を不朽にし、身に負はぬ名を得んと謀ること、是も亦邊幅を修飾して當世に容れられんことを謀るものと相距ること幾何なるべき、一生五十年、親戚故舊同胞の涙をも流さしめ得ずして、千古萬古の英雄漢が涙を得たしといひたる樣に薄情な考はつまきじ者と思ひ候（冏南生答日京君書の一節）

惡夢爲因覺尚悲。浩歌一曲起呼卮。顚狂故態何緣酒。
古拙文章不入時。身後千秋當鬼笑。眼前數子有心知。
高才得意竟誰是。非死窮途未足奇。

君道如今思讀書。讀書豈識幽憂始。且看金馬門前客。
四十萬言飢欲死。

始にして儒學、中にして醫學、終にして國學、而して和歌詩文、國史神道は共して其中に在り、文化湊合中心說をば經とし、階級異同說をば緯とし、材を蒐むること博く、斷を下すこと確かに、三十篇を累ね、二百日を經、以て其半を成せるもの、しかも名は關西を冠らしめたりと雖、實は之を借りて德川時代の學問を論ぜるものなり、作者は滔々たる背進仲間に入れらるゝを愧づべきに、自恃庵の作なりと認めて、其健在を祝せる新聞有りしも、笑止なれや。

湖南去住澱河隈。筆硯依然乘興催。回頭讀書飢欲死、賈生有淚志堪哀。治安雖策將何獻。滑稽能維豈慕哉。一部關西文運論。半生蘊蓄發揮來。

是れ太陽第三篇第壹號に載する所、譎大情仙か「南畫陽秋」中の一節なり。情仙已に題詩一律あり、今又此篇を見る、過獎敢て當らざる者ありと雖も、知己の言、棄つるに忍びず、故に更に請て此に附記すと云ふ。

山崎闇齋學派に就いて

山崎闇齋學派に就いて

只今、御紹介を頂いた内藤で御座います。只今、吉村さんの御言葉にありました如く、私は此の十月十六日に、闇齋先生に關する講演を引受けて居りました處、突然發熱したので、それが出來なかつたのであります。此の度又其の話の出來る機會を與へられたことを非常に感謝致します。實を申しますと私は此の闇齋先生に關することは、從來餘り調べて居りません。とんと其の方には其の智識がなかつたのです。それで其の當時、御依賴を受けました時も、いろいろ私はお斷りを致しました。私は其の任でありません。今日の學界で、さう云ふことの任に當る方は、東京の內田先生であつて、外に餘り人に知られて居りませんが、岡次郎と云ふ人がありまず。此の人は矢張り內田先生の先生である肥前の楠本碩水先生の門人であります。今日でも山崎學派の書物をいろ〳〵出版して居られます。其の度に私は幸ひ頂戴して居りますが、非常に篤學な人であります。斯う云ふ人が適任である、私は其の方には暗いので適任でない。色

色御辭退致しましたけれども、私に是非それといふことで、それは尤も縁故のないことはない。前に、此の下御靈に闇齋先生の祠がありますが、其處へ碑文を立てられることがあつて、下御靈の出雲路さんが、二十何年前非常に骨を折られたことがある。其の時私にいろ〳〵御相談があつて、少しばかり微力を致したことがあります。さう云ふ縁故から、是非私にやれと云ふ話でありますから、それではこれから暫くの間、いろ〳〵勉強致しまして、其の上何かお話の出來ることがありましたらと云ふ約束したのであります。幸に出雲路さんの所に闇齋先生の著述が澤山おありになるものですから、夫等を拜借して一生懸命に讀んで居つたのであります。處が突然さう云ふ發熱をしたので、到頭其のお話をする機會がなくなつたのであります。今日其の償ひを致す譯であります。けれども、今も吉村さんからお話があつた如く、其の後平泉澄博士の「山崎闇齋先生と日本精神」と云ふ本を頂戴して拜見しました。當時平泉博士、それから今の內田先生、それから今の日本神道を研究して居られる山本信哉博士、さう云ふ方々の論文を集めて居りますので、拜見して見ますと、皆それに出て居る。私が申し上げることは殆どないと云つてよろしい。つまり此の闇齋先生の偉大なる點は、悉くそれにあらはれて居ります。私

の如き駈出しの闇齋先生研究者は、別に之と云つて申し上げることはないのであります。只其の闇齋先生の偉大なる點はです、豫ねて其の本に出て居ろのみならず、恐らく、平泉博士の前の講演でも、其のことを充分に申されたであらうと思ひますが、只私は、闇齋先生の亡くなられた時よりは、今日の私は少し年を取つて居ります。つまり似たよりの年の老學究であります。そこで闇齋先生の晩年の頃の年になつて、闇齋先生の心境を考へて見ると云ふことは、何等かそこに共通するものがあり得ることゝ思ふのであります。人間は矢張り年に依つていろ〳〵支配されるものです。私が此の六十餘年の學究生活をして居ります其の間には、年に依つていろいろ考へが變ります。さればさう云ふやうに、年によつて考へて見ることは都合のよい點があるかも知れません。此の人間の考へといふものは、大抵自分の頭の程度位しか考へられないものです。偉大なる人のことを考へましても、其の自分の理解する程度しかよく考へられません。それは誰でもさうと思ひます。闇齋先生が如何に偉人でも、私に理解されることは、私の頭だけです。さうでありますから、平泉博士、内田先生、さう云ふやうな今日の學界の偉大なる人の考へられる闇齋先生は、又私のやうなつまらぬ老學究の考へることゝいくらか違つて居る

かも知れません。それは闇齋先生をどちらかと見損つたと云ふ譯でありません。只闇齋先生に就いて自分の理解することが、どれほどか相違するものがあるかも知れんといふ迄であります。それでありますから兎も角私の理解し得られる闇齋先生と言ふのをお話して見るのも、又一つの興味かも知れません。尤も見渡した處、私程の老學究は居られません。或は私の如き老學究の考へることは、諸君は詰らぬものと考へられるかも知れませぬが、どうぞ御辛抱を願ひます。或はいま三十年も年をとられたならば御了解になることもありませう。それで兎も角今日は其の「山崎闇齋先生と日本精神」と云ふ立派な本と、餘り重複しないだけのことを申し上げられるつもりであります。

私は元來本道樂でありまして、直接自分の研究と關係のない本でも、何かこれが役に立つたらう、面白いことがあらうと云ふ本を、時々買ひ込んで置きます。闇齋先生に關するものは、世間でも餘り多くないのでありますから、私の藏書の中にもさう云ふものが餘りありませんでした。然しながら、この日本の歴史である「日本書紀」と云ふ本でありますが、これに註釋を書いた人は多くありますが、その中に闇齋學派の人で有名な谷川士清と言ふ人の著した「日本

書紀通證」と云ふ本があります。この「日本書紀通證」の第一卷に序論がありますが、其の中に闇齋先生の神道主義、或は日本歷史に關する主義と云ふやうなものが、大分載錄されて居ります。それを讀んだことがあります。この谷川士清は闇齋先生の孫弟子になります。もう一つ闇齋先生の孫弟子で、玉木葦齋と云ふ人の著した「玉籤集」、之は私は讀んでも更に分りません本ですけれども、兎に角これは山崎派の神道のことを、大變詮じ詰めた要領を書いたものらしい。然しそれだけを讀んで見ても、とんと何を言つて居るか分らないやうな本であります。段々最近になりまして、出雲路さんのいろ〳〵の御藏書を拜見しましてから、其の本がやつと少し分るやうになりました。其の他に私は闇齋學派の人で、少し後になつて闇齋先生と行き方が異つて居ります人で感服して居る神道學者があります。それは名古屋の吉見幸和と云ふ人であります。此の人は恐らく日本神道の學問に一つの革命を與へたと言つてよろしい人であらうと思ひます。此の人は、從來の神道、つまり日本で神道と云ふ學問が盛になりましたのは、鎌倉の晚年からでありますが、鎌倉の晚年から德川の中頃に至る迄の間の歷史を經て來た處の神道の學問に對して、一大革命を與へたのであります。さう云ふ偉い人であります。これが矢張

り闇齋先生の孫弟子に當りまして、私は此の人の著述を始めから知つて讀んだんぢやありません。それは此の人の著述はいろ〳〵あります。私が讀みました神道に關する本では「五部書説辯」「增益辯卜抄」「宗朝社稷答問」から云ふ本でありますが、から云ふ本があると云ふことを知つたのは、平田篤胤の著述の中に其のことを言つてありましたからで、平田篤胤は「俗神道大意」と云ふ本を書きましたが、之は恐らく明治以前では神道の沿革を知る上に於て、非常に便利な本でありましたので、私は其の本を大變好んで讀みました。さうしますと、其の吉見の著述を引用して居りますのみならず、其の内容の大部分即ち平田の發明と見えた大部分は吉見の著述から出て居ることが分りました。此の吉見と云ふ人には大變私は敬服致しました。兎に角此の三つの本だけ、今日自分でも持つて居る。又それを通讀して見ましたのであります。處がこれは或一方から見ますと云ふと、闇齋先生の神道の流れを汲んで居るのですけれども、闇齋先生の說を大部分引つくり返して、さうして其の新しい說に反對して居るのでありますが、闇齋先生の末派の人からは、闇齋先生派の謀叛人の如く言はれて居ります。どうして闇齋先生派からさう言ふ人が出たかと云ふことは、大變私は疑問を持つて居つたのであります。それの

ことでいろ〳〵前から考へて居つたのですけれども、其の源に遡つて、闇齋先生の學問を研究して見ると云ふことは、之まで機會がなかつたのでありますが、丁度それが今度さう云ふことを仰せ付けられたので、それで闇齋先生の本を悉く讀んだのではありませんが、兎も角先生の儒學に關する本、神道に關する本を、先づ一通り理解し得られるだけは讀んで見ました。それで實は私のその前からの演題は「山崎闇齋學派に就いて」と云ふことになつて居りましたが、今日申し上げることはどちらかと申しますと、其の學派に關することは次になりまして、闇齋先生の學問の内容の方を主として申し上げようとするのであります。之までは闇齋先生の學問と云ふものに對し、一通り内容を見る大きな事柄だけは、皆分つて居るのでありますから、別に此の點はくだ〳〵しく申し上げる必要はないのですけれども、今の如く老學究の闇齋先生に就いて考へたことを、此處に一通り申し上げたいと云ふのであります。先づ儒學の方から申し上げようと思ひます。

闇齋先生は儒學に於ては、固い朱子學の信者と云つてよいほどの人であります。私は闇齋先生と云ふ人は、其の當時に於て非常に頭の穎敏であつた人と考へて居ります。それでありますす

から、たゞ故なく朱子に盲從し、之を墨守すると云ふことはないのですけれども、先生は不思議に朱子には非常に敬服して、之を尊信して居られ、後の人が朱子のことに就いていろ〳〵手を入れる人があるけれども、朱子位偉い人は出るものでない、他の偉い人と云ふのは、いろいろ後から補ひをし訂してもよからうけれども、朱子ばかりは非常に偉いと考へて居られます。それは私は當時では勿論、或は今日でも相當尤もだと思つて居ります。日本の學者にも、いろいろ朱子學のアラを見付けて之に反對する人が出來ました。さう云ふ反對派の學問が出まして、その人々の書いたものばかりを見て、その反對派を通じて朱子學を知ることゝなつてをります。然し朱子の學問をその著書に依つて直接に研究すれば、今日に於ても朱子と云ふ人は支那の學者中に於ても最も偉大なことが充分分る筈でありまして、闇齋先生が何もかも抛つて朱子に感心して居ることは、私は無理でないことだと思ひます。私は別に哲學者でありませんけれども、いろんな點で朱子の著述に興味を感じまして、隨分澤山讀んで見ましたが、今日から六七百年前に於てどうしてあんなに偉い頭を持つて居たかと云ふことに就いて、何時も敬服して居る一人であります。それでありますから、闇齋先生は兎に角、昔からの經書に對しては、朱

子と云ふ人が出て、それに解釋を下した。兎も角朱子と云ふ偉い人が出て下した解釋は非常に優れたものであつて、それは容易に動かすことの出來ないものだと考へられ、それ以後朱子學派の人々の著述に關しては、何でも朱子の原本に據つて考へ、後の學者の補註改修には從はない。其の點餘程面白いのであります。例へば朱子學派の方で、始終教科書によく使ふのは、小學と云ふ本であつて、子供に最初の仕付けを教へることを書いた本であります。其の本に就いていろ〳〵其の後手を入れて直したり、それに註を作つたり、增補したりしたものがありますが、先生は朱子の元の本を讀まなければ不可であると云はれて居ります。それから小學の外に直ぐ出て來ます本で、近思錄と云ふ本があります。其の本に對しても、其の後いろ〳〵いおくりましした人があつた。註を書いた人があり、分類した人があり、いろ〳〵と手を入れた人があるけれども、結局朱子の原本を讀まなければならぬ。然し闇齋先生がそれまでに定めるには、其のあらゆる小學並びに近思錄に關する本を、みんな讀みました。然してそれを比較研究した上、つまり朱子の原本がいゝんだと云ふことに定められたのであります。これは一寸面白いことでありまして、此の朱子學派の學者には、さう云ふ風にその學派の本をいろ〳〵比較研究し

て、さうして善いとか悪いとかを定める人は餘りありません。これは闇齋先生の特色でありまして、それが又後になつて日本の學者がいろ〳〵比較研究することゝなり、本當に勇敢な人達が起つてくる根本をなしたのではなからうかと思ひます。支那の學問を日本人が研究するのに、支那人と對等、或はそれ以上に出で、居りますことは、其のいろ〳〵の本を比較研究することであります。私の方でそれを校勘學と申しますが、實に日本の學者は時としては支那の學者以上に出て居ることがあります。山崎闇齋先生は誰も之を校勘學者として考へたものはありません。校勘學者などと申しますと餘り金に困らない人がいおくつて居るものゝやうに考へてゐました。然るに此の朱子學をやつた闇齋先生を校勘學者として誰も考へた人はありません。けれども今日闇齋先生の著述を讀んで見ますと、闇齋先生が朱子學の範圍に於ける校勘學を、充分にやつてをられる。此の點でも、宋學派、總ての朱子學派の人より一段と親切な遣方で學問をして居つたと言つていゝのであります。

兎に角さう云ふ風にしていろ〳〵と考へた結果から、何でも朱子の書かれた本即ち朱子の原本を讀んで見ると、其の後々にいろんな人のやつたことは、皆其の根本の朱子より劣つて居る

と云ふことになるのであります。それは四書五經などに「大全」と云ふものがありまして、其の後はこの「大全」などに就いてばかり、研究して居たからららしいのであります。闇齋先生の「文會筆錄」など四書に關する意見がいろ〳〵出て居りますが、朱子が出て以來、其の後の人が朱子の註に對して增補して見たりいろ〳〵手を加へたが、大方みんないかん。結局矢張り朱子の元の本がいゝんだと云ふことを言つて居ります。私は最初この四書に關して闇齋先生が當時さう云ふいろ〳〵の本を無暗に澤山見て、どの本がいゝとか悪いとか言はれたとするのは少しをかしい、之は支那人がかう云ふことを言つて、其の說を其の儘採られたのではないかと思つて、其の點に就いて、私も中々人が悪い、調べて見ました。朱子は宋の人でありますが、元の時に有名な倪士毅といふ人が「四書輯釋」と云ふものを書いて居ります。これは其の後になつて「四書大全」の出來る其の根本となりました本であります。「四書輯釋」には朱子以來の四書の註に對していろ〳〵書きました本のことを擧げて居ります。これは「四書輯釋」の序文に書いてありますので、山崎闇齋先生のそれと大體同じ意見であります。それ以後、明の中頃「四書大全」が出來、それから「四書蒙引」と言ふやうなのが出來ました。さう云ふ時代に至

るまでの本を、闇齋先生は自分で一々讀まれる、讀まれた結果判定をせられたのであります。曾て私は「四書蒙引」などがよく分るやうに解釋してあつて之がいゝんだと思つた、處が段々讀んで味はつて見ると、どうも後から書いたものは、朱子の範圍内に宋學を知るだけだ、それで矢張り朱子の本を見るに如くはないと云ふことを考へました。其のやうに此の朱子學派のいろ／＼の著述を皆比較研究して、其の値打を定めました點は、非常の努力と非常によい頭とを持つてするのでなければ出來ない所であります。普通ならばいつでも、後から出來た本が前か出來た本より優るのが當りまへです、けれども朱子と云ふものは全く其の原則から外れて居る。朱子と言ふやうな偉い人の書いたものを、後から手は入れられんものだと云ふことを言つて居ります。これが私は非常な見識だと思ひます。私は山崎闇齋先生の立場から朱子の著書を見て居るのぢやありませんが、矢張り一種の見方によつて朱子の著書を見ました。朱子以後に其の學派の人で偉い學者がとき／＼あります。殊に私の敬服するのは宋の王應麟で、この人の著述は非常に敬服して讀んで居りました。西園寺公と言ふ方は大變學問的の方であります。西園寺公のお話に、一體いろんな本があるが、どれが面白いかと尋ねられましたので、私は王應麟の

「困學紀聞」が大變好きでありますと言ひましたが、此の間お目にかゝつた時、非常に面白いと言うて居られた。西園寺公は學問に就いても良い頭を持つて居られる方であります。さう云ふわけで私は王應麟に敬服して居るのであります。けれでも王應麟の本を讀んで廻つて朱子の本を讀んで見ますと、王應麟の氣の附いたことは皆朱子が氣が付いて居ります。さうして王應麟よりもつと學者風に拘束されずに、いろ／＼自由な立場で古い本を批判して居ります。實に頭のいゝ人であります。つまりそれ以後、元・明時代の學者がいろんなことを考へても、朱子に及ぶべくもありません。それで闇齋先生が朱子を無暗に敬服したのは、故なく敬服したのではなしに、矢張り闇齋先生が非常に頭がいゝから、それだけ朱子のことが分つて敬服したのだと思ひます。さう言ふ點からして闇齋先生はこの朱子と、他の人々の學問との相違點、さう言ふ點を非常にはつきりと見分けました。日本で最初朱子學の開けたのは藤原惺窩先生からでありますが、惺窩先生の時分ではまだ朱子と王陽明との學問の區別さへ充分に分らなかつた。朱王の別よりも更に朱子と陸象山との異同が段々分つて來たのが林羅山からでありますけれども、山崎闇齋先生は最もその別を明かにするに就いて骨を折られたらしいのであります。朱子と陸

象山との違つてゐる點を調べた本が出來て居ります。「大家商量集」と云ふ本であります。闇齋先生が自分で書かれた其の序文によつて見ますと、究理と學問との差別を非常に明かに說いて居るのであります。

それから其の朱子の學問の中で、特別目立つて偉いと考へられますのは、周易に關する考へであリますが、易と申しますのは、昔から伏羲が八卦を作つた、それが遂に文王、周公、孔子を經て今日の易となりました。後に其の註解が魏の王弼に及び盛に流行つて居つたのであります。それが宋の代になりまして有名な朱子學の學問の本源である程伊川と云ふ人がそれに註を書いて居り、さうして段々いろんな說が出來て居るのでありますが、併し從來の人々は伏羲の易を文王が考へ、それから周公がそれに書き足し、更に孔子が書き足して成つたもので、それから後に程子などが更に註をしたのであるが、それは皆根本の易に對してさう云ふ風に段々次々に書き足されて、それに一つの意味があつて成つたものと考へて居つたのですが、朱子はそれに對して、さうではない、易は四人の聖人に出てゐると云ふが、四人の聖人の易は各々別なものであるといふのであります。つまり周易と云ふものは、本は一つであるけれども、それに

對する代々の偉い人の考へと云ふものは又別々であつたと云ふことを判明さしたのであります。私實は闇齋先生が、朱子の易に就いてどう云ふことを考へて居つたか、最近まで知りませんでしたが、朱子の易に關する著述を讀み、殊に先生の朱子の易に關する本を見まして、易に關する歴代の聖人の考へて居ることが、各々別だと云ふことを讀んで、非常に感服したのであります。流石に闇齋先生が朱子をさう云ふ風に考へたのは偉かつたと云ふことを、はつきり承知しました。さうして四聖の易が各々別で、さうして程子の易は又別なもんだと云ふことを言つて居られますから、朱子がさう云ふことを考へた偉さは勿論ですけれども、闇齋先生が朱子のさう云ふ考へが偉いのだと云ふことを、はつきり看破られたその頭が非常に偉いと思ひます。斯う云ふ點が闇齋先生が朱子學に於ける特別な偉い點と思ひます。

それからその外に、彼の「書經」の中に洪範と云ふ篇があつて、即ち五行説と云ふものは、大體洪範に依つて解釋するものであります。之に大變闇齋先生が興味を持たれまして、「洪範全書」と云ふものを作つて居られます。闇齋先生は日本神道などを解釋するには、五行説を採られるのであります。それに就きまして、闇齋先生には根本の考へがあるのであります。從來

我國にも五行の說が行はれて居る。然るにその說をそのまゝ採つて解釋すると云ふ意味でない。同じく五行說を採ると云ふことは、一つの主義を持つて居ります。それは「洪範全書」の序文に書いて居ります、其のお終ひの處に日本開國の昔、伊弉諾尊・伊弉冊尊は天津神に對し古ひの法を奉じて陰陽の理に從つて眞理の始めを訓されました。蓋し宇宙間唯一理であるから、神聖の道を說くに、國土は日出る處、日沒する處と異にして居るけれども、その道におのづから妙契があつて一つであらねばならぬ。つまり天地の道理と云ふことは何處の國で解釋していつても結局は同じ所を行かなければならぬ筈である。宇宙間、唯一つの道理であるべき筈であるから、聖人と云ふものが出て其の道を說く上に於て、國土は日本とか、支那とか相違があつても、其の道は常に一緒でなければならぬと云ふことを考へました。この洪範に出て居る五行と云ふことを以て解釋することは、つまり當時として最も進んだ議論に依つて、神道を解釋すると云ふことを考へられたものと言へます。それで此の洪範と云ふものは妙に闇齋先生の說には都合のいゝ所がありまして、洪範の五行說と云ふものは單に宇宙間の原則として、水火木金土と云ふのでなくして、人間と天道の關係を言うたものなのであります。人間として之が一々自然の現象、

本能に及ぼして行つた、人間が良いことをすれば良い本能が、自然現象として現れる。人間が悪いことをすれば悪い本能、悪い自然現象が現れる、さう云ふ點と非常に關係がある。それから又自然現象が人間と關係を持つと云ふ風に考へたものでありまして、此の洪範と云ふものは闇齋先生の一種の哲學の根本義をつくるに都合がよかつたのであつたらしいが、それに就いてさう云ふ根本思想と云ふものは、日本でも支那でもかはらない筈であるから、其の洪範に依つて說かれたものと思はれるのであります。この洪範には大變骨を折られて、晩年に至つて此の全書の本を仕上げたらしいのであります。これが闇齋先生の儒學の根本義であります。さて其の朱子學の中で、敬と云ふことを大變重んじまして、日本ではこれを「つゝしむ」と言ひました。此の敬と云ふことが大變大事なことであるから、御自分の名前を敬義と申しました。敬は、つまり此の闇齋先生の、朱子學の精神の根本義となつて居るのであります。兎に角さう云ふ意味で朱子學に對する考へを定めて居られます。

以上は闇齋先生の朱子學に對する說に就いて述べたのでありますが、其の他、闇齋先生の獨特な點が多少あると思ひます。それは天文・暦算・貞享暦に關したことにも大變注意深かつた

ことであります。これは闇齋先生と云ふよりも寧ろ其の門人の安井算哲、或は澁川春海とも云うたが、安井算哲と云ふのは碁の家元の名前で、天文家としては澁川春海と申します。此の人は日本では當時、否恐らく平安朝以來始めて出た所の曆算學者であります。非常に曆算數學に精しかつた人でありまして、此の人は曆算に就いていろ〳〵の發明をしまして、其の事が出て居ります。私は又孟子のことから此の人の本を注意をしたことがあつた。此の安井算哲の「三曆考」とか、「貞享曆法」と云ふ本を見て居りますと、闇齋先生の曆算に關する說に、澁川春海說を其の儘書いて居り、春海を非常に感心して、此の春海を、安倍晴明以來の一人だと言ふことを書いて居られます。さうして色々曆算に關する疑問を春海に質して居られます。此の新しき曆法を作つて、之れをたゞし初めたのは、澁川春海であつて、貞享年間に出來た、貞享曆を作つた人であります。此のことだけは闇齋先生が、朱子も未だ知らないことを自分が春海に依つて知つた、之には前後一貫、一つの快いことだと言つて居られます。春海にひどく感心して、それから經書の中に書いてある天文のことにも非常に注意されました。それから日本人が支那の學者に比べて劣ることは、天文曆算に暗いことでありまして、よく天文をやれる學者は、日

本ではさへて至つてなかつたのであります。闇齋先生が自分でそれをやつたのではありませんけれども、自分の門人にさう云ふ偉い人が出た爲に、日本の天文暦算の學問が注意される樣になつたのであります。闇齋先生が兎に角、德川初期に於てさう云ふことに注意して居られたと云ふことが、一つの特色であります。

それから此の佛教に通じて居られる。これは前若い時に坊さんであつた爲に、叡山で小僧さんをして居られる時分に、毎日天台の本を讀まれたらしい。それから妙心寺に這入つて居られる間に禪宗の本を澤山讀んで居られるらしいが、其の點で一寸闇齋先生の哲學に特色がありますが、それはです、禪學と云ふものに對して非常に反對な考へを持つて居られる。禪學の根本のお悟りなんかに關係がありませんが、禪宗と云ふものは、唯授一人と云ふのが代々傳來の遣方であります。例へば達磨から慧可と云ふ第二祖に授ける、二祖から三祖にといふ風に一人から一人に授ける、全部の弟子にお悟りを傳授するのでない。たつた一人一人づゝと云ふ說であります。それも闇齋先生が反對である、唯授一人と云ふことは、ある藝道の上などでは宜しいが、聖人の法では出來るだけ澤山の人を助くべきであつて、たつた一人以外に授けられないと

云ふのは疑はしいとし、其の點から禪宗傳來の歴史を看破つて居ります。これは非常に卓見です。禪宗と云ふものはお釋迦さん以來、達磨まで二十八代傳はつて居つた、達磨から六代さう云ふ風に代々唯授一人で傳はつて來た、さう云ふ傳說であります。天台の方の佛教にも傳來說があり、禪宗にもかやうに傳來說があります。かゝる點に就いては支那で常に議論があるといふことは山崎闇齋先生が知つて居られる。これは禪宗の唯授一人と云ふことには、嘘つぱちだと云ふことを看破つて居られます。此等は最近になりまして支那では大分研究が出來て居ります。私の知つて居ります胡適と云ふ若い學者がそれを研究して居りますが、闇齋先生が既にこの考へを二百年に近い以前に持つて居られます。さう云ふ禪宗、佛教に對して中々際どい處を看破つて居られます。兎に角頭のよいことがよく現れて居ります。此の唯授一人がよく無いと言ふことが、其の後になつて神道の方に影響して來ます。

それから今の日本中心と云ふことに就いては、中國と言ふことに對する考へによつて分る。これに就いては「文會筆錄」にもいろ〳〵書いて居ります。第一日本には、寶祚は天壤と共に窮まりないと言ふ神勅があつて、それから來て居る國であつて、その時分から葦原中國（なかつくに）と云つ

て居るのであるが、我日本を中國として考へることは、餘程後になつても明かならぬ人があつた。闇齋先生の意見は日本だけは中國で他の國が端の方であると言ふ考へではない。それは當時既に渾天儀が出來てをつて、地球の圓説は知つてをられる筈であるから、何れの國でも眞中になつて差支へない。唯こゝの土地が眞中と云ふことはない。各國が中國と言つていゝ、唯支那が中國だと言つてゐるに對して、日本が其の端くれの方だと考へ、向うの夷の國であると言ふのは誤である。たゞ支那のみを中國中華といふのは不可であると言ふことを述べられ、條理ある且つ開けた説であります。兎に角中國の言葉の上に就いての考へでありますが、其の思想が今日、日本中心主義と言ふことに大なる關係があるのであります。

又日本で支那人の書いた記錄に依つて、日本の歴史を考へたと言ふことに就いては、誰でも松下見林と云ふ人を知らぬ人はありませぬ。松下見林の「異稱日本傳」は、支那の記錄と「日本書紀」に書いてある事と大分違ふのを見出しまして、さうして更にいろ〳〵自分の考へを加へて書いたのであります。これは私は松下見林が初めてやつたことであると考へて居りました。所が闇齋先生は松下見林より餘程以前、さう言ふことに注意して着手して居られた。支那のい

ろ〳〵の本から關係のある記事を引抜いて居られます。さうしてそれに對して、支那人の書いたものとはいへ、これは日本歴史家が知らなければならぬ、日本の人が日本のこと、日本の歴史を知らなければ濟まぬと言ふことを、何時でも書いて居られる。つまり松下見林のやつたことの考へも仕事も、既に闇齋先生がやつて居られるのみならず、松下見林の見逃したこと、かの王維が安倍仲麻呂に贈つた詩などを「文會筆錄」の中に抄錄して居られる。さう言ふ處で餘程廣く本を見られ、且つ卓見のあつたと言ふことに感心せずに居られぬ。

それから支那では秦の時、徐福と言ふものが日本に渡つて、それが日本を開いたのであると言ふ說があります。闇齋先生はさう言ふ說は信用するに足らんと言ふことを言つて居られます。それは支那人の私說であるのを日本人がそんな無茶な說の受け賣りを書いて居るので實に見識が無いから、それは少しも信ずるに足らぬことである。勿論日本と秦とは古來關係があつて、秦から日本に來たと言ふことは、「姓氏錄」と言ふ有名な本に書いてある。秦氏に就いて、これは信ずべきものであると述べて居られる。此等を見ますと史學的の判斷として餘程はつきりした立派なものであります。

其の他闇齋先生が最も憤慨されたのは、日本の先祖のことを泰伯だと言ふ說であります。北畠親房、それから足利時代の一條兼良と言ふ人などが、其の說に反對して居るのであります。それに拘らず德川時代の初め有名な林羅山が之を麗々と書いた、さう言ふ怪しからんことを書いて居つた。その後も林家は之を承けて、日本は泰伯の末孫だと言ふ說を唱へて居り、これを日本の先祖にしようとして居つた。闇齋先生は非常にこれを憤慨して、俗儒の說として反駁し、佛敎徒が大日靈貴と大日如來とを附會することゝ共に、造言の罪を犯したものであると言つて居られます。總てかう言ふ點は日本の記錄、日本の傳說に依つて判斷されたもので、其處に國民的精神、日本中心主義をはつきりと持つて居られたことが知られるのであります。それから此の支那の國風の中で、日本人がどうしても我慢出來ぬ、撕辨ならぬことは、殷の湯王、周の武王が、自ら天子を討つてそれに代つて天子となつたと言ふことであります。此のことに就いて闇齋先生は、孔子が、泰伯、文王、この人はつまり其の波瀾を避け臣節を守つて、天子國王にならなかつた人でありますが、この泰伯文王を褒めて湯王武王を貶すと言ふ考へを持つて居るが、これに關することを澤山引いて居ります。さうして支那に於ける禪讓放伐論に反對して

居るのであります。これらは又其の特別な着眼であります。其の極く細かい着眼が中々偉い。之を始めて發見しました例は「書經」の「金縢」と言ふ篇でありまして、これは周の武王が病氣になつた時に、周公が先祖の神樣に祈つて武王の身代りにならうとしたと言ふことを書いて居るのであります。

それに對して矢張り支那の學者、程子などが考へますには、身代りにして戴き度いと祈つても、人間の壽命は天命であつて、それが身代りされるものでは無い、そんな馬鹿なことをしたらうかと言ふ疑問を起しました。それには然し周公が自分は目下の者として、目上の人に代りたいと言ふ精神を言つたのであつて、それは其の天命に叶ふか、叶はないかと言ふことになつて居ります。それから又周公がそれ程命をかけて祈願をなし武王を助けたのに、その後武王が歿して成王の代となり周公を退けた時に、非常な大風が吹いて大木が倒れました。そこで「金縢」の書を啓いて見て周公の志を知り、後悔して周公を呼び戻した處が大木が元の通りに立ち、元の通り繁つたと言ふ話があります。さう言ふ奇怪な話はあるべき筈がないのであります。それに對してから言ふ話は昔からあつたのを、誰か後の人が作つて加へたんであらう。それを闇

齋先生がこれらの說を引用して、つまりさう言ふ奇怪な話に對する判斷を下したのであります。其の他いろ〳〵あります。兎に角僅かなことでも非常に彎拔な見やうをして居られると言ふことは確かである。先づ此の儒學に關することは、それ位のことであります。

それから神道でありますが、神道と言ひましても、どう言ふ風にして山崎派が出來たかと言ふことは、山本博士が大分詳しく研究して居られますので、それを見れば良く分ります。兎に角闇齋先生が其の時代の諸派の神道と言ふものを修めて大成しようとせられて居たと言ふことは確かである。其の內最も大きいのは、吉田神道・伊勢外宮の神道、其の他に有名な神社には又それ〳〵の神道があつたやうでして、上賀茂には上賀茂の神道があり、下鴨には下鴨の神道があり、稻荷には稻荷の神道がある。それを皆一々研究されたらしいのであります。併し兎に角其の中で此の闇齋先生に一番大きい影響を與へましたのは外宮の神道と吉田神道とでありま す。度會の神道は恐らく鎌倉の末頃から起つて居たらしいのであります。其の時に既に此の度會の神道の方では、佛教の本を澤山見て所謂御教の信仰と言ふことを申します。其の信仰を盛にやつて居たのであります。其の他既に宋學の本のことも出て居ります。當時の學者で北畠親

房に神道を教へた度會家行と言ふ人があります。此の人の著述に既に周子の說を引いて居ります。周子は宋の周茂叔で宋學の唱首であります。さう言ふ神道又は卜部氏の吉田神道などが段段傳來して來てさうして山崎闇齋先生が其の傳來を受けられました。其の次第を山本博士が大分詳しく書いて居られますから、其の點を總て省きまして、兎に角其の吉田神道が當時吉川惟足と言ふ人に傳はつて居つた。其の人から闇齋先生が傳授を受けられたのであります。この神道の方では當時「日本書紀」の神代の卷とそれから中臣祓を日本の經書、西洋で言へば聖書と言ふやうに經典として尊んで居たのであります。その解釋が總て神道の主義であつたのであります。その中臣祓の理論とか、「日本書紀」神代の卷の道とか言ふことを解釋されるに就いて闇齋先生はいろ〳〵の書籍を讀んで、それを引證考究した上最後に判斷を下して居られるのであります。即ち昔からの說を多く集めてこれを大成して居りますけれども、其の間に御自分の特別な意見が表はれてをるのであります。例へば吉田の神道は吉川惟足が傳授して居りまして之を唯一神道と言うて居りました。かの佛教の方で言ふ處の唯授一人と言ふことが、矢張りこの神道にも主義となつて居るらしいので、吉田家では唯授一人で吉田家だけに傳來があるので

あります。他の人がそれを受けることは出來ぬのであります。其のことは私が前に申しました吉見幸和の本を讀んだときに、卜部家の規則には、唯授一人と言ふことが書いてあると言ふことが載つて居ります。處が闇齋先生は其の唯一神道を受けたのでありますけれども、唯一と言ふことは從來卜部家で說いてをる以外に、別の解釋を述べてをられる。即ち先程申しました儒敎の洪範の意義と合致して居るとせられたのであります。洪範の說はつまり天上、即ち自然現象と人間の仕事と相應するものであつて、此の人間が天のことにも關係し、天が人間のことにも關係を持つものだと言ふ意味でありまして、道天人を貫く、それが即ち唯一であつて、唯授一人の意味ではない。つまり斯う言ふやうに、從來の卜部家の說を壞しては居りませんが、別の解釋を下して居ります。併し、傳授と言ふものに嚴重な意味を持つことは、それは決して壞さない。卜部家の傳授、或は度會家の傳授を、先生は一々證文を書いて傳授を受けて居られますから、自分が今自分の神道を弟子達に傳へるにも一々證文を書かして傳授して居ります。それが矢張り神道の五部書の中に見えてをるので、それに依つて居ります。兎に角唯一と言ふことは唯授一人でないので、それから又外國の說即ち儒學や佛教と神道とを混ぜて一緒にすると

言ふことがいかんと言ふことは、勿論認められて居りますけれども、其の道は外國の正しい說と合致すべきであつて、外國の說と合致しないで、日本だけで說くと言ふことは唯一の意味でない。即ち道天人を貫く所が唯一であつて、それでなければ唯一と言へない。斯う言ふ說き方であります。

それから其の「日本書紀」神代の卷又「古事記」などに傳はつて居る事は、今日から申せば神話から成立つて居るものであります。其の神話を如何に合理的に解釋しようかと言ふ事に就いて、大變色々と考へてゐられましたので、それに就いては先づ神の出現は四化の別があるとし、四化によつて神の事を解釋しようと考へられました。之は單に神代の神の解釋だけとして見ますと何でもない事ですけれども、之が後になつて我が國の神道の發展に就いて大きな關係を持つて來るのであります。これは「日本書紀」神代の卷の神々には四通りの神樣があると言ふのであります。第一には、造化の神があり、第二には氣化、第三に心化、第四に身化の神がある、この身化の神は人間の形態を備へた神樣である。さて造化の神樣はつまり、天地の現象を名付けたものであつて、人間の形態を備へたものではないのであります。又氣化と言ふことと

は其のものに形態がある。つまり火水木金土と言ふ神靈に形態があるが、これは必ずしも人間の形態となつて居らぬと言ふのであります。心化と言ふのはこれは其の人の頭の中に出來た、つまり思想の上だけで出來た神樣である。さう言ふことを闇齋先生が一々例を擧げて述べて居られる。即ち今日の嚴島の神樣の如きは天照大神のお心持の中に出來た神樣であつて實際にある神樣ではない、さう言ふのは心化の神であると言つて居られます。さう言ふ四通りの神樣を解釋して居られるが、古代の神話は今日でもいろ〳〵の方法で解釋せられます。何れ古代神話の解釋には何か其の古代の思想と思はれるものをつかまへて、それに依つて解釋したければ、神樣の話をうまく說けないものでありますが、闇齋先生は四化と言ふことによつてうまく古代の神話を考へられました。當時としては餘程上手に合理的に出來た說と思ひます。

これから又其の他、五行說に就いて解釋して居られますが、兎も角一方五行說は闇齋先生の考へでは、支那の說でありますけれども、宇宙解釋上一種の哲學として最も信ぜられて居つたから、其の哲學で日本の神代の神話を解釋していゝのだと言ふことから、これで以て神話を解釋したものと見えます。今日でも古代神話を今の道理で解釋する人がありませう。兎に角山崎

先生は洪範五行說が恐らく當時の哲學として、最も理窟に合つたものでありませうから、それでそれによつて古代神話の解釋としたのであります。其處等が闇齋先生の智識の存する所であります」尤も五行說で古代の神話を解釋するのは、度會の發明でありませうけれども、此の四化と言ふのは恐らく山崎先生の發明だらうと思ひます。其の他いろ〳〵日本の語源・神名・地名及び神の事業を解釋するに、多く人間的に說かれてをります。例へば伊弉諾伊弉冊尊の大八島の國を生まれたと言ふのは、それは其の土地に此の勢力なり政治なりが行き渡つていつたことだと言ふ風に解釋されるのであります。さういふ解釋の仕方が後になつて、新井白石などは同じ意味に解釋をしましたが、かやうに人間的に說くこと、又は神樣の四化といふのがいかんといふので、本居・平田のやうに非常に反對するのであります。これは矢張り其の時其の時代の考へであります。然し山崎先生の時の考へがいかんので、本居・平田の考へが確かだといふことは今日言はれないだらうと思ひます。かゝることは確かにその時の最上の哲學、最上の科學とせられてをるものに依り解釋するものだと思ひます。其の點山崎先生は最上の哲學、最上の科學として、儒教、五行說に依つて、さうして解釋せられたものであらうと思ひます。

それから我々が今日神道の方面ばかりではなく、日本の古代の本に就いて、闇齋先生の考へて居られることで、感服するのは斯ういふことであります。例へば其の「日本書紀」といふものを、闇齋先生は非常に感心して之を大變尊敬して居られて、自分が舍人親王傳をも書かれ、親王があゝいふ風に「日本書紀」を書かれたのが、それが尊い處だといふことまで、はつきり書いて居られます。それは「舊事紀（クジキ）」これは聖德太子、蘇我氏が書いたものと傳へて居ります、又「古事記」これは太安麻呂が書いた、これはつまり日本の古への歴史であるけれども、此の二つの本はいづれも古來の傳説を自分の考へで總て一つに定めて書いてしまつてをる。處が、舍人親王の「日本書紀」を書かれたのは、古來傳はつて居る凡ゆる説を神代から語つて來た言葉、殘つた言葉といふものを皆集めて何れも本來の儘、そのまゝを悉く書かれた。かやうに舍人親王が自分の判斷を加へず昔からのものを共の儘に載せて之を傳へられたのは、實に偉い所であつて、實に萬代の達書であると書いてあります。これは今日我々の如き殊に歴史をやつて居る者が見ますと、眞に大卓見であつて、山崎先生がどうしてこんな偉い考へを持たれたかといふことに敬服せずには居られません。それは勿論ずつと後では、支那でもさういふ説

がないでもありませんが、かういふ風に「日本書紀」と題して、公平に多くの說を寄せ集めて自分の判斷を下さないといふことを、はつきり示したことはありません。闇齋先生はさういふ考へを「日本書紀」に對して持つて居られました。大體日本は「日本書紀」其の他の歷史に書いてあること、さういふ傳說は一體何時頃から出來上つたことであるか、今日でも私共の如き國學に淺い者には判斷出來ませんが、兎に角今の如く出來上るまでには、旣にいろ〳〵の思想を以て出來上つて居るものと思ふ。日本純粹の傳來の思想がありませうし、其の間に又支那の思想、印度の思想もありませう。兎に角いろ〳〵のものがあるのでありませうけれども、今日ではそれが寄つて一つの書物になつて居るのであります。其の本の解釋にはいろ〳〵な傳來があませうが、傳來した其の儘を尊重しておくといふことが、一番無難なことであらうと思はれます。舍人親王が旣にそれを實行し、闇齋先生が千年の後に於て其の精神を發見したのであります。それで古代神話といふものが統一されてそこに意義があることは、それは必要でありますけれども、兎に角いろ〳〵の傳說を記錄として保存する上に於てかういふ深重な注意が必要であるといふことを、先生ははつきり我々に示されて居ります。さういふ點は殊に私共歷史

をやる立場から、非常に感服して居るのであります。

大體神道に關することはそんなことであります。其處でこの神道が此の山崎派といふものになつて、どういふ風に發展して行くかといふことであります。闇齋先生の學統は、儒學の方は儒學の方だけで、ずつと續いて居りまして、淺見絅齋・三宅尚齋・佐藤五郎左衛門とか、さういふ人々の學派となつて傳はつたのであります。大體山崎派といふものは非常に師說を重んずるものでありまして、淺見絅齋門下など皆先生の講釋の筆記を非常に尊びました。それから又其の師說を嚴重に守つて師說を重んじて解釋するといふのが當り前でありまして、平泉博士が山崎闇齋先生の一派の學問といふものは、判を押してやるやうに其の通り現れて居ると言はれたのが、それが當り前であります。この中に佐藤五郎左衛門は先生の解釋と違つた點がありま す。かやうに多少相違はあるかも知れませんが、而し大體に於て末流まで非常に山崎先生の解釋といふものは、徹底して傳へて居つたものと思ひます。それは山崎先生自身朱子の說を非常に詳しく研究して、朱子本當の解釋だと言うて、さうして其の當時弟子に傳へられて居るから、後の門人が餘程研究してもそれ以上それ以外に出るといふことが難しいからだらうと思ひます。

其のことは分り切つた話でありますけれども、一例を擧げますと淺見絅齋の門人に有名な三宅觀瀾といふ人があります。始めは淺見絅齋に就いて居ります。それから水戸に仕へまして、それから幕府に仕へました。この人は山崎派には大體行儀固いものでありますが、少々其の點自駄樂な人でありまして、遊廓にも出入する、いろ／＼と少し放縱な人であつたらしい。大體其の思想に於ては少し堅固でなかつた點があつたのでありませう。水戸の義公が歴史を編纂する時にその彰考館に集つたいろ／＼の學者達が評論を書いた「義公答問」の中に、三宅觀瀾は水戸に行つた時に家族を連れて行かなかつた、只一人僕を連れて居つただけで、始めから水戸に居る心がなかつた、それで水戸の人が三宅觀瀾の遣方はどうも輕薄でいけぬ、と言うたことが書いてある。さういふ人でありますが、最近闇齋先生展覽會がありました時、その文章を見ました。兎に角「大日本史」に將軍傳を作つたといふことは一つの疑問がありまして、不思議に思つて居つたのですから讀んで見ました。讀んで見ると上手に書いてある。自分の身を處する上、三方四方中々うまく書いてある。これは話の通りうまく世渡りをする人間が書いたものであると私は見ました。然るにその觀瀾が儒學の上に於ては全く闇齋一點張りです。微細な點までそ

の說に從つて居ります。此の時分に日本で朱子學といふものが立派にはつきり出來上るやうになつたので、自分達が、朱子學が分るやうになつたのは、山崎闇齋先生のお蔭だといふことを書いて居ります。闇齋先生は學問の流儀に對してやかましいのでありました。元以後の學者は認めませぬ。然し明の學者では、薛瑄・丘濬、それから李滉、此の三人を非常に確かでいゝとして居ります。朝鮮の學者でも李滉即ち退溪を稱揚して居られます。餘談でありますが横井小楠はこの李滉を尊崇しました。然るに觀瀾が朝鮮の人に對して言つたのを見ると全く闇齋先生の說の儘です。かういふ點では、山崎門下としては餘程横着者であつたが、學說に於ては矢張り闇齋先生其の儘を守つて居つたといふことがはつきり證據立てられました。この師說を嚴守するといふことに依つても闇齋先生が二百年以前に於て考へられた處が德川の末に至つても、立派に其の意見が勢力を持つて居たといふことが分ります。この長く勢力を持つて居た學說がつまり一つの思想上の勢力になり、國家に影響を與へました。

其の他國體論に就いても中々喧しい議論をした人があります。遊佐木齋といふ仙臺の人であります。私は此の人の書いた本を見ました。其の本は山崎派の中でもいろ〳〵に考へた人であ

ることいふことの證據にもなりますし、かういふ神道系の人でも又必ずしも山崎先生其の儘の說でなく、その以外にもいろ〳〵考へたことが知られます。それから又其の當時の神道に對する普通の學者との意見の相違といふものが分ります。その中に神功皇后論といふのがあります。「日本書紀」には神功皇后を仲哀・應神兩天皇の間に一代立てゝありますが、これは天子とたられたのではないからと言つて史家は之を應神天皇の方に附けました。然るに闇齋先生が「倭鑑」と言つて一つの歷史を作る筈であつた、その「倭鑑」の目錄には仲哀天皇紀の所に入れて居られるのであります。所が木齋といふ人はさうでない、昔のことは今日の事情を以て測り難い、今日の事情で判斷して、神功皇后紀を削るとか言ふのは時代錯誤である。昔の考へは後世と違ふから、それで神功皇后紀があつてもかまはないではないかと言うて居ります。之も一種の見識だと思ひます。山崎先生の考へに對して中々うまい考へを持つて居ります。兎に角日本の國體といふものは支那の正統論といふもので解釋が出來ぬといふことを、遊佐木齋が明かに發見して居る。日本といふものは、支那から見ると大變遲く開かれて居る。丁度其の頃二千何百年代にしかならぬ、支那ではずつと古くから開けて居るのであります。兎に角支那の極く古

代のことを考へるならば、日本の古代と一緒に考へていゝけれども、支那の國體正統論などで日本の古代のことを判斷してはいかぬ、どうしても其の時勢、其の時代といふことがはつきり分らず、後世から道德的の考へで判斷するといふことは、いかぬといふのであります。これ等が又おのづから國體論に就いて一種の發展を見るに至りましたのであります。さういふ、神功皇后紀を歴史から削るといふことは、後世天子の命令で削れと言はれるのは別の話で、歴史家がさういふ遣り口で勝手に日本の朝廷で今迄書いてあつた歴史を削るといふことは、一つの議論である。かういふことから國體論は段々發展して居るのであります。そこで餘程面白いのは、木齋が室鳩巣と神道を論じたことがあります。鳩巣が學問なり道德なり總て唐の三代の道、孔子の教といふものが最上で、それ以上のものがない。日本なんぞ田舍の考へで話とならないと言うた。それに對して遊佐木齋が非常にいろんな議論をして居るのであります。遊佐木齋といふ人は山崎派の考へであつた日本中心主義といふものに對して非常に熱情を持つて居る、非常に見識を持つて居つたといふことが分り、山崎派の國體論の發展の一端がよく分ります。

それから最後に神道の學問の方の發展に就いては、先程申しました吉見幸和といふ人は、山

崎闇齋先生の説に對して謀叛をしたと言はれて居る人であります。何故かといふと、神道を傳授された結果として五部書といふものを非常に尊いものとして信じられたのであります。五部書といふものは何れも度會派神道の外宮の神主の僞作だといふことを申します。これは其の度會派の中で今の闇齋先生の先生であつた延佳の子延經といふのがあります。これは博學の點ではどうか知りませんが、比較的ものを研究する點に於て親より偉いと言はれた人であります。此の人が「辨卜抄」といふものを書いた。それは吉田の神道といふものは、これ古からの傳來でないといふことであります。又吉見といふ人、これは闇齋先生の一門人正親町卿からいろいろ教はつたといふのでありますが、此の「辨卜抄」を又新しく研究増補して「増益辨卜抄」を作り、更に吉田神道を破つたのであります。此の幸和が山崎派神道から出てその説に反對して居るのでありますが、よく之を見ますと、その學説の根據は實は先生に出づるのであつて、かの度會派の伊勢外宮の祭神説に對する反駁の如き、かの四化説から出て居るので、これは餘程注意を要する所であります。前に述べた通り五部書といふものを闇齋先生は伊勢で昔から傳はつて居つた確かなものだと信じて居りましたのですが、吉見はそれはすつかり鎌倉晩年の僞作

だといふことを言つた。それよりもつと議論の面白いのは、伊勢外宮の神道では、内宮は天照大神を祀つてあるが外宮は豐受大神宮と言つて居るけれども、實はあれは國常立尊が祀つてあるのである。外宮の方には天神七代の一番最初である國常立尊を祀つてあるから内宮より外宮の方が尊いものだと唱へて居つた。かういふことを唱へたのは、豐受大神ではいつまでも内宮の下に付けられねばならぬからといふので、外宮を尊くする爲に作られた說で、それを靑見が非常にうまく看破つたのである。それは「宗廟社稷答問」といふ書物を著して、伊勢大神宮は天子の御先祖であつて宗廟に違ひない。其の他の日本中の神社は社稷である。外宮は社稷である、外宮を實の宗廟だといふのはそれは間違つて居るといふのである。然るにそれは内宮・外宮の區別に於て非常に大事件の議論であります。其の事を靑見幸和が申しましたが、それは大變なことであつて、闇齋先生はそこまで考へて居らなかつたのであります。併し其の點で段々調べて見ると、幸和の闇齋先生に反對して居ると言はれて居るのは、私は疑問だと思ひます。それは、其の議論の根據は闇齋先生に出て居ることが判りましたので、大變面白いことです。それはどういふことかと申しますと、闇齋先生の說は先程申しました四化であつて、造化の神

というものは人間でない、これは皇室の御先祖でない、皇室の御先祖と言へばつまり天照大神であつて、其の御兩親は伊弉諾尊・伊弉冊尊であつた。造化の神は天神七代の、天神六代までを指すので、この時の神には神社といふものはない、故に天神七代の始である國常立尊を外宮に祀る筈がないといふ、非常に面白い考へ方である。吉見幸和がさういふことを考へた。闇齋先生の考へました造化の神、心化の神といふ、其の理論を根據として吉見幸和がさういふことを發見して、それで其のどうにも日本で國常立尊を祀つて居る神社はないといふ論になるので、即ちこれは日本の皇室の御先祖でない、かういふことを說いて、それで外宮がつまり宗廟でない、社稷だ、天下の神社といふものは、內宮を除いては大部分は皆社稷であるとするのであります。但し石淸水八幡宮に就いては、別に考へを持つて居るさうであります。更に內宮外宮の區別をさういふ風にやつたのは偉いことで、闇齋先生の考へ付かないことを考へたものだと思ふ。當時は闇齋先生の說に反對すると、謀叛人だと言ふ人があるさうでしたが、而しさういふことを發見する根本は、闇齋先生の原理に依つて發見した。それでつまり此の吉見幸和といふ人も山崎神道を原則として居る神道であります。此等のことを闇齋先生のやうな偉い人が考

へて行かれて、其の門派にもいろ〳〵偉い人があつて、先生の考へた原則からいろ〳〵に應用して學問となり、道德となつて發展すべき其の種を皆先生が持つて居られたといふことが段々に分ります。

又闇齋先生が儒敎の方で敬といふことを尊びます。これが大事なことで、この愼み處むといふことが道德上最も大事なことである。これが山崎闇齋先生の五行說に引つ附けられまして、遂に神道の原則となり、それが一方では儒敎の原則となつて居るのであるといふのが、山崎先生の考へであります。それに對して淺見絅齋の門人に若林强齋といふ人があります。其の人の學說は知らないが、私は只谷川士淸の「日本書紀通證」によつて若林先生の說を讀んだのであります。其の僅かの言葉に大變感心しました。それはツ、シミといふことは自然の道をツ、シムといふこと、即ち當然の歸結であつて、これが人間生活上の原則であり根本であると申しました。それだけのことを若林は言つたのであります。併しこれをうまく演繹すれば日本に於ける、哲學思想の根本をなし得る名說であると私は思ひます。それが闇齋先生の孫弟子まで、さういふ考へが發展して居つたのであります。さういふ風に段々又山崎先生の後へそれに相應し

て門流の偉人があつて、其の爲に段々學問が發展して行くのでありますけれども、兎に角此の神道の方に於ては、吉見幸和の如き特殊な發展をした偉い人を見出しました。其の他には遊佐木齋などの國體論に於て一種の考へを出した以外に、哲學でも、儒學の方でも、どれほど闇齋先生の說を發展さしたかは充分には知らぬのであります。或はありませうけれども、私の見聞が狹くて其處まで至りません。兎も角山崎先生の考へといふものは神道、其の他の學問上にもいろ〳〵その考へを發展せしめ、いろ〳〵新しいことを考へしめて居るので、どの學派の發展に就いては餘程意味深いものがあるのであります。此の山崎先生一派だけの發展でも、日本國民思想の發展を充分に見ることが出來る、之を希望するのであります。

私が最後に申し上げたいのは日本の其の學問、儒學に於て、神道に於て、國體論に於ても、いろ〳〵の點に闇齋先生の思想といふものが、日本の文化に大きな關係を持つて居るものでありますから、今日に於て山崎闇齋先生を研究するといふことは、餘程必要なことであらうと思ひます。東京には崎門會が出來て居ますし、京都は闇齋先生の鄕里たる關係がありますから、教育會を中心として、私は一つ闇齋先生の全集を編輯して出版して戴きたい希望を持つて居る

のであります。若しさういふことで、此の教育會なり、崎門會なりが皆御同意であれば、それを今日に於て實行することは容易なことと思ひますから、成るべくさういふ運動をして戴きたいと思ひます。若しさういふことになりましたなら、皆様もそれにお力添へを願ひたいと思ひます。

解題

石濱純太郎

創元社が內藤湖南先生の舊著「近世文學史論」に、未刊の先生の講演「山崎闇齋學派に就いて」を附して出版するからとて、その校注と解題とを僕に依賴しました。僕はその任に當るべきものではないと云つて斷りましたが、どうやら令嗣乾吉君の意志でもあるやうなので、已むを得ず承諾する事になりました。湖南先生のやうな極めて博大にして又極めて精確たる學者の遺著を校讎する事は、僕如きお粗末なる人間では到底不適當でありますが、かゝる偉大なる先生の遺著の流傳に就いて幾分なりとも御手傳ひを爲し得るは光榮なりとも思ひ、鉛鈍の駑馬に鞭うつて從事しました。それでも十分に校し得たるや否やは分りませんから、讀者か校者の粗漏を以て故先生に累を及ぼさないやう願ひます。

「近世文學史論」は先生の例言にある如く、先づ「關西文運論」の題下に大阪朝日新聞紙上に

現はれたもので、德川三百年の文化を論じて、儒學醫學國學の三項にて一先づ了り、之を删改補修して一册となし、附錄に三篇の論文を加へて名を「近世文學史論」と改めて、明治三十年一月に東京の政教社から出版されたのであります。當時非常なる聲譽のあつたものだと聞いてゐます。然し其後先生は此著に慊らず思はれたかして、或る講演では次の樣に言うて居られます。「私は昔若い時に――今日になれば詰らぬもので、見付け次第燒きたい本でありますが、近世文學史論といふものを出版しました。朝日新聞に私が居りました時に關西文運論といふものを書きましたのが之で、それを纏めたのでありますが、其本の趣旨は、大體日本の文化は關西から興つて、それが方々に流れて行く、殊に江戶といふものが大きな都會になつて、江戶の文化が關西に對抗するやうになつてから、江戶が文化の中心のやうになつたけれども、實は之は關西であつて、關西から出たのだといふことを言ひたい爲に作つた本でありますが、至つて粗雜なもので、今になつて考へれば、若い時に詰らん本など書くものでないと後悔して居ります。」先生の遺著「支那繪畫史」の附錄「本邦南畫の鑑賞に就いて」に出て居ります。そこで乾吉君も本書の再刊については躊躇せられたらしいのですが、先生にしては至つて粗雜なもので

したらうが、何しろ後生のもの共は之によつて學問の指針を得ると之を搜求するに急であるし、先生にしては詰らん本かも知らんが、その文化湊合中心説だの文明中心移動説だのは今尚ほ我等に敎ふる所が多くあるので、忍んで之が發行を許されたのは誠に難有い事です。所で本書は漢文體の文章語で書かれてあつて大變難かしいから注釋を入れて讀易くしては如何と云ふのでありましたが、少し位の注釋では何にもならず、詳細な事をすれば却つて翻讀の碍けとなりますので、之を止めました。さうして句點の所をあけ、書名は之を括弧し、又漢文の引用で反點のなかつたものには之を付けました。其他一切元の儘にして、例へば欄外の歿年享年の後の研究にて訂正さるべきものも其儘にし、誤字は先生の正誤表を本として尚ほ多少を正しました。

「山崎闇齋學派に就いて」は先生の講演で、從來未だ印刷にならなかつたものであります。この講演は、もと昭和七年十月十六日に京都府敎育會主催の山崎闇齋先生二百五十年記念講演會に於て先生が平泉澄博士と共に講演せられる筈であつた所、當日先生は病氣の爲め出場出來ず中止となつたが、同年十二月府敎育會主催の冬季學校の日本敎育講座に於て特別講義として十二月二十七日京都會館で講演せられて前約を果たされたのであります。その講演の速記を本と

して玆に出版されるのであります。この速記はあまりよく出來てゐないのでありますが、幸ひにもその講演を聞かれた出雲路通次郎氏の補正がして頂いてあつたので大いに助かりました。僕は講演を聞いてゐず、又神道の事など知りませんので、出雲路さんの補訂を頼りに意味の分るやうにと校正したに過ぎません。尚ほ二三ヶ所どうしていゝか分り難い所がありますが、餘りいらひ立てするのはいけないと思つて筋の通るだけにしかして置きませんでした。此等を以て先生に累を及ぼされないやう願ひます。この講演の內容を知りたいと思つて之を借覽された方が大分あつた樣に聞きますが、誠に他人の言ひ及ばざる所を發せられた名論でありますので、之が發表を許可せられた乾吉君に我々は深甚なる感謝の意を表したいと思ひます。たゞ僕の力が足りずして校正の行屆かないのは御詫び申す外ありません。

尙ほこの兩著に關し、その善を揚げその微を闡する如き解題を書くやうにとの依賴もありましたが、それには私は任へないのであります。私は只校字の務に服する丈が力一ぱいであります。校字の出來を玆に書き付けて解題に代へて置きました。

編輯責任者　山根德太郎
西堀一三
校正責任者　田代信行

近世文學史論

——日本文化名著選——



昭和十四年五月十五日 印刷
昭和十四年五月二十日 發行

定價 壹圓貳拾錢

著者 內藤湖南

發行者 矢部良策
大阪市西區靱上通一丁目三一

印刷者 井下精一郎
大阪市西區阿波座中通二丁目

發行所 創元社
東京市四谷區愛住町一九
振替東京一五六五番
大阪市西區靱上通一丁目
振替大阪五七〇九九番

日本文化名著選 目錄

文學博士 三上參次
文學博士 西田直二郎 監修

非常時局下にあつて如何なる書物を出版すべきかは、深慮を要する問題であるが、眞に國民の血となり、糧となる書物を作ることが、出版者としての最上の良心であると信ずる。今や國民一般が自國文化についての自覺を、より强化せねばならぬ情態に應へ、從來專門學者の書齋に空しく埋れてゐた價値高い研究のうちより、その精粹をぬき、又これを平易、簡明に說いたものを嚴選し、日本文化の全體的知識を把握し得られるやうと微力計畫、幸に斯學先進諸氏の大いなる援助を得ることが出來、實に空前の實質を持つ本叢書を刊行し得たことは、發行者として感謝にたへない次第である。この上は更に同胞諸賢の御同心を得て、この小出版が日本民族躍進の一助ともなるべく願ふばかりである。

創元社 矢部良策

一、文化史の理論と發達

文化史の發達　文學博士　西田直二郎

二、文化史總記

東亞文明の黎明　文學博士　濱田青陵

古代の文化　文學博士　西田直二郎

日本中世史　文學博士　原勝郎

近世の日本　文學博士　內田銀藏

三、法制・社會・經濟・外交

日本經濟史概要　文學博士　內田銀藏

國史上の社會問題　文學博士　三浦周行

戰時三論　文學博士　三上參次

日支文化の交流　文學博士　辻善之助

日本民族史綱要　文學博士　喜田貞吉

四、宗教思想教學

日本古代史と神道との關係　文學博士　久米邦武

日本佛教史綱　文學博士　村上專精

宋學の源流　文學博士　西村天囚

五、文學藝術

東亞美術史綱　フエノロサ
近世文學史論　文學博士　內藤湖南
日本庭園考　文學博士　横井時冬

六、史傳
義經傳　文學博士　黑板勝美
豐太閤の私的生活　文學博士　渡邊世祐
樂翁公と其の時代　文學博士　三上參次


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02951 2381